

LACETELLE

0056

-the CLEATURES-

Kako Kondo

Active Factory Presents

有史以来数千年、と人という。その間に我々は進化、発達を繰り返し、今や文明の頂点にある、と。この大地がどうやって生まれ、いつごろから存在し、その上で生命がその営みを始めて数億年。広大な大陸に果てが見えなかった時代は、たった数百年前のことだと。国という集合体が存在していると気付いたのは数千年前、そして、その争いが始まったのもその時代だ。この世界で最も複雑に進化したその最終形態と言われる生命は、それでも一つの愚行を忘れられずに繰り返している。未来永劫続かないことを願いながらも、その影で永遠に、それだけを忘れることはないだろう。そして文明の頂点にある人間が、持てる科学力のほとんどを注ぎ込んで生み出したものはその愚行を更に「進化」「発展」させた。人の姿を模した巨大兵器、通称マシン・メイス。愚かな争いを続ける、機械のかたまり。

「ラステル、というのは、古い昔話に出てくるヒロインの名前だそうだ。いや……女神の名前だったか」

それはその小さな国の歴史を語る時、誰もが口にする言葉だった。広大な大陸の真中にあるその余りにも小さな国は、建国以来、平穏というものを知らない。その土地は、と言うべきか。人が暮らし始めてから争いが絶えたことは殆どなく、常にその場所では何ものかが戦い、その覇を競っている。大陸は広大だ。かつて「果てのない」とまで言われたその土地が一つの球体の上のごく一部だと知った時、民衆はどんな心地がしただろう。驚き、その向こうをのぞいてみようと思っただろうか。それとも、自分の所有する土地を広げようと出かけていこうとしたのだろうか。砂漠とも草原地帯ともつかない広い大地の上を、そのバスはひたすら走っていた。一応、舗装された路面の上らしいが、その窓から見える光景はひたすら空と大地と、地平線ばかりだ。ろくに凹凸も見られず、きつい空の青と乾いた白い土とのあまりの色の落差に、目が眩みそうにさえなる。草は生えているといっても本当に地を這う程度にわずかにその姿を見せているだけで、生い茂る木々などというものは一向に見当たらない。これでも一国家の所有する土地なのか。見ている側はそう思わざるを得なかった。こんなにも乾ききった、やせ細った土地にどうしてひどく執着するのだろうか。人の姿はおろか、ほかの生命の影さえそこには見当たらなかった。もっとも、走る車両の小さな窓から覗いているだけで、それらの全てが見えるとも限らなかったが。三十人乗りのその車両の中には、ちらほらとしか乗客の姿はなかった。荒野を眺める目が、今度は車内を眺める。最後部から一望する車内には、頭が五つほど見えた。ずいぶん前のほうに並んで二つ。時折話している声は高い。たぶん若い女性だろう。それから、ちぐはぐに離れて、二つ。一つは金とも茶ともつかない髪の色で、もう一方は短く刈られた、これも白か銀か判別しがたい微妙な色をしている。最後の一つは自分だ。プラチナ、と呼んでも差し支えない髪は恥ずかしくない程度に短く切っており、頭を振るとさらさらと揺れた。前日の夜きれいに洗って整えはしたものの、昼を過ぎる前にはすでにほこりにまみれていた。ここは、そういうものがまかり通る土地ではない。わかっていたつもりが、どうやら認識不足だったようだ。彼は苦笑を漏らす。そしてまた、窓の外を眺めた。

エレススと呼ばれるその大陸は、とてつもなく広い。ほぼ中央をメリノ、パナケア、と呼ばれる

二つの大河川が流れ、大陸は東と西におおよそ分けられている。東部は大山脈と森林地帯が広がり、メリノの支流と呼ばれる多くの河川が潤す大地には約三百もの国家が展開されていた。そしてそれらは一つの王朝によって統括され、巨大な連合国家組織となっている。ラビスデン帝国。その歴史は長く、一説によると五千年を越す記録が残るとまで言われ、歴史、規模ともに、エレスには並ぶ国家は存在しえない。中心となる主催国家、バッケンヤック・ラビスデン皇国はそれだけでも大陸で一、二を争う程の巨大国家であり、内包する国家は三十以上もあるとされている。

対して河川の西側には平原が広がっている。気候はやや厳しく、そのため定地耕作がままならなかった時代の名残で、人口は東側に比べて格段に少ない。歴史は東側に比べて浅く、記録が始まったのはわずか二百年前、東側の人々が二つの河川を越えて移住を始めた後からだ。それまで西側にあった小さな国家は、そうした移住者により植民化され、時には東側の国々の占領下ともなった。そうした背景のためか、西に展開される国家の多くは共和制を敷き、連合組織を結成して東側と対峙を続けている。五十余国あるその筆頭がカシウル共和国である。勢力は、東の帝国の三分の一ほどで、独立国家と認められた国家郡と東側の対立は今も絶えない。

その河川の流域地帯に、更に小さな国があった。ラステル四国連合体。かつては東と西とを繋ぐ交易で栄えたその土地はやがて両陣営の衝突の場所となり、西と東の文化が絶妙にブレンドされた豊かな土地は、今や荒廃の一途を辿っている。その大地が東西の陣営に分かれて以来、その土地は目まぐるしく姿を変え続けてきた。そしてその場所は、どちらにも与することの叶わない人々の吹き溜りともなり、時には両陣営によって攻撃されることもあった。ラステルの歴史は、ゆえに戦史そのものである。大河の流域という恵まれた環境にありながら荒野が続き、その大地の上に生命が存在しないのはそのためでもあった。その場所は戦いの度にその主を変え、人々に安息は訪れず、ただ続くのは外の間借りの形で行なう戦争のみ。初めその両陣営側から交易のために、と中立地帯として設置された二つの都市は、長く続く他人の争い事をせめて排除しようと連合体を組織して独立を図った。その意見は両国に聞き入れられず、建国宣言より五十六年間、未だに国家としては認められてはいない。そこはその小国内に広がる、元は草原と呼ばれた場所であった。繰り返された戦闘の果てに植物らしいものはほとんどなく、重火器が踏み固めた大地には命が宿ることもできない。ただひたすら、滅びていくだけの土地だった。兵器による蹂躪ではなく、耕作機によって土が起こされれば、大陸内でも有数の穀倉地帯に変わるであろうその土地を、耕すものは誰もいない。けれどその豊かさが今のラステルを支えている。長きに渡って河川によって作られた土地は効率良く実りをもたらし、そしてまた、彼らはそれを活用する術に長けていた。皮肉なことに長い戦いの中で、いわゆる籠城が得意になっていたのである。そして戦争のさなかにも河川を利用して物資の運搬が盛んに行なわれ、逆に狭いことがそこに物不足をもたらさない結果を生み出していた。周囲への道を閉ざされた真ん中の国はそうして生き延び、小さいながらも自給自足の叶う国家体制を持ち始めていた。彼らは更に物資の二次使用にも長け、そのリサイクル率が八割以上という、驚異的な「再生率」を誇っていた。主に重火器類などの軍需物資、更に絞り込めば鉱物資源は、それが再利用不可能になるまで使われ続けた。そうした中での兵器開発においても、ラステルは低予算ながら大陸一を誇っている。それ

がラステルを未だに生き残らせている一つの要因でもあった。元々、両陣営のどちらにもいられない人々によってまとめられた、要するに逃亡者や亡命者によって作られたその国家の中には、そうした先端技術を持って逃亡した人材も多かった。まさに大陸の吹き溜りだ。棄てられたものも逃げ込んだものも、その場所で自由を獲得するや、今度は生存のために惜しげもなくその技術を提供し、また発展させていく。古い歴史の国はその歴史に異常なまでに固執し続け、次の発展のための一歩目が、その大きさゆえに踏み出せず、未だ飢餓と戦う個人主義者の国々では、まずその問題を解決することが先決であり、個人主義が行き過ぎるためか足並みが揃わない。ラステルにとってその小ささと国家性質は強みであった。それゆえに、長い期間に渡って抗戦し続けられたのだ。初め二つだけだった連合国家は今や四カ国に増え、その国力も徐々に高まりつつある。国民はこの機に完全な独立を遂げようとその軍備を更に強化した。それが四国連合体国防特務機関、通称「ミッシュ・マッシュ」の結成の始まりであった。

『この四十年代における抗戦の勝利により、ラステルは新たにヌウイを得、現在四国の連合国家として機能しています。その一因を造り出したのが、これ以降戦場に投入された、汎用人型兵器、マシン・メイスの存在です』

バスの最後部の座席で、彼は退屈しのぎにイヤホンから流れる教則テープのアナウンスに耳を傾けていた。今まで何度となく聞かされ続けてその内容はほぼ暗記していたが、それでもただひたすら続く荒野と、目が痛いほどの青い空を見ているよりは幾分気が晴れるだろうと思ってのことだった。けれどやはり、退屈は変わらない。一体どれほど走っているのか見当もつかないほど、その光景は変わらなかった。荒れ果てた土地、時折、兵器の残骸。ここでは耕作はされない。もっとも、その国の地表にあるのはただ戦場ばかりだった。国土の狭さはある意味強みでもあったが、同時に最大の弱点だった。平野が続くその土地には隠れる場所と言うものがろくにない。規模の大きな空爆を少しでも受けたならその後残るのは焦土のみだ。人は愚か、その他の生き物達にとっても、それは給ったものではない。だからラステルの人間は、地上には暮らさない。巨大な地下都市を建設して、そこでその全てを営んでいるのだ。地上にあるのは軍事施設と戦場のみであると言えた。そして、その関係者以外が居住することさえ、そこでは禁止されていた。故に走る車両はすべて軍用であり、地面の上にあるものは全て軍のものであると言っても過言ではなかった。それも、彼はいやと言うほど聞かされていた。ここで活動を許されるのは軍事関係者のみ。一般市民の全ては、それに殆ど関与することなく、地下都市で平穩に暮らしている。政府は何がどうあっても、この国は生存できると主張したいらしい。そして暮らすに値する国である、とも。元々地面の下で暮らすなどという、異常な形態を持った国家でもなければ、そうした特異な民俗文化があるわけでもない。広がる戦災を極力押さえるための避難豪として作られた大きな地下施設に、政府機能を移動させたことが元はと言えば始まりだったのだ。この国は平和で住みやすく、身分格差もなければ貧富の差も少ない。思想の自由が守られ、それによって不条理な弾圧を受けない自由の国。ラステルの国民たるメリットの最大のものがその自由であった。人々は自由を求めてここにやってきたのだ。だがしかし、それも国家の始まりこの頃に掲げられたテーゼであって、六十年近くの時がたってしまった現在ではそんな綺麗事よりも、戦火のない安定した生活の方がよほど大切だと言う人間も多い。軍事と民間を厳しく隔てる理由には、そうした

背景も存在した。安心して暮らしていけるなら、大きな国に移住してもかまわない。昨今そうした風潮も少なくなく、また、敵国もその事実を黙認する形で受け入れている。もっとも、実際国外逃亡、いわゆる亡命が発生する件数は少ない。国境地帯はまさに戦場であり、身を守る術のない生身の人間がそれを越えることは、ほぼ不可能に等しいからだ。だから、と、あるものは言う。この国は平和でなければならない。一般市民と軍人とは分け隔てられていなければならない。その機密を守るためにも。そして、国という組織を守るためにも。実際ラステルは四国の連合と名乗ってはいたが、その実体はまさに鷓合の衆だった。四国連合体、四つの国が協力するふりをして作られたそれは、一応協議会をその頂にし、その下に各国の政府をおいてはいるが、彼らが友好的であるかというところとは言い切れない。主席国と言われる国、スティラは元々西側の国家の、第二席の国ソレアは東側の、それぞれ交易のための出先として開かれた土地であり、暮らしている民族も違えばその言葉や習慣も若干異なる。第三席国家リウヌは国内クーデターによって敵国ラビスデンから切り離された、元はその支配下にあった王国であり、現在もその王室が残っているレベルである。更に、特別自治区として十五年ほど前連合の領土となったヌウイに至っては、戦闘の勝利の末に獲得されたラビスデン側の土地である。仲良く足並みを揃えるのは難しい。彼らがかろうじて結束できる事実と言え、かつてどちらからも攻撃されたという、その歴史的事実一つに他ならなかった。それで一体、誰がこの国を守りたいと言うのだろうか。ここにそれだけの価値があるというのは、一体どこから来る言い分で、その根拠の元に巨費を投じて軍を運営する価値は、本当にあるのだろうか。そんな思いを巡らせながら彼はそのイヤホン^{スーパーエリート}を耳から外した。変わらない景色と、聞かされ続けた説教じみたテープは彼を退屈から救い出すことはなかった。余りに退屈すぎて、時間が過ぎていると言う感覚がまるでない。それとも、これから赴く場所のことで、体が無意識に緊張でもしているのだろうか。彼はため息を吐き、また外を見やった。そして、生まれて初めて見る地表がこんなにも殺風景だったことに、改めて幻滅していた。白い肌の色と、水色の瞳、表情は疲れて、そしてどこか冷めていた。まだ大人になり切らないその造形とはアンバランスな童顔だったが、彼はそれでも特務機関の正式な構成員であった。青紫と灰色の中間のような色に染められたアーミーコートの下には、その色をもっと白に近づけた詰襟が微かに覗く。襟章の形は菱形、ラインは一本。戦闘構成員、通称、「戦争代行者」。世界の最先端技術を結集して作り上げられた巨大人形兵器、マシン・メイスのパイロットだ。がたがたと時折ひどく揺れる車両の一角で、彼はひどく眉をしかめていた。期待していたわけではないが、その場所は余りにもひどすぎた。軍事施設以外の何ものもないと聞いてはいたが、道路さえろくに整備されていない、とは。市民を地上に上げたくないわけだ。唯一そのことだけを彼はひどく納得していた。いや、思い知らされたと言ったほうがいいのかも知れない。かつてここには肥沃な大地と、行き来する文化とで豊かに育まれた交易都市が栄えていたと言うが、それは幻想の彼方どころか、ここまで来ると偽りの物語ではないかとさえ思えてくる。地上の荒廃は著しい？これではまるで国家が滅んだ後だ。著しいところではない。出てくる直前聞かされた話を思い出すと、彼の気分はますます悪くなった。これでこのちっぽけな国は、六十年近く戦い続けて、ここで早急に戦争を終らせようとしているのだ。笑える以前に、ばかばかしすぎて話にならない。思い彼は、ひどく眉をしかめたままその目蓋を閉じた。けれどここまで来てしまっただけで引き下がることもできない。彼はもう一般市民でもなければ、二度とそう呼ばれて区別されることもないのだから。

低くエンジンがうなりを上げて、車両が減速したのはそれからまもなくのことだった。しばらく目を閉じていた彼はそっと開けて、その耳をそばだてる。微かに、前方に座る二人の女性の声と、その向こうに隠れるように低い男の声が聞こえ、視界の中に浮かぶいくつかの頭が、それぞれ

に微かではあるが動いて見えた。最後に、やや大きく、笑い声。それからシューツという空気の音とともに、バスのドアが開けられた。前方の女性の声がわずかに大きくなるのと同時に、そこにひょっこりと男の姿が現れる。彼が着ているものと元は同じ色だったと思いきくたびれたコートを着た、がっしりとした体躯の男はその場所で二言三言言葉を交わし、ゆっくりとした足取りで奥に向かって歩き出す。途中の二色の頭とも何やら会話を交わした後、男は気付いたように彼を見やった。目が、合う。白とも卵色ともつかない短く刈られた髪と、琥珀と思いきぎょろりとした瞳の厳つい男は、そのままゆっくりと彼に歩み寄った。三十代も後半、だろうか。彼は何気に思い、思いながらその襟元を見やった。襟章の形は菱形、そしてラインは一本。見つけて頭の中で確認するより早く、たどり着いた男はニヤリと笑って言った。

「見ない顔だな……新入隊員か？」

「……はい」

低い声が頭の上から響く。笑った顔は精悍で、どこかに毒を含んでいた。もとは白とおぼしき肌は日に焼けて黒く、奇妙な色の不精髭があごにまばらに生えている。一見すると人懐こそうなその目を見返して、彼は微かに尻込みした。値踏みでもされているのだろうか。そして思わず、彼は言った。

「何です？」

「ん？いやあ……ずいぶん若いと思ってな。いくつだ？ぼーず」

ためらいも何もなく言うと、男は声を立てて笑った。彼は眉をしかめたまま、その目を男から反らす。

「十六、です」

「十六……何だ本当に若いじゃねえか」

男は答えに驚嘆の声で返し、そして彼の隣にどかりと腰を下ろした。微かにシートが揺れる。ふう、と疲れたように吐息して男は今一度、少年と言うべき彼を見やって、ニヤリと笑った。

「名前は？俺はアストル・カベルだ、よろしく」

「フェーン・ダグラム……です」

言葉とともにごつごつとした手が伸びてくる。おずおずと少年、フェーンはそれを捕まえて、そして軽く握ったところでしっかりと捕まえられ、力任せに振り回された。がくがくと肩が揺れる。その様子に男、ガベルは微かに声を立てて笑った。

「しかし十六たあ……本当に若いな。家族はどうした。止められなかったのか？」

「それは、ありました。でも、あってもなくても同じですから」

小さく、フェーンはその問いかけに答える。ガベルはその顔ににやついた笑みを浮かべたまま、大きな体をシートに投げ出すようにして言った。

「へーえ、そうかい。そいつはまた……理解がある家族なんだな。ま、今日からは同僚だ。一つよろしく頼むわ」

「はい」

返事は白々しく、そしてあっけない。しかもガベルを向いては放たれなかった。ガベルは苦笑する。そして胸の内を呟く。十六か。本当に、若い。

「……使えすぎの類、か」

その呟きが聞こえたのか、フェーンはちらりと今一度ガベルを見た。視線に、ガベルがまたにやりと軽く笑う。

「確か今じゃ十六ってのはテスト受験資格の最低年齢だろう？良くできたわけだな？」

「……さあ。僕は指示に従っただけです」

「謙遜するなよ。最短でも半年は訓練所に詰め込まれるんだ。長けりゃ二、三年、てとこか。今は情勢が落ち着いてるからな。それとも、教官共に嫌われたクチか？」

言葉は、どこまでいっても軽い。何だ、この男は。フェーンは思いながらその視線を再び反らした。おやおや、嫌われたか。胸中で呟き、ガベルは軽く肩をすくめる。スーパーエリート、彼らの呼称は伊達ではない。超難関と言われる入隊テストをクリアした後、彼らはその適正に応じて訓練校に送られる。特務機関の構成員は超級公務員とも言われ、ほぼ完全に一般世間から隔離されることにもなる。希望者の全てがそのテストを受けられることになってはいるが、合格できるのはわずかな人数に限られ、その中でもその呼称を得られるのは、真実一握りだ。彼らのその能力次第で戦局の全てが変わる。国家の存亡をかけて、という言葉の通りの働きをなしえる人間、それが『戦争代行者』だ。

「まあ。そんなに肩に力を入れずに、自分のペースでやっていきゃあいいさ。今のところ「明日をも知れぬ」訳でもねえし。よろしくな、若きスーパーエリート殿」

ガベルはそう言って声を立てて笑う。ちらりと目だけで彼を見て、フェーンは何も言い返さなかった。

ラステル第二国家、ソレア。通称「シル・ソレア」と呼ばれるその場所に特務機関ミッシュ・マッシュの本部がある。荒れ果てた荒野の中にぽっかり浮かんでいるような湖を目の前にしたその場所は、唯一と言っていいような人の暮らせる場所だ。と言ってももちろん民間人の姿はない。総本部基地の目の前に広がる住宅街は、全て構成員とその家族だけが暮らすことのできる一種特殊な場所であり、構成員の配偶者および十五歳未満の子供以外の非構成員の居住は許されてはいない。彼らは個人である前に軍人、いや、極端な言い方をすれば兵器だった。その私生活さえ管理されているくらいがある。いや、されている、と言った方がいいのだろうか。

基地内のバスターミナルにその古ぼけた大型車が止まると、じゃあな、と言い残して大男、ガベルはフェーンの前から姿を消した。まばらに乗客達はバスを降り、その足でまちまちに歩き出していく。最後に降りたフェーンはそれを見送ってから、すぐそばに立てられた標識を見て歩き出した。白ともベージュともつかない空と、ほこりっぽい空気。地下と違う点は、全て地下に劣っていた。ただ空にある光が初めて浴びる本物の太陽光だと言うだけで喜びも感動も何もない。特別、地上に何か期待して上がってきたわけでもないが、と、改めてフェーンは思う。時折「住居の全てを地上に戻そう」という運動を展開している活動家がいたりもするが、はっきり言ってそれはやめたほうがいい。ぬくぬくと守られて暮らしていただけるならこの国の住人もそのほうがきっといいに違いない。思いを巡らせながら、少年は目指す方角に向かってまっすぐに歩き始める。何もかも、些細なことではかない。おそらく戦争も、それによって世界が荒廃し続けるこ

とも、自分の一生さえも。そう思えば何だってできる。例えば家族や兄弟を棄てて、巨大人型兵器を駆って人殺しをすることだって。

「フェーン・ダグラム君？」

コンクリートを踏み締めて歩くブーツの足音に紛れて、高すぎない声がフェーンの耳に届いた。足を止めて、フェーンはそちらを見やる。

「そう、ですが？」

退屈な背景の手前には一人の女性士官が立っていた。ややうつろな目でわずかに睨め上げるようにしている少年に、彼女は笑いかけて言った。襟章の形は菱形、入っているラインは一本。ただそれだけで彼女の属している先は見て取れる。

「初めまして。アーク・レクスライです。しばらくあなたの教育係のようなものをさせていただきます。よろしく」

「……よろしく」

にこやかに彼女は笑い、その手をためらいも何もなくさしのべる。フェーンはあからさまに驚きの表情を浮かべて、伸びた白い手を捕まえた。笑いながら、彼女は言葉を紡ぐ。

「女性士官が珍しい？」

「えっ……ああ、いいえ……そういうわけでは……」

年は、二十歳くらいだろうか。まだ大人になり切らないみずみずしい表情と細見の小さな体は、どう見ても軍人のものには見えない。くすくすと彼女は笑っている。凶星を指された格好のフェーンは手をあわてて引っ込めると、その目を再び退屈な景色へと投げた。

「初めて逢った人にはよくそういう反応を示されるわ。正直に言ってもらってかまわないわよ？」

確かに珍しいしね、と付け足し、アークはまた声を立てて笑った。そろそろとフェーンは視線を元に戻して、笑っている彼女を今一度見やった。短く切られた蜂蜜色の髪と、あまり大きくはない青い瞳。およそ、戦場どころか砂漠地帯に似つかわしくなさげな彼女は、けれど全くそんなことにかまっている様子はない。やや惚けている十六歳の少年に笑いかけたまま言葉を綴った。

「わからないことや困ったことがあったら、何でも言ってちょうだい。あなたがこの生活に慣れるまでに、みっちりいろいろとたたき込んであげるから。さ、行きましょう」

「たたき込む、ですか」

「そうよ。使えない人間だと判断されたら、棄てられるだけなもの」

声色は変わらなかった。それはジョークなのか、否か。フェーンは何も言い返さない。ただ微かにしかめたその眉を見、アークはまたくすくすと笑った。

「さ、いきましよう。面倒くさいプレゼンテーションが待ってるわ。それから、希代の成績優秀者を見たいっていう、上の人達も」

言葉の後、すっとアークは踵を返した。フェーンは黙り込んだまま、その後ろに続く。

その特務機関を構成する人員の殆どは、主席国家スティラの軍部の人間であった。委託管理という形で組織を管理する立場にあり、兵器の操縦者と整備担当者以外の構成員の殆どを彼らが占めている。四国の共同出資によって構成された組織は、しかし実のところ四国の全てに属してもい

なかった。戦争代行者及び兵器に關与する権限を最も多く掌握しているのは表向きには四国の協議会である。が、実際は総本部の所在国であるソレアが組織の殆どを牛耳っているに等しい。スティラの軍部の介入は、それによる暴走に歯止めをかけるためでもあり、また微妙な立場で組織の運営に意見するための口実でもあった。主力兵器マシン・メイスの情報についても、だ。開発者および製造者はソレアの国防科学研究所であり、その情報もほとんど組織の外に流れることもない。各国が独自に運営する国防軍と彼らは全く切り放されており、彼らが協力して作戦の遂行をすることもなければ、その情報交換が行なわれることもまずない。もっとも、スティラ、ソレアの軍部には流れないではいけないのだが。協議会というよりこの両国の上層部が懸念しているのは、主力兵器の情報が元敵国であった二国のどちらかへの流出であった。そのため、リウヌ、ヌウイの二国は組織に殆ど關与していない。と言うより、際立ってへだてられていると言っても差し支えがなかった。とは言え、各国にもいわゆる発言権というものがある。時勢によってそれは姿を変えるものだったが、とにかくまず、その組織は複雑奇妙な四国の拮抗の元に存在していた。そしていざとなれば、彼らを擁するたった一国の権限で動かされる可能性も、なくはなかった。

「とりあえず今日から半年間は後方部隊に配属、の予定よ。優秀な人材ならいち早く前線に投入されるでしょうけれど」

「半年、ですか」

歩きながら紡ぎ出されたアークの言葉に、何気にフェーンはそう返した。聞いて、アークは笑いながら問いかける。

「あら、何か不服？」

「いえ。命令なら従うまでです」

「いい心がけね。出来るだけ、それは覚えておきなさい。もっとも」

まじめな少年士官の言葉に、またアークはくすくすと笑った。フェーンはその背中を見ながら、その眉を露骨にしかめていた。年下だと思ってばかりにされているのか。そう思ったがしかし、その思考もすぐに途切れた。

「そんな風にまじめに言う人は、貴方の他にはきっと誰もいないでしょうけど」

ごうん、ごうん、とそれら全ての音は混ざり合っただけで大きなプレハブの中でそんな具合に響き渡っていた。雨露をしのげる程度とは言え規模的には大きすぎるその建物の中には、人間の約十倍の全高と百五十倍以上の重量を持ったその兵器が整備、収納されていた。マシン・メイス。それは俗称だが、言いえて妙と言えれば妙だ。その始まりは土木作業用ロボットだったことを確実に知っている人間はどれほどいるものなのだろう。しかも、せいぜい二メートルほどの背丈しかなかった「木偶の坊」が戦争に投入され、ここまでの大きさに進化するまでにかかった時間はたったの十数年と来ている。加えて原形となったその機械は今も現役で、地上施設の施工に従事しているのだというのだからお笑い種だ。もっとも近年兵器として作られるそれらと原形とでは、すでに中身はまったく違っている。類人猿から進化した人間と猿ほども似ていない。知っているどころか、気付く人間さえ希だ。ハンガーと呼ばれるその建物の中で、その大きなものを見上げて彼

はそんなことを考えた。そして、もう少し平和だったなら、ここに居並ぶのは不恰な土木作業用ロボットだったのかと、思いついて微かに笑う。それらは恐らく荒れ果てた土地の根本的な改良に従事し、巨大な火器もやたらと大きなエンジンも積まず、日が昇るとともに出かけてゆき、夕刻が来たのならここに戻るといふ、何とも健康的な労働サイクルを繰り返すのだろう。そしてやがて、砂漠地帯は緑の海になる。元々が肥沃な土地なのだから、それもあながち夢ではないはずだ。

「おう、ガベル。戻ってたのか？」

声とともに、彼の夢想はそこで打ち切られた。振り返って、彼はニヤリと口元を歪めて笑った。目の前には自分と大差ないごつい体躯の男が一人、油まみれのツナギを上半身だけ脱いだ格好でそこに立っていた。伸びすぎた黒髪を引っ詰めるように結わいたその男は、笑うガベルのそばへと歩み寄りながら問いかける。

「何笑ってんだ？へらへら」

「いや、別に。生きてやがったかと思ってな」

そう言って、久しぶりだな、とガベルは付け加えた。黒髪の男はへっと鼻先で笑って、その目の前に立つ整備途中の大きな木偶の坊を見上げて言葉を返した。

「生きるも何も。こちとらここにしばらく缶詰めだ。部隊の三分の一が大破だぜ？あれ以来足止めされたまんま、ひたすら戻ったマシンの整備の手伝いさせられて。死ぬ間があるかっての」

「いいじゃねえか、じかに戦闘してなくてもひまがなさげだよ？」

「そういうお前の方こそどうだったんだ？ドゥーローは？」

問い返され、無言でまずガベルは肩をすくめる。黒髪の男は小首を傾げ、それから、

「別にノロケを聞かせろとは言っていないぞ、俺は。そういうのはあのバカの仕事だからな」

「十分同じだ。お前らは」

言ってガベルはくるりと踵を返した。ほこりまみれのアーミーコートを着た背中が遠のくのを感じて、男はその背中に問いかける。

「何だ、どこ行くんだ？ガベル」

「大隊長のところだよ。今戻ったばかりなんでな。新型のありがたーいお話はまた後で聞かせてやる。スライサー」

答えの後、男は名を呼ばれて目を丸くさせる。ガベルは足を止めてそちらに振り返りニヤリと笑った。

「ここに戻る途中のバスン中で、おもしろそうなガキに会った」

「ガキ？」

ガトル・スライサーはその言葉に目を丸くさせた。くつつつと、何が楽しいのかガベルは笑い、そのまま再び歩き始める。

「菱形の一本線だ。そのうちこの辺でまた会うだろうよ。何だったか……ダグラム、か」

「何だ、新人の話か。俺らにゃあんまり関係なさそうだな。菱形の一本線、ねえ……」

言葉の妙に、スライサーは笑いもしなければ表情を歪めもしない。何しろその菱形には、線が入らないことは有り得なかった。マシンの搭乗者にはその任命の時から少尉という士官が与えられ

る決まりになっている。最低誰もが持っていると言っても過言ではない。もっとも、それ以上になるには人より多い戦績と年期を必要とする。と言っても、十年やそこらでそれを獲得することができる代物でもない。

「そろそろ線の本一本も、増えてくれとか思えよ？希代の超スーパーエリート！」

立ち去るガベルの背中にスライサーが声を投げる。笑いながら、

「バカ言え。年上差し置いてそんな真似ができるか。第一俺あ生き延びる性分じゃねえよ」

「何言ってるやがる。むこうの一個小隊半殺しにして帰ってきた男が」

ややいまましげに放たれた声に背中で手を振って、ガベルはそのまま歩き去っていく。見送りながらスライサーは微かに苦笑し、今一度そこに立つ大きな機械のカタマリを見上げた。操縦者を持たない時、それは真実、機械のカタマリでしかない。しかしあの男が搭乗したのなら、それは大陸で最も恐れられる兵器へと姿を変える。アストル・ガベル。ここ数年では抜きん出たマシンのパイロットでありながら、その素行と性格ゆえにまったくと言っていいほど出世をしていない男だ。ここで勤続十年と言ったら、数年前までは拍手モノだったぞ。

「しかも……すげ替えなしの生身の手足で」

心の声が、何気に口からこぼれる。自分の耳でそれを聞いて、スライサーは軽く首をすくめた。二十八歳のエースパイロットは、いずれは叩き上げの上級士官になるはずの男だが、そういうものをまったく望んでいないらしい。彼らしいといえはらしいが、もったいないと言えはもったいない。

「おう、木偶の坊。何ぼ一つつっ立ってんだ？」

「……誰が木偶の坊だ誰が」

投げつけられた不躰な声に、その場で彼は露骨に眉をしかめた。ひょっこりと、自分の背後からやってきた男は、わざわざその前に回り込んで、のんき過ぎるその顔を彼に見せつけるようにした。

「まあそんなことはともかくだな。今ガベルのヤツがこの辺にいなかったか？」

「ああ……今さっき戻ったそうだ。ドゥーローから」

「ほ一お。三カ月ぶりのお帰りってところか。で、どうだったって？」

プラチナと呼んで差し支えない白金の髪を短く刈り込んだ、彼より多少小柄で細い体つきの男はそうやってニヤリと笑う。元の作りがなまじ整っているだけに、その笑みは余計に下卑たものに見える、とは周囲の評判だった。黙って大人しくしていれば妙齢の女性が思わず見とれる様な、見た目だけの男から目を逸らし、スライサーはわざとらしくマシンを見上げる。

「新型の話なら、後でじっくりしてくれるそうだ」

「そーじゃなくて、カリナだよ、カリナ。ったく、本当お前って使えねーな、スライサー」

ちっ、プラチナの男はそう言っていまましげに舌打ちし、同じくその兵器を見上げる。

「どーせこいつらの後継機の話なら、後から嫌ってほど聞かされるんだ。そんな話、あのバカから聞いてどうするよ？」

「だったらそういう話も本人に直接聞いてくれ。俺はお前と同類に数えられて、些か機嫌が悪いんだ」

「何だよ、似たモン同士じゃねえか。トリオGつって。噂じゃ俺ら三人でラステル制圧できちまうって話だぜ？」

言ってげらげらと男は笑った。スライサーは眉をひどくしかめて、笑う男を今一度見やった。シロ・グランド。スライサーより五つ年下で二年先輩のパイロットは、口元を楽しげに歪めたまま言葉を紡ぐ。

「ほんつとにあのバカはよー、死ぬ覚悟はできるくせに女一人どーにもできねーんじゃーよー、男の真価ってヤツを凶りかねるよ。なっさけねーの」

「.....それはそうだ。かばう必要もないな」

やや黙してから、スライサーは同調するようの言葉を紡ぐ。そして、

「でも俺は、お前と一緒にされるのはゴメンだ。ついでに、そういう話は直接ヤツとしてくれ。後で、カリナも交えたやっかいごとにからむのは絶対に嫌だからな」

「ちえっ、つきあい悪いんでやんの」

きつく言いつけられ、グランドはその場で眉をひどくしかめた。

面通しなる面倒くさい儀式が一通り終わる。ここでは新人は、一応上層部の委託管理者に挨拶することになっていて、とは、案内役を仰せつけられた彼女の言葉だった。

「特務機関総督、副総督、師団長、総司令、副司令、参謀長.....そうね、いわゆる佐官クラス以上の人間は、殆どがスティラの軍からの出向かしら。ここでたたき上げの人って、滅多にないから」

歩きながら、彼女の説明は続いた。もっともいればそのうち大体わかってくるでしょうけど、と付け加えられた後の言葉をフェーンは黙って聞いている。

「組織事体に歴史もないし.....そういうことは訓練校で教わってるわよね？たかが二十年の、とか、そういうところも」

「はい」

元々、機関はソレアの国防組織として編成されたものだった。予備役の延長線上に設置されたはずの組織が、ふとした拍子に汎用人型ロボットを戦闘に投入し、その一時的措置が功を為したことが始まりで、いまだに母体組織を作ったソレアの権限は大きく、その抑制のために直接の運営をスティラがしている、というのが簡単な図式である。とは言え、スティラから出向している人材には、徹底して兵器の情報が流されないという体質をもここは持ち合わせていた。彼らは管理するが関与はしない。判断し命令はするが、実働だけは絶対にしなかった。そこにはスティラ出身者はいても、軍属者および軍出身者はいない。そうした徹底した管理も、ソレアの権限のもとで行なわれていた。だから上司の殆どがよそからの介入者といっても、過言ではないと言えそうだった。

「でもきっとそういうものも、ここではあまり通用しないでしょうね。基礎知識としても、よっぽどでなければ役に立ちそうもないし。見ていればそのうちわかるわ。大人の世の中って言うのがどんなふう複雑なのか」

彼女はそう言って、肩をすくめて笑う。私もここへ来てまだたったの二年だし、と言って笑う彼

女は、どう見ても戦場という場が似合うタイプには見えない。フェーンはくすくす笑う彼女を見て、微かに眉をしかめた。気付いて、となりを歩いていた彼女は問いかける。

「何か、気になることでもある？」

「いえ……レクスライ少尉は、どうしてここに？」

「それは、どうしてこんな職業についたのか、という質問なのか、それとも、どうしてこんなところで自分の案内役なんかをしているのか、どっちなのかしら？」

丁寧でかつ滑らかな言葉づかいだが、その中には微かに毒が含まれている。見た目通りではないとは薄々感じてはいたが、と思いながら、更に見た目とそぐわないフェーンは、その問いかけにこう返した。「女性士官は前線に投入されないんですか？」

「ああ……そういう質問？今は戦況が安定しているの。で、なるべく倫理的に、私のような若い娘は後方に置かれている訳。ここに来てからはずっとそうよ？」

くすくすと、ややきつい物言いだったというのに彼女は笑っている。それが気に入らないのかフェーンは微かにまた眉をしかめた。

「ああ、ごめんなさい。別に貴方を笑ってるんじゃないのよ？その能力さえ確かにあれば年齢も年期も、はっきり言って関係ないものだし。十六歳で現場に投入、でしょう？すばらしい才能だと思うわ」

「……別に、そんなこともありません。人より少し向いていただけです」

「でもそういう人ほどイヤミなくらいに実力を見せてくれるのよね」

あおるような言葉に、思わずフェーンはそちらへと振り返る。彼女は笑いながら、やや大げさのため息をついてみせた。

「先に言っておくわ。貴方が訓練校で一体どうやって誉められていたかは知らないけど、そこでもらった評価のほとんどには意味も価値もないわ。私たちは世間から「スーパーエリート」なんて呼ばれて、膨大な危険手当とサラリーを貰っているけど、それにもやっぱり意味も価値もない。私たちは兵器でそれをよりよく使うために彼らは投資しているだけ。何しろここでは失った手足や臓器まで作って配給してくれるのよ？私たちはそれだけ大事な『兵器』だから」

苦笑とも嘲笑ともとれない奇妙な笑みが小綺麗な顔に張りついている。似合わないそれを見てフェーンは再び彼女から目を逸らした。何だかんだと言ってもまだまだ相手は子供のようだ。自分も二十歳そこそこの小娘だが、そんなことは棚に上げてアークは笑った。

「僕は……そういうつもりでここへ来たわけじゃありません」

「じゃあなぜ希望したの？パイロットを」

「貴方に話す必要はないです」

きっぱりと言い放ち、今一度フェーンは彼女を見やる。アークはその表情に少しだけ驚き、そしてまた微かに笑った。

「確かにそうね。差し出がましいことを言ったわ。ごめんなさい。人それぞれにいろんな事情があるものね。でも、一つだけ言っておくわ。あんまりがんだりすぎると後で痛い目に会うだろうから。できれば……そうね、スポンジみたいにしてるといいわ」

「……スポンジですか？」

そして、意外なほど陽気な言葉がその口からこぼれ出す。更に意表をつかれて、フェーンは思わず問い返した。アークは気分も大して害していない様子で、さきほどよりも機嫌よさげにくすくすと声を立てて笑った。

「そう、スポンジ。紙一重、なんて良く言うけど、そういう人達が有象無象しているところだから。天才集団の中に紛れたら、どんなに優秀だって誉められてきた人でも本当にただの人よ？」

その言葉に嘘はなさげだった。一体どういう人間がいるのだろうか。フェーンはここに来て初めて不安のようなものを感じ、やけに楽しそうな彼女をただ見つめていた。

その特務機関は「ミッシュ・マッシュ」と呼ばれている。大陸の東にある古い国の言葉で「ごちゃまぜ」という意味だ。最初に誰が言い出したのかは定かではないが、その仇名は組織の体質を何より物語っていた。ラステル四国の技術の粋が集められ、その場所でごちゃまぜになった結果が人型兵器、マシン・メイスであり、そこでは老若男女様々の人材が、言葉の通りごちゃまぜになって活動している。戦場と居住区は基本的に分けられているはずだが、そこでは表裏一体でいつシャッフルされるか知れず、ここでは国中の混乱がひとかたまりにごちゃまぜになっている。十代の少尉がいれば、二十代、三十代の伍長、軍曹の姿もあり、明らかに四国周辺の出身者でない人間もいれば、ここに国がなかった頃からずっとこの土地に暮らす人々もいる。元々ラステルは混沌とした土地だった。交易の名の元に国家も文化も混ざり合い、それが連ねられて一つの集合体を形成していた。跡を継いだ交易都市も、それらの更に後継の現在の国家体制も、その名残を残していて不思議はなかった。ただ、現状から言えば交易都市としての機能はストップし、外から入ってくるのは主に亡命者などであったが。

「よお、帰ってきたか。いつまでたっても結婚できない男」

マシン・メイスのハンガー内にはいつものように号音が響き渡っている。そんな中で飛んできた声に、ガベルは笑いながらも眉をしかめた。振り返らずともわかる。同期で二歳年下の問題構成員が背後にいることは。近くでの会話の声さえかくす号音の隙間を縫うようにぺたりぺたりとやや間の抜けた足音が聞こえ、やがて先程投げられたものと同じ声が、耳のすぐそばで聞こえる。

「どうだった？ドゥーローじゃ」

「新型か？なかなかハイペースで進んでたぞ」

肩がずしりと重くなる。あごでも乗せられたか、思いながらなおも、ガベルは振り返らない。目の前には先程修理、調整が終わったばかりの兵器がその二本の足で立っていた。鋼鉄の鎧を着込んだ電気仕掛けの巨人兵士。どこかの詩人がいつかそんな形容をしたことがあるそれは、兵器といういかつい名を冠していると言うのに、どこか工芸品めいた外見をしていた。軽量化のためにムダを省いたボディは滑らかな曲線を描き、そのカラーリングもシンプルそのものである。白の比率の高い灰紫、とでも言うべきか。肩と大腿の両サイドには搭乗者の所属を示すナンバーリングが、ボディの灰紫を濃くした様な黒に近い紫で入れられている。目にあたる部分、カメラアイのガード部分も同系色の濃い紫。マシン・メイス「リドル」。初めは汎用量産型として造り出されたその兵器は十数年を経た現在では、基地周辺の警備ならびに偵察用の機体として主に使用さ

れている。

「こいつがお払い箱になるのも時間の問題だろうな」

「へーえ、そうかい。じゃなくて」

肩にあごを乗せた男も、同じくそのマシンを見上げる。しかし、その興味の対象はそこに立つ兵器ではなく、

「誰がこんな鉄屑の話が聞きたいって言ったよ？カリナだ、カリナ。どうだった三カ月、何かおもしろかしいこともあったら？」

「グランド、お前な……」

肩にあごをのせっぱなしの男、グランドの言葉にガベルは眉をしかめる。耳のそば、けけけ、とグランドは普段通りの下卑た笑いを漏らし、更に言った。

「新型のデータだったら更新される度毎日こっちにも入ってるよ。何だ、エンジンが二器入るとか、重火器がどうのとか。そんな話だったらお前とじゃなくても十分できらあ」

「その性格をどうにかしてくれ。それに、そんなにカリナにホれてんなら好きにすりゃあいだろう」

呆れと疲労が入り混じった溜め息を吐きながらガベルが言う。グランドはあごを彼の肩から上げて、それから目を二、三度しばたたかせると、言った。

「ホれてる？俺が？カリナに？バカなこと言っちゃいけねえよ。人の恋路を邪魔するヤツはたかが馬に蹴られて死ぬだけだがな、カリナの邪魔なんかしてみろ。目茶苦茶な調整されたマシンに乗らされて、素直にあの世にも行けそうにないぜ？俺あやだね、そんななあ」

「わかってるならほっとけや。それに、俺を巻き込むな」

ようやく振り返ってガベルはじろりとグランドを睨みつける。グランドはわざとらしくいぶかりながら、

「巻き込む？何が？お前当事者だろ？その言い方は違わねえか？」

「俺はとっくに足抜けだ。いいじゃねえか、お前もそろそろまじめに一人に絞って他の女性人の響盛を買わないように大人しくなりや」

はっはっは、と、わざとらしく笑いながらも、ガベルの目はまったく笑っていなかった。グランド、そのまま、

「何言ってやがる。こんだけうるさいハンガーの中に響き渡るくらいのプロポーズ、女にされたくせに」

「誰も頼んでねえよ」

けっ笑顔を崩壊させて言い放ち、ガベルはぷいとそっぽを向く。人の悪い笑顔を浮かべて、グランドはその方に再び絡みついた。

「ねー、アルー、そーんな意地悪言わないでさー、どうだったか教えてよー？十年来の親友じゃん？俺達。それともそんな俺とお前の間でも話せないよーなおもしろかしい事でもあったのかあ？」

「グランド、模擬戦するか？そこにある現物に乗って」

ぶん、と思いきりその腕を振り回し、一瞬にしてガベルは自分よりやや細いというだけのその男

を振りはらい、振り向きざまに低く言った。にらみつけられたグランドはその一言で顔色をさっと変える。親友は額がひくひく、のついでに、その目に明らかな怒りの色を浮かべている。現物に乗って模擬戦、ここでは絶対に有り得ないことだ。が、

「わーっ、ごめんなさい、もう言いませんっ」

その男にそれを言い渡された時、あるいはその後、言われた側には恐ろしい結果しか残っていない。下手をすると本気で殺されかねない。十年来のつきあいのその男にも、それは身に染みてよくわかっていることだった。現実問題、目の前で容赦なく何百人と殺され続けている。それは今のところは敵に限られてはいるが。

「覚えとけ、シロ・グランド。俺が一体誰で、どういう人間なのかをよーく、な」

「そっ……そりゃあもう！ミッシュ・マッシュ始まって以来の超天才パイロット様！落とした星は百以上！うわステキ、俺なんか全然足下にも……」

「調子いいこと言うんじゃない、このタコ」

ガッ言葉と同時にほぼ手加減なしの裏拳がグランドの頭部を右サイドから直撃した。衝撃に、その科白、態度の全てが本気だったことがよくわかる。飛ばされて、グランドはその場にしりもちをついた。いてて、とうめいてグランドはその場に座ったまま、殴られた頭をさする。

「……まあ、カリナのことはおいといても、だ。三カ月もの長きに渡ってむこうにいたんだ。確かに面白いことはたくさんあったがな。こっちはどうだった？」

「あ？こっち？」

立ち上がりながらグランドが、確かめるようにその言葉だけを繰り返す。ガベルは先程の怒りも忘れたのか、打って変わって落ち着いた顔で再びマシンを見上げた。

「さっきちらっと寄ったらスライサーにそこで会った。あいつミネアに行ってたろ？」

「ああ……それか。聞かなかったか？あいつんとこ中隊半分くらいボコボコなって戻ってんだよ。でかい衝突じゃなかったから良かったけど死人も結構出て重傷者はダイレクトでヌウイの施設送りだぜ？それだっけのにあいつ青あざ作っただけだっけんだからよー……」

ブツブツと、その後もグランドの愚痴は続く。聞かずに、ガベルはマシンを見上げたまま、何やら思いを巡らせている様子だった。かまわず、ぐちぐちとグランドは文句を並べ立てる。

「そんでどうするよ、ってな話になっても、上は下がれの一点張りだぜ？そんななあ一気にその場で全滅でもさせちまやあいいんじゃないか。ミネアにつめてた人数だっけっこの頭数あんだからよ。そんなんだからだらだらだらだら二十年も……」

「その場しのぎに兵力投入して、大損こいたら事だと思ったんだろ？上の連中は」

考え込んでいたようで話を聞いていたガベルが、苦笑を漏らしながらそう返す。グランドは目を丸くさせ、

「へ？なんで？」

「最近ヒマだっけ事になってるからな、ここは。地下の連中に高給の待遇ってだけで募集かけたって人なんかそう集まりやしねえんだよ。市民議会とかいうちっぽけなレベルで軍縮運動とかいうものも展開されてる。まあ現状がわかっただら、それこそここに入ろうなんてヤツはいなくなるだろうが」

言葉の後ガベルは鼻先で笑い飛ばす。首を傾げたまま、グラントはそんな彼に問い返す。

「なんでそんなこと知ってた？ガベル」

「三カ月もの間、俺がでかいおもちゃの試乗に付き合ってただけだと思ってたのか？お前」

「いや……てゆーか俺はそんなのよりカリナが……」

気になる、と言いかけてはたとグラントは我に返るとそれ以上口にはしなかった。へっと鼻先で笑うこと再三のガベルは、そうしてまた言葉を紡いだ。

「妙にピッチが速えんだよ、新型がな。予算も珍しくとんとん降りたって聞いたし。噂じゃ後一カ月もしない間に新しく部隊が結成になって、その新型が前線に入るって話だ。それも、おテテつないで仲良し小好し、の今までみたいなのじゃなく、小数勝負の遊撃部隊らしい。まあそいつは前から話もあったことだし、いいんだが……急いでるとなりゃ話しは別だ。ひよっとするかと思ってたが……こりゃまた、しばらく忙しいかもしれんぞ」

「しばらく忙しい、ねえ……けど何にしる中隊半分おしゃかだぜ？乗れるヤツもその数だけ今のところ使えねーし。付け替え、も数が多すぎて処理し切れてねーっつー話だからなー……」

言葉の後グラントが溜め息をつく。そう言えば、と思い当たってガベルは、何気に彼に問いかけた。

「グラント、なんでお前がここにいるんだ？そういえば」

「なんでとはまた、お言葉だな？俺だってスーパーエリート様だぜ？基地にいちやいけないかよ？」

「いや、そうじゃない……休暇か？」

どういう理由でここにいるのか、と、改めてガベルが問いかける。グラントは軽く笑いながら、

「ああ、今はな。いわゆる消化中ってヤツだ。もっとも、上からの指示で一カ月分ぐらい「仕事なしで詰めてる」って言われてる。有事の際と同じに「D休暇」ってヤツだとよ」

おかげで遊びにも出かけられやしねえ、と、言葉の後でグラントがぼやく。彼らの休暇の体系はその職務柄特異であった。休暇は四パターンに分けられ、それぞれA B C Dと呼ばれる。A休暇はそのうちのいわゆる公休にあたり、Bが有給休暇、C休暇は極秘任務等を帯びてはいるが基本的には非番日を言い、D休暇は公休、非番扱いでありながら基地の外へ出ることを全く禁じられた、しかし特別に担当する職務のない、通称「軟禁休暇」と呼ばれる特殊な休暇を指す。この他疾病や負傷などの治療期間も非稼働日という扱いになるのだが、その場合は調整日と呼ばれ、休暇の類には入れられないことになっている。もっとも、そうしたシステムをうまく利用して休暇をエンジョイすることもできないわけでもないが。

「まーでも、どうせ休みでもな。里帰りするわけにもいかねーし、テキトーに遊ぶ相手もいねーしよ」

ちっ、と言葉の後でグラントは舌打ちする。軽くガベルは笑うと、

「お前は日頃の行ないが悪すぎだ。社会人になってもう十年だろ？ちったあ落ち着け」

「バカ言え。いつ死ぬかもわかんねーご時勢なんだぞ？時間があったらエンジョイすんのは当たり前だろうが」

「長生きするよ、お前は」

呆れ口調で言って、ガベルはまたマシンを見上げた。ここにいれば、見ているものはこれくらいしかない。そしてそれは長い間にらみつけていても、人間のように何かに答えてくれるわけでもない。所詮は機械のカタマリだ。

「年期の入った兵器でも……愛着はわかねえなあ」

何気に、ガベルはつぶやく。けっ、と吐き捨てるように言ったのはグランドだった。

「そんな木偶の坊に愛なんて感じるか。男にはやっぱり女だ！ラブこそ世界を救って人間を癒すんだ！」「お前の場合は愛じゃなくて女そのものが、だろ」

「そういうこともある！」

奇妙に力を入れて返された言葉にガベルは苦笑する。意味はともかく、その言葉が真実ならどれほどいいだろう。そんな、目に見えない、形のない、名前が着いていることさえ不思議なもので世界が救えるのなら。けれどそう望んでいるようで、実のところ自分はそれを望んではないのかも知れない。この長い戦争が終わったら、自分はどこにも身の置き所がないのだ。勝ったにしても。負けたなら戦犯として瞬く間に処刑されてしまう事は目に見えているのだが。

「世界も国も……何とかかなりゃあいいんだかな。この木偶の坊で」

「そうか？俺はこのまんまでも十分おもしろいぜ」

「バカ。俺達が口に出して言ったらしゃれにならんだろうが」

言って、ガベルはその場で笑った。グランドも、またその顔に人の悪そうないたずらっぽい、やけに楽しげな笑みを浮かべてマシン見上げる。

「俺達が面白がってるうちは戦争も終わらないだろう。もっとも、死に物狂いになってそれが止まらない時は、敗戦間近なんだろうが」

「言うねエ、相変わらず。実はお前、俺より不良なんじゃねえの？」

「日頃の素行が悪すぎなんだよ、お前の場合は。のべつまくなしとっかえひっかえ、女性構成員の集団に、そのうちフクロにされちまうぞ？」

「おっ、何かそれ楽しそーじゃん？理想かも。基地中のレディにフクロにされて往生、か……なかなかオツだな」

「言ってる、色ボケ」

「あのせまっ苦しい操縦席でマシンと心中するよりゃよっぽどマシだろうが」

言葉の後、顔を見合わせて不良パイロット二人は笑みを漏らす。

「そうだ、もう一ついいことを教えといてやろう」

そう言って先に視線を反らしたのはガベルだった。踵を返し、そのまま彼は歩き始める。その場にとどまって、グランド、

「いいこと？」

「大隊長が教えてくれた。ハイクラスの情報だ、よく聞いとけ。基地内に余計な人間が増えてやがる。お前も含めて」

「余計？おいガベル、どーゆー意味だそりゃ」

さしものグランドもその言葉に眉をしかめる。ははは、と軽く笑い、背中でガベルは手を振った

「新型の投入が近いんで、そのパイロットを集めてるらしい。もっとも、採用人数は十人に満たないらしいがな。それで、機体はどうか知らねえがピンチンしてるスライサーまで足止めくらってやがる。どういうことかは見当つくだろ？」

「何、俺に新型部隊仕切れって？」

冗談とも本気ともつかない科白をグランドが吐き出すと先程よりも豪快にガベルは笑い飛ばして言った。

「そいつぁ豪気だな、上も。間違ってもそれはないと思うが、覚悟はしとけよ？」

「バカ言え。俺あそーゆー面倒なのはゴメンだぞ。ヒラ隊員ってのはてめえがポカやっても直属の上司に責任なすりつけられるから価値があるんだ。昇格なんかしてみろ、給ったモンじゃねえぞ？」

「全く、その通りだな」

やや本気で怒っているグランドを置いてガベルは歩き出す。見送りながら、グランドは声を投げた。

「どこ行くんだよ？ガベル」

「久々のお帰りだ。自宅でゆっくり休ませてもらう」「自宅？あのせっまい上になーんもない部屋か？」

「俺にとっちゃ唯一の家だ、その、せっまいなーんもない部屋でも、な」

ひらひらと、手を振ったままガベルは歩き去っていく。見送って、笑いながらグランドが言った。

「なんで結婚しとかなかったんだよ！どーせお前に惚れてくれる女なんて、カリナしかいないのによ！」

「ガキにゃわかんねえ大人の事情ってヤツだ。覚えとけ」

小さくなる背中を見送ってグランドは笑っていた。自分もあの男も、当分身を固めるなんて事をしているヒマはなさそうだ、そんな風に思いながら。

「これが私達の主力兵器、通称マシン・メイスよ。本物は初めて？」

フェーンはその時絶句していた。テントとプレハブの中間のような、それにしても規模の大きすぎるその建物の中には数多くの人と、その姿があった。全高約十五メートル、重量はおおよそ十トン。内蔵された発電機型エンジンと一時装甲の下に張られた太陽光電池とで稼動するそれは、今はただそこに立っているだけだったが、それを初めて見る少年を威圧するにはそれだけでも十分だった。息を飲むフェーンの傍ら、アークが微かに微笑む。微かに紅潮する頬は、年相応の少年そのものだった。

「これは汎用機「サヴァ」。たぶん貴方が最初に乗るのはこの機体じゃないかしら。あちらに見えるのが「ネイヴ」。ほとんどの機体はミネアの前線基地にあるから、滅多なことじゃ拝めないわよ？」

言われるままにフェーンはその視線を動かし、そこに見えるまた別の機体を見ても、感嘆の声を微かに漏らす。原形が土木作業従事用のロボットだったとは思えない。その兵器群に目を奪われて、フェーンはそんなことを考えていた。その歴史は浅い。しかしそれは今や大陸中を席卷するほどの力となっている。その情報のほとんどが外に流れることはないが、マシンの姿は国民の意気高揚のために、時折その映像が地下の一般家庭にも流れている。そしてやはり、というべきか。その巨大で強靱なものに憧れて特務機関に入隊を希望する人間も少なくはない。とは言え、そうした理由でここにやってこられる人間はごく希である。慢性的に人手不足の組織は、それでもそのテストに合格し、訓練を半年以上受けたもの以外は受け付けなかった。それだけ、この大きなものを制御することは難しく、また、その機密も守られるべきものであるからだ。そして一度構成員になったら非構成員に戻ることは難しい。いや、皆無と言っていいだろう。彼らはその情報を守るために、一線を退いた後にも管理を続けられる。元兵器として。

「どう？感想は」

ややもすると放心状態のフェーンにアークが問いかける。振り返りもせず、フェーンはうめくような声を微かに漏らし、言った。

「すごい……これを、動かすんですか？」

「ええ、そう。でもそのための訓練は受けてきたでしょう？ちゃんと」

「……はい。シミュレーターには何度も……」

顔を、ゆっくりとフェーンは下ろす。くすくすと、その様子を見てアークは笑った。気がついたのか、フェーンは彼女を見やると罰が悪そうにその眉を少ししかめた。

「あら、ごめんなさい……でも最初はみんなあなたみたいな感じよ？私もそうだったもの。あまりにも大きくて……これに自分が乗るのかって思ったら、声も出なかったわ」

しかしフェーンはそのアークの弁解に何も返そうとはしなかった。アークはさらにくすくすと笑い、そしてその笑いを納めるために今一度、そこに立つマシンを見上げる。

「マシン・メイス。人間の約十倍の大きさの巨大人型兵器。基本的なコンセプトは白兵戦だけど、ここでは戦闘の全てにマシンが投入されるわ。というより、他がほとんどないと言った方が正

しいのだけど」

ラステルはその周囲に海を全く持たない。二本の大河川は海に匹敵するとも言われるが、戦艦を使って行なわれる戦闘はほとんどない。巨大な砂州と比較的浅い水深で、ルートを選べば装甲車程度で川を渡ることも可能でもあった。更に付け加えるなら、マシンの長距離間の移動は本体装備のホバークラフトシステムによって行なわれている。短距離であるなら、水の表面を滑るように移動することも可能であった。アークの言葉を聞きながら、フェーンは振り返る。見上げた彼女の眉は微かにしかめられていた。そして、言葉は続く。

「いずれにせよ、これは兵器よ。世の中にはこの大きなものを芸術品みたいに言う人もいるけれど、芸術も文化も一撃で壊してしまうものの代表。それから、人の命も」

ふっと、にらみつけるようにも見えたアークの表情が緩む。同時に彼女は振り返り、困ったような笑みをフェーンに向けた。

「だから、男の人のそういうロマンは、実は私にはよくわからないのよね。なんて言うのかしら……これは人殺しの道具であって、持っていてうれしいものではないし」

実は理論は苦手だしね、と、付け加えてアークが笑う。メインエンジンに核融合分裂システムを利用した発電機を持ち、その発電機の点火用及び予備電源、主に移動などで消費されるエネルギーを造り出すための太陽電池を一次装甲板の下に装備した、半永久的に稼働可能とも言われるそれは、まさに科学の結晶と言わんばかりの代物だった。元々その発電機及び外装の耐熱構造は、外宇宙へ飛び出すために開発されたものだった。しかしその出力の高い小型エンジンや、軽くて比較的薄いにも関わらず高い耐久性を持つ装甲板は兵器として利用されるとその実力を十二分すぎるほどに発揮し、更なる進化さえも促し続けた。噂では数年後にはその小型エンジンを二器搭載した、驚異的なパワーを持つマシンが開発されるのではないかと、とも言われている。

「皮肉ね。科学的水準は外宇宙へ星を捜しに行けるほどだと言われているのに、その使い道が戦争にしかないなんて」

しかもこの世界では戦争以外の発展に人々は目を向けない。そうする余裕などない、というのが現状なのだろう。何とも愚かしい歴史が、有史以来五千年の今も続いている。

「おいアーク。そんなとこで何やってんだ？」

兵器を見上げるアークと、それを見つめるフェーンに向けて、ややもするとぶしつけな声が投げつけられたのはその時だった。打たれたように振り返り、アークは口もとだけ歪めて笑うと、その声の主にこう答えた。

「彼に基地の中を案内しているんです。そういう貴方はお暇そうですけど、何してるんです？」

「そう怖い顔するなよ。かわいい面が台無しになるぞ？」

「お心づかいありがとうございます。でもご心配なく」

丁寧な中でも、言葉はどこか刺々しい。思ったフェーンは口元しか笑っていないアークが対峙している男を見やる。同時に、その男の視線がフェーンのそれとぶつかる。

「見慣れない顔だな……何だアーク、年下趣味か？」

無礼と言えば無礼すぎる口調で言い、男、シロ・グランドは無遠慮にずかずかとフェーンの前へと歩み寄った。何事だ、と思う間もなく目の前に大男に立ちはだかれた彼は、その顔を見上げ

るようにして、それからアークに問いかけた。

「レクスライ少尉……この人は？」

「レクスライ少尉？」

グランドはそう真似るように言って、ぷっとその場で吹き出す。アークは口元の笑みも納めて、わざとらしいくらいに多大な溜め息をつくど、

「一体何の用なのかしら？グランド少尉」

「何だその呼び方、他人行儀だな。いつでも『シロ』って呼んでくれていいんだぜ？アーク」

「じゃあシロ、一体何の御用かしら？」

ニヤリと、何を思ったかグランドが笑う。アークはそれを睨めつけて、更に言葉を付け加えた。

「貴方のお相手ができるほどの暇は、持ち合わせてないんですけど」

語気は相変わらず刺々しい。グランドは軽く肩をすくめて、

「へいへい、邪魔はしねえよ。かわいいツラして、本当に怖くなっちゃったなあ。入ってきた頃はイロハのイの字も知らないみたいにかわかったのに」

「二年もいればいろいろと勉強もできますから。特に先輩方からは、貴方にだけは隙を見せるな、と厳しくしつけられたことだし」

アークの言葉は相変わらず厳しい。何事なのか全くわからず、フェーンは二人のやりとりをただ見ているだけだった。グランドは大げさに、そしておどけるように大きな身振り手振りを付け加えて、なおもアークに食い下がる。

「おお、心外だなあ。隙がどうこうなんてのは。それじゃあまるで俺がイケナイ男みたいじゃないか」

「とにかく今は忙しいんです。ついでに、職務中のナンパはやめていただけます？どうせお応えもできないことですから」

ぴしゃりとアークが言い放つ。ナンパなる意外な単語が飛び出してフェーンには更に状況が見えなくなる。声を立てて笑ったのはグランドだった。そして更に、言葉を綴る。

「わかった、わかりました！そうとんがるなよ、社交辞令じゃねえか。なあ、ぼーず！」

「え？」

ばしばしと、グランドの手は何の前触れもなくフェーンの肩をたたいた。何事かと彼が混乱している間に、今一度、グランドがその正体を問うように言葉を紡いだ。

「新入生か？こいつ。名前は？」

「あっ……フェーン・ダグラム、です……うわっ」

答えるのとほぼ同時に、上から頭を押さえつけられる。ぐしゃぐしゃと力任せに髪をかき回されて、フェーンには抵抗する術もない。

「いいな—お前。初日からこんな美人に手取り足取りご指導か？か—っ、俺も新入生になりたいねえ」

「何馬鹿なこと言ってるんです。それにそういう貴方こそ本当にここで何してるんです？まさか本当にナンパ？」

アークの口調は「刺々しい」から、「呆れ」に変わっていた。ため息まじりの言葉を聞いて、

ん、とグランドはそちらを見やる。その際に手が緩んで、フェーンはあわててその戒めから逃れた。

「おう、それでも構わんがな。何しろヒマでヒマで。部屋で寝コケてるのも難だから、ちょっくからハンガーでも覗きに来てんだ」

「そんなに暇なんですか？部屋のお掃除とか、したらどうです？」

は一あ、と、言葉の後、再びアークはため息をつく。初めて出会った男と、それに対して奇妙に疲れているアークとをようやく見比べて、フェーンは今一度アークに向かって問いかけた。

「レクスライ少尉……この方は？」

「ああ？俺か？俺はな……」

ふっふっふ、と勿体をつけるようにグランドが笑う。隙をついてアークは言った。

「シロ・グランド少尉よ。第七小隊の副長。一応十年のキャリアだから大先輩とでもいうところかしら」「おいアーク、一応ってな何だ、一応ってな」

言いながらも、グランドは機嫌良さそうに笑っている。フェーンは何が何やらさっぱり理解できず、きつい物言いのアークと軍人にしては砕けすぎた態度のグランドとを見比べ、しばらく黙り込んでいた。

「まあそんなわけで年期だけは変に長いが、よろしくな……ダグラム少尉」

「よろしくお願ひします……グランド副長」

「シロ、でいい。副長なんてのもつけてくれるな。俺あそーゆーの、大嫌いなんぞな」

軽くフェーンが会釈するのを見ながらグランドは苦笑する。アークはそんなグランドを一瞥して、一人さくさくと歩き始める。

「さ、ここはもういいでしょう。グランド少尉も。彼は今日ここに着いたばかりで疲れているんです。個人的にお話があるならお互いに暇な時間になさって下さい」

「いいじゃねーか、ちょっとばかし話するくらい。なあ、ぼーず」

ついさっき名乗ったのにもかかわらず、グランドはその名前を呼ぶつもりはなさげだった。にやにやと笑いながら、やがて、

「しかし、若いのはかまやしねーがよ、こんなガキにパイロットなんか勤まるのかねえ？」

その目は値踏みするように訝しげなものへと変わる。見返しながら、フェーンは何も言わなかった。アークはその眉を露骨にしかめ、

「少尉、そういう言い方は彼に失礼でしょう？いくら先輩でも……」

「ぼーず、いくつだ？」

構わず、グランドは今一度フェーンの顔をじっと覗き込んだ。年上とは言え所見の相手にこんな扱いをされる覚えのないフェーンは、じろりと、そんな彼を睨み返す。

「十六、です」

「ほー……十六、ねえ……にしても、なっさけねーガタイじゃねーか。なあ？」

言葉と同時に、グランドが鼻先で笑った。何だ、と、フェーンが思うのも無理はない、それは明らか挑発だった。何なんだ、この男は。ぶしつけで、礼儀の欠片も見られない。特別自分が礼儀正しいとも思えないが、それにしたって……。

「失礼な人だな」

フェーンの口からそんな言葉が出る。あ？と声を漏らし、グラントはにやついた笑みのへばりついた顔で、更に言った。

「先輩に向かってそーゆークチを利くってのも、十分失敬じゃねーのか？ぼーず」

「ぼーず、じゃありません。ダグラムです」

「おーおー、一端の事言ってくれるわ。半年前まで地下でパパやママと一緒にぬくぬくしてたお子様ポンチが」

はん、と鼻先で強く言ってグラントは、フェーンの顔を覗くためにわざとらしく屈めていた体を起こす。無駄な贅肉だけは着いていない厚い胸を反らし、彼はそのまま、自分より随分小柄な少年を見下ろすようにして言った。

「こんな時期に半年でキレイに訓練所出てきた？バカ言え、そりゃ優秀だからじゃなくて、面倒見切れないから追ん出されたっつーんだよ。どーせ教官共に嫌われてたクチだろ？いい気になってんじゃねーぞ？コラ」

「ちょっとグラント副長……何言ってるんですか。やめてください！」

雲行きは、十分に怪しくなりつつある。あおっているのは誰にでも見て取れた。あわててアークが制止にかかるが、その男はそんなことで大人しくなる様な性分でもなかった。そして、

「見ず知らずの人にそこまで言われる筋合いは、ないと思いますが？」

フェーンが、そう言葉を返す。露骨な嫌悪の表情がその顔に上って、誰の目にも明らかすぎるほどだ。ニヤリと、言葉にやけに楽しそうに笑ったのはグラントだった。面白そうなヤツだ。胸中でつぶやき、グラントは言った。

「まあ確かに俺は見ず知らずの男だ。そこまで言う筋合いはないがな。ちーちゃんひよっこに職場うろちよろされて足手まといになられちゃたまねーんだよ。何しろ俺達の仕事は人殺しでグィ抜いたら虫ケラみてーに殺されちゃうんだからよ？わかってんのか？ぼーず。ゲーセンのゲームじゃねーんだぞ？」そのまま、彼はあごをしゃくるようにして二人に背を向ける。不遜な態度に、フェーンはその眉をますますしかめた。

「だったら、何なんですか？」

ハンガーにいたガトル・スライサーの元にその知らせが届いたのは、とりあえず手が空いたから一息つこう、と油まみれの作業用グローブを脱ぎ捨てたその時だった。

「テスターM？何です？そいつは」

ごうんごうんと、相変わらずその場所では何かしらのモーターの駆動音とともにその他の作業によって生じる雑音とが絡み合って響いている。その傍らで、やや暗目の灰紫の詰襟を着たその男は、整備の終わったばかりと思しきマシンを見上げてその問いに答えた。

「今ドゥーローで実験が進んでいる機体だ。正式名称はまだ公表されていない」

元は暗目のブロンドだったであろうなで付けた髪には、やや白いものが混じっている。作業場において詰襟を全く着崩さずにいるその人物は、微かに笑みさえ浮かべながら目の前の機体をただ見上げていた。

「……しかしいつ見ても、大きいな。私達の頃にはもっと小さくて貧弱だったが」

「それで大隊長どの、その新型がどうしたんです？その話なら、明日にでもガベルのヤツにさせるんでしょ？」

襟章の形は菱形、深紫の地に金の縁取り、加えて一本線。横顔のすぐ下に見えるその小さなバッジを見ながら、ガベルは問いかけた。マシン・メイス大隊と呼ばれる彼らの長であり、佐官としては唯一のパイロット出身者、ジョルジオ・レイシャは、その問いかけに答えるように振り返る。

「一カ月後に試作が六機こちらに納入になる。それまでに搭乗者を六名絞り込まなきゃならないんだが……」

「へえ……そいつはまた……じゃあエプスタイン主任も一緒に戻るって訳ですか？」

目を丸くさせ、スライサーが問い返す。大隊長は苦笑を漏らしながら、

「それもそうだが、スライサー少尉」

言ってこほんと小さく咳払いをした。スライサーは目を丸くさせたまま、

「さっきガベルがちらっと寄ったんで話でも聞こうかと思ったんですがね……あいつむこうでもまたカリナとなんかやらかしてきたみたいで。聞きもしないのに釘刺されましたよ。全く……職務怠慢はどっちだって言うんだ。ねえ？」

「君を、搭乗者候補の一人に上げようと思うんだが」

しかしスライサーのそんな言葉に彼は全く触れず、彼は自分の言いたいことをその場で述べる。スライサーは聞くなり、そのままの顔で言葉を返した。

「俺を？新型ですか？」

「ああ……と言っても、特別どうだと言うわけじゃない。当面は実践テストと言ったところか。五年計画でマシン・メイス部隊を旅団サイズにまで大きくさせる。そのうちの一個小隊を任せるか否か、というところの……」

「俺より先にガベル少尉に持っていくべき話でしょう、そいつは」

笑いもせず、眉もしかめず。平然とした顔でスライサーは返す。軍人とはおよそ思えない柔らかい表情で、レイシャは笑い、

「あっさり断られた、ついさっき」

「あのバカ。せっかく出世させてやろうって大隊長からの直々のお言葉だったのに……」

その言葉にスライサーは舌打ちまでしてしまいましげに一人ごちる。軽く声を立ててレイシャは笑った。

「まあ、あの男はそういうヤツだ。しかし長生きし続ければ、いずれはそういう話も出る。もっとも現状では上層部の大部分がスティラからの出向だから、ヤツが嫌がるのも無理のない話だが」

「ま、それもそうですが……俺らとしてはレイシャ少佐殿がとっとと将官にでもなってくれるとありがたいんですけど」

「無茶を言うな。これでも、ここまで生き延びるだけで随分苦労したんだ。これ以上は無理だろうよ」

五十がらみの男は、そう言って肩をすくめる。伝説の、と言うにはまだ時間が経ってはいないが、いずれその男はこの国の伝説になるだろう。まだ特務機関が、その母体組織であるソレアの予備防衛組織だった頃から所属する、かつて土木作業用だったマシンに手を加えただけの兵器を駆って生き延びた人間。スーパーエリートという代名詞のはじまりとも噂される一軍人。上層部の天辺からも恐れられる男だ。ただしこの国に「伝説」が存在できる歴史が、この後刻まれればの話だが。スライサーはそんなことを思いながら、彼と同じに苦笑した。そして、そのままレイシャに、何気に問いかける。

「けど一カ月後に六機ですか……今から人間探して、間に合うんですか？」

「上から指名されているものもいる。今日付で一人訓練校から来た新人も含めて、候補は十五名だ。レクスライ少尉に教育係を任せたが……まだここには来ていないのかな？」

言葉を紡ぎながらレイシャはあたりを見回す。小首を傾げて、

「新人？いや……俺はまだ逢ってはないですが……」

そう言って何気なくスライサーは目を上げた。同時に、あたりに甲高い女性の声が響く。

「すっ……スライサー少尉！良かった！」

バタバタと足音も荒くかけてきたのは若い女性士官だった。見つけ、何気にスライサーは笑う。

「お、噂をすれば何とやら。どうした？アーク。今、お前の……」

話をしていたんだ、と言うより前に彼女はそのまま駆けつける。そして傍らのレイシャに気づくより前に声を放った。

「ちょっと来て下さい、大変なことになってるんです！」

「何だ？血相変えて……大変なこと？」

普段は冷静沈着で年齢よりも落ち着いた彼女が異様にあわてる姿を見て、のんきにスライサーは首を傾げた。アークはそのまま、

「とにかく来てください！グランド少尉を止められるのは貴方しかいないでしょう？」

彼が何事かと問うより前にその手をつかんで走り出す。半ばひきずられるように、スライサーはその場から走り出した。

「シロのヤツが新人無理やりシミュレーターに押しこんだあ？」

どよどよと、あたりは普段とは違った意味でざわめいていた。ハンガー内の一角、白い大きな箱形の機械が何台か置かれたその場所を、どこから集まってきたのか、いつのまにか黒山の人だかりが囲んでいた。アークはその黒山の人だかりの手前ではあはあと肩で呼吸しながら、それまでのいきさつをざっとスライサー、そして一緒に着いてきたレイシャに説明して、重ねるように言った。

「お願いします、グランド少尉を止めてください！彼は今日ここに来たばかりなんですよ？いくらシミュレーターでの模擬戦と言っても無茶過ぎです！」

「って……言っても、なあ……」

白い箱は黒山の人だかりの向こうである。こいつらも全員職務怠慢だよな、と自分のことは棚に上げ、何気に思いながらスライサーはあたりを見回す。レイシャはというと軽く笑いながら、

「何、構わないだろう。たかが模擬戦だ。死ぬわけじゃない。それに彼がどのくらいできるのか見てみたい」

「だっ……大隊長！貴方までそんなこと仰るんですか？それに、今のシミュレーターは昔のものとは大違いなんですよ？揺れるしそれ相応の衝撃だって走ります！一緒にしないでください！」

上に立つものとは思えないその発言に思わずアークが声を上げる。まあまあと自分の娘ほどの年齢の少女を軽くいなし、レイシャは笑いながらスライサーに言った。

「後で結果を報告してくれ。彼も、候補者だ。よく見ておくように」

「へ？大隊長殿？」

言い残し、レイシャはくるりと踵を返す。呆氣にとられてスライサーはそれを見送り、それからまた改めて、黒山の人だかりの向こうの白い箱へと視線を投げた。周囲には二、三人、セットアップのためにメカニックその他がうろうろしているのが見える。アークはそのそばで地団太踏みながら、本当にこれでいいの、と立ち去った上司に向かって吠えている。

「……まあ、そういうことだ、アーク。ちょっと大人しく見学してろや」

「って……そんなのんきな！確かにあおられた彼も彼ですけどグランド少尉も少尉です！どうしてこうも貴方達って無茶苦茶なんですか！」

「俺と一緒にしてくれるな、頼むから」

「トリオG」を特務機関内で知らない人間はいない。アストル・ガベル、シロ・グランド、ガトル・スライサーの、名前の共通の一文字を使ってつけられたその仇名は、彼らの普段の素行なども十把ひとからげにした「悪名」だった。ある人のいわく、右に出るもののないクラッシャー、またある人のいわく、大陸最強の三人。この三人がマシンを駆ったならたった三機でラステルの制圧も不可能ではないとまで言われているのだ。もっともそれは彼らのチームワークの良さをも物語っているのだが、いずれにしてもスライサーにとっては、あまりうれしいニックネームではなかった。

「しょうがねえな……とりあえず、一応止めてみるが、俺よりガベルのヤツのほうがよっぽど抑止力がある。捜して連れて来てくれるか？」

ため息混じりに言って、重い腰を上げるようにゆっくりとスライサーは目の前の人混みをかきわけ始める。わずかに見送ると、アークは踵を返して再びそこから駆け出した。

「このシミュレーターは訓練校のものよりずっと本物に近く作ってあるんだけど……搭乗経験は？」

白い箱の中にはリニアシートが設置され、ぐるりと取り囲むように様々のコントローラーが設置されていた。カメラは上下左右の全方向を捕え、映像が視界をくまなく埋め尽くす。壁の内側全体がそのモニタになっており、そこからまた、によきによきと生えた枝のような支柱の先に、小型のモニタやコントロールパネルが設置されていた。シートにくくりつけられる前に、一応戦闘スーツを着たほうがいい、と勧められたが、フェーンはおろしたての詰襟を脱いだ格好で、それを丁寧に断った。メカニックは全員年上で、しかしこの規定で全員彼より格下だった。パイロットは花形、とは言えないがここでは大切に扱われる。メカニックは労働者の扱いだが、彼

らの最低はまさに「兵器」だ。公金で少ない資源を選びすぐって作られるその精密機械のように、大切な。だから新人とは言え怪我をさせるわけには行かないのだが、

「シミュレーションで怪我はしません。そんなにやわに見えますか？」

と、見た感じは世間知らずの甘えた少年のようなフェーンは、問いかけた相手をろくに見もせずと言ってのけたのだった。原則としては下士官にとって上官の命令は絶対である。これ以上何か言ってそのことに言及されても気分が悪い。メカニックの伍長はそんなわけでそれ以上彼にごり押しはしなかった。ただし、もしもということはあるからヘッドギアだけはつけてくれ、とその装備だけを認めさせた。何しろシミュレーターは訓練用の機械である。訓練にはそれ相応の現実感が必要であり、そしてその現実感はできうる限り再現されなければならない。大怪我に見舞われると言うことは滅多にないが、それでも何かあっては事である。いやそれくらいの「何か」はある。フェーンはそんなわけでヘッドギアと、一応操縦用のグローブを身に付け、ほぼ本物に近い形のそのコクピット内で準備がされていくのをただじっと待っていた。言われた通りに、今まで見てきた訓練機とは少々レイアウトが違うようだが、大体の位置を把握すればそんなに気になるものでもない。適当にセッティングの確認をして、彼はその場で嘆息した。スピーカーから、おいまだか、とややうんざりしたようなグランドの声が聞こえる。ヘッドギアに付けられたインカムに向かって、フェーンは呆れながら答えた。全く、大人しく待つこともできないのか、この男は。

「準備できましたよ」

ぶん、と起動音がして、正面モニタの片隅に小さくウィンドウが開かれる。映し出されたのは相手側のコクピット内のようなようだった。やや苛立たしげなグランドの、整ってはいるが醜い顔がその真中に見える。その顔のままでニヤリとグランドは笑い、

「待たせるのは女と敵機だけにしろ。俺は気が短いんだ。ついでに、男に待たされる趣味はねえ」

「今の貴方は明らかに僕の敵です」

さりと、フェーンは臆面もなくそう言って退ける。ぴくぴくと、グランドの額は痙攣した。ウィンドウを見ながらフェーンは更に言葉を続けた。

「それで、一体どうするんですか？これから」

「稼動不能になったらそれで負けだ。腕がもげようが足が吹っ飛ぼうが、動けるうちはお互いにつぶし合う。どうだ？リアルだろう？どうせこの外は戦場なんだ、スポーツ格闘技みたいに礼儀正しくなんてする必要ねーよ。それとも、ハンソクー、とかいうのに守られて戦いたいか？ぼーず」

スピーカーから流れるグランドの声に笑みが混じる。嫌なヤツだ、バカにして。思い、フェーンはその眉を露骨にしかめた。そして手近のコントロールパネルをたたいてモニタ上のウィンドウを閉める。

「構いませんよ、それで。貴方をやっつければいいんでしょう？早い話が」

何だお前、意外に話がわかるヤツだな、とスピーカーからのんきなグランドの声が聞こえる。フェーンはそれを聞くなり更に眉をしかめ、ちっと舌打ちすると強く言い放った。

「ぐちゃぐちゃ言っていないでさっさと始めましょう。貴方と話していると気分が悪い」

ミッシュ・マッシュ所属マシン・メイス研究所は、シル・ソレアの南に位置するドゥーロー湖を臨む場所に立っていた。そのために通称「ドゥーロー」と呼ばれ、そこではその人型兵器に対するありとあらゆる研究が行なわれている。主導権を握るのはソレアの機械開発公社で、公社の職員は一応特務機関の準構成員としての扱いを受けている。その情報は厳重に守られ、滅多なことでは外に漏らされることはない。彼らは頻繁に本部に所属するメカニックおよび開発者と協力して様々な武器を開発、作成をし続けている。ラステルの武器庫との異名を持つソレアにとって、そこは本部基地に次いで重要な施設であった。しかしその運営はやはりスティラ軍部に委ねられており、その許可がなければ何事に関しても実行できないというのか現状でもあった。だから今回の新型開発もその配備も、すべてスティラの軍人達が決定したことだ。このところは結構ひまなはずなのに、とそのドゥーローから戻ったガベルは一人、住居施設である建物の食堂でコーヒーを飲みながらそんなことを考えていた。

衣食住の配給は、軍事組織なら常識である。そこに居さえすれば彼らは勝手に生き延びられた。高い給料に上乘せの危険手当の額もやはり膨大で、使わなければ使わないだけそれらは貯まっていって一方だ。家庭を持ち、扶養家族が居るのなら用途もあろうし、いざと言うときの貯えにもなる。が、この男にとって、それはただ蓄積されていく数字でしかない。全く使わないということもないが、彼の給与振込の預金口座の通帳の変に桁数のある数字の列は、時経るごとに大きくなり続けるだけだった。家の一件も買えるな、こりゃ、とかいつだったかジョークとも取れないようなことを誰かが言っていたな。見るたびに彼はそれを思うのだがやはり使い道もなく、それはただひたすら溜まっていく一方だった。時々貸したりもするが、彼の取り立ては厳しい。それは守銭奴だから、とかそういう理由ではなく、相手を思っていることだった。もっとも借りに来るのは二歳年下の同僚だけだった。

ここでこうして働いていれば、生活に困ることはほとんどない。たとえ遊びすぎて膨大な借金を抱え、返済に困窮しても、三度三度の食事と住まいと、最低限着るものは支給されるのだ。贅沢と言えば贅沢な環境だ。コーヒーも飲みたい放題だし。改めてガベルはそんな思いを巡らせ、またコーヒーを口に含む。とは言え、この仕事は楽ではない。上官命令は絶対で、多少の無茶には目を瞑らされるし、何より命をかけて戦うことがその本分である。更には、パイロットという仕事には体力がいる。何しろ乗って移動しているだけでもかなり疲れる代物だ。それでもって敵と戦うと言うのだ。疲労度は計り知れない。

「その新型に……新入生を、か……」

食堂には人気はなく、あたりはしんと静まり返っていた。ガベルがドゥーローに出向していたのは三カ月間、新型開発のために行ってくれ、と言われて赴いたはいいが、どうやらそれはただそれだけのための指示ではなかったらしい。戻ってすぐに上官に報告するやいなや、彼はその指示を受けた。一カ月後の配備と同時に、新型部隊を率いてくれ。そして、上官はこうも言った。今もいいが、雲行きは怪しい、と。どういうことなのかは詳しく聞かなくてもわかる。ここ数年、敵国ラビスデンの対ラステル軍との間で起こった衝突は、小規模なものが多かった。敵国はその

巨大な大国の軍事力をその場に投入していないため、というのもその理由の一つだった。ラステル周辺は、帝国の中央から言えばいわゆる辺境地帯である。彼らはいまだにラステルを一国家とは認めておらず、地方自治体の蜂起くらいにしか捕えていない節があった。そんなものの鎮圧に帝国軍を差し向ける必要はない、周辺の属国にその処理をさせよう、というのが敵の最初のやり方だった。が、しかし、その蜂起は長期間に渡り、彼らの想像を超える損害が出始めていた。そこでラビスデン側は辺境の小国及び荘園の元首、首長に命じて対ラステル連合軍を結成させ、それによってラステルの反乱を鎮圧しようと試みた。そしてここ半年の間に、その成果らしいものがじわじわと出始めていた。奇妙な衝突の増加である。ヒマだヒマだと言う反面で、彼らはそこそこに戦闘を繰り返し、そしてその兵力を確実にけずられ続けていた。そのことに上層部が気付いたのが約半年前。しかも調査の結果、相手側の計画は一年以上前から進められていた、とも。バカなことを言ってもらっては困る。上の指示なしでは、駒である自分たちは動けないのだ。戦局を見誤られては元も子もない。思いながら、ガベルは同時につい先程聞かされた話を、反芻するように思い出していた。新型六機の配備が一カ月後、候補者が十五名、現在理由も告げずに足止めさせている数人と、本日付でやってきた新人一名、そして自分。今のところ打てる手はそれだけしかないから、何とか時間を稼いでくれ。上からの指示は凡そそんな内容であった。無茶苦茶だな、と彼にそれを直に告げたパイロット上がりの上官は苦笑し、しかしここは軍務機関だ、とも付け足した。おまえがやれないと言うのなら、その役目はたらい回しに巡って、最後の一人に託される、それだけだ、と。全く、人を何だと思ってやがる。胸中毒突きながら、ガベルは一人コーヒーを飲む。こういう時にはアルコールをとりたいたいものだがあいにく昼間からそういったものを支度してくれるほど、そこは気の利いた場所でもなかった。加え、三カ月ぶりの「帰宅」で、自分の部屋にはろくな食物さえストックされていない。

「あー……バカらし」

三杯目のコーヒーを飲み切るとガベルは席を立った。椅子が床を滑るいやな音が、ほかに誰の姿もない食堂内に響き渡る。部屋に戻って寝るとでもするか。しかしこれだけコーヒーを飲んで眠るにしても、そんな思いを巡らせ、その場で大きく伸びをしたその時、上着のポケットの中から甲高い電子音が響いた。非常用に構成員全員に支給されている小型通信機の呼び出し音にガベルは眉をしかめ、基地の敷地内ではよほどのことがなければ滅多に使われることのないそのエマージェンシーコールに、何事かとそのボタンを押した。

「こちらガベル……何だアークか」

掌の上のカードタイプの通信機からはその大きさからは想像のつかないほどの鮮明な音声があふれる。随分とあわてている後輩の声と内容にガベルは眉をしかめ、

「わかったすぐ行く……ったく、あのバカ、何考えてやがる」

どうやら部屋でゆっくり体を休めることもままならないらしい。座っていた椅子をそのままに、軽く駆けるようにガベルは食堂と、宿舎棟を出た。

ガベルがその白い箱の前にたどり着いたその時、集まっていた黒山の人だかりは妙にてきぱきと働いていた。道を空ける、だの、担架を通せ、だの、時折そんな目立った声が飛び、多少あたり

がざわついてはいたが。人垣に囲まれて作られた道の一番端で、ガベルは手近にいた一人に問いかける。

「おい……何があった？」

「何って、今グランド少尉と新生が模擬戦やってて……あんた見てなかったのか？」

「おう、俺あたった今来たところだ」

問われた青年兵卒はへーえ、とのんきな声で言いながら振り返り、そこで絶句する。着いている襟章は同じものだが、いたのは明らかに自分の先輩であり、かつ「トリオG」の元締めと言われる人物だったからだ。

「がっ……ガベル少尉！もどっ、もどっ……戻ってたんスか？」

声をひっくり返すほど驚いて彼は言い、その声に周囲が奇妙な反応を示す。ざっと見て二百人ほどだろうか。ガベルはすぐそばの男もそっちのけ、そのまま、人垣が割れてできたきれいな道を、足並み荒く歩き始める。

「おいアーク、どこにいる！ついでにお前ら、こんなところで何してやがる！さっさと自分の持ち場に戻れ！」

辺りに怒声が響き渡る。直後ざわついていた周辺は瞬く間に静まり返り、その奥から、聞き慣れた男の声がガベルの耳に届く。

「やっぱり弱っちいでやんの。使えねーなこりゃ」

「なっ……グランド少尉、何言ってるんですか！初心者にこんな無茶させて！」

ヒステリックにその後響いたのはアークの甲高い声だった。まっすぐ、ガベルはそちらに向かって駆け出していく。人垣の向こうではグランドか上着を脱いだ格好で、ややもすると退屈そうな顔をして何かを見下ろしていた。

「初心者だったって、訓練はすんでんだろ？高々シミュレーターで酔ってちゃ、先が思いやられらあ」

「おいその品性下劣バカ男！」

そしてたどり着くなり、あーあー、と言って呆れている彼に向かってガベルが言い放った。気付いて、グランドは振り返り、そして、

「おう、ガベル。何だ、お前部屋に戻ったんじゃないのか？」

「ああ、戻ってまったりしようとしてたよ！アークが呼び出さなきゃ……」

言いかけて、ガベルは足下に何かが転がっているのを見付け、言葉を失った。グランドはしらっとした顔のまま、

「ああ、そいつか？あんまりナマイキなんでちょっともんでやった。したら下りた途端にげーげー吐きやがって、クサいの何のって……」

言われるより先にガベルもその臭いに気付く。ふと視線を投げると、そこに吐瀉されたものと思しき水溜りがあって、更に彼は眉をしかめた。

「シロ、てめえ……」

「ん？ああ、それ？吐いたヤツが目え覚ましたら片付けさせ……」

びくびくっ、と、ガベルの額が痙攣した。見つけたグランドは言葉を失い、反射的に身構えてわ

ずかに後退りする。

「乗れ。相手だったら俺がしてやる。それとも、本物でやられたいか、あ？」

「な……何だよ、それ……ってゆーかなんで、怒ってん、の？」

ん、と、の、の間の瞬間にガベルの腕がグランドの胸倉をつかまえる。そのままの勢いで引き寄せられ、締め上げられ、ぎりぎりシャツの生地が悲鳴を上げた。

「死にたきゃ俺がいつでも殺してやる！覚悟しとけ！お前らもお前らだ！どうしてこのバカを止めない？」

あたりにその怒声は響き渡った。すぐそばで聞かされたグランドはまさに鬼の形相と化した彼の表情と、締め付けられる首の感触に、ただただ絶句するばかりだ。

「おい、担架が来たぞ！そこ退け！……ガベル？」

声とともにまた一人そこに駆け込んでくる。振り返らずともわかるその主に対し、ガベルは再び怒声を放った。

「そろいもそろってバカすぎるぞ、お前ら！」

同時に、締め上げられていたグランドはその床に叩き付けられる。どさりと言う音と衝撃、そして顔に生温い感触があって、あわててグランドは跳ね起きる。したたか体を打ち付けたその辺りには、まき散らされた胃液が具合よろしく溜まっていた。

「うわ、くっせー！」

「おいそこのバカ！お前はそれを片付けてろ！担架、何ぼやっとしてる！さっさと運べ！それから、スライサー！」

矢のようにガベルは次々に指示を出す。それから振り返って、彼はニヤリと口元を歪めて笑うと、目の前で柄にもなく硬直しているスライサーに向かい、低く静かな声で言った。

「どういうことなのか、一から十まできっちり、説明してもらおうじゃねえか……ああ？」

語尾は上がっていた。スライサーは言葉なく、ただそこでこくこくと、数度頷いてそれを承諾した旨を彼に示した。

周囲は、白い砂漠と乾き切った青い空ばかりが続いている。そこが屋外でないことを彼は知っていた。外にいるならきつと風の音がするはずだ。砂煙が渦を巻いて、その砂が肌をたたくはずだ。けれどそこには風も砂煙もなかった。そして風景の片隅にはいくつか黒い枠が浮かび上がり、その上に文字が走る。手元を微かに動かすとその文字は流れて表示を目まぐるしく変えていった。それはすべてヴァーチャル、作られた映像だ。ただ自分だけが本物で、座っているシートも触れているコントローラーも、全てが贋物だった。正面右上には先程からエマージェンシーを告げる赤い表示が音もなく明滅を繰り返している。そういえば、音がない。どうしてだろう、忠実に作られたシミュレーターだと言うのに。そう思ったその時フェーンは我に返った。いや一目を覚ました。視界が、白い。座っていたはずなのにどうして横になっているのか。それを掌握するのにやや時間を要し、彼はその間ぼんやりとその白い視界を眺めていた。よく見ると枠が引かれている。天井だ。

「だから俺はやめろって言ったんだよ！あーもー、わかんねえヤツだなお前は！」

「だったら腕ずくで止めろ！そのくらいの能くらいあるだろうが！」

「それで聞くタマか、あいつは！」

「ちょっと二人ともやめてください！ダグラム少尉が眠っているんですよ！」

野太い男の声が二つとややヒステリックな女の声がベッドを囲んだカーテン越しに聞こえる。ここは医局で、自分はシミュレーターのひどい揺れに酔って、何かを吐いた後ぐったりして担ぎ込まれた、らしい。横になっていること、見える天井、聞こえる声、そしてこの気分の悪さ。全てを統合してそう判断したフェーンは、そのままふう、と大きくため息を吐いた。そして、醜態をさらした事実一人その場で赤面した。

「大隊長がどういう指示を出したかは知らないが、模擬戦やらすにしてももうちょっとマシなやり方ってのがあろう！いい大人が十代のガキいじめてどーすんだ！」

「そういうことはシロに言ってくれ！なんで俺と一緒に前にお前に怒られにゃならんのだ。担架手配して運んでやっただろうが！それに！」

「やかましい！男がぐすぐず言い訳なんてすんな！この脳筋バカ！」

「二人とも、いい加減にしてください！」

耳をつんざくようなアークの声が今一度響き渡る。一体カーテンの向こうでは何事が起こっているのだろうか。フェーンはゆっくりとベッドから体を起こし、手近な布の端を手にとってそれを開けてみた。医局、と言うより医務室に近い狭い室内で対峙する二人の敵つい男と、傍らに、可憐な少女のようにさえ見える女が一人。その奥手で困った顔をしているのが、どうやらドクターらしい。ややうんざりした様子でひきつった笑みを浮かべ、入る間もないらしくただそこにたたずんでいる。

「あ……あの……」

消え入りそうな声でそれに果敢に挑戦したのは、フェーンだった。言い争っていた二人の大男と制止しようとしていた小柄な彼女は、気付いてとっさにそちらを見やる。

「ダグラム少尉……気がついたの？」

ぱたぱたと小走りにアークが駆けてくる。何事かと問う必要もなく、フェーンは彼女に言った。

「すみませんでした……あの……」

「貴方は悪くないわ。そんなことより大丈夫？何があったのか覚えてる？」

「ええ……まあ」

曖昧に言ってフェーンはぎこちなく笑う。そしてベッドから出ようとして、先にそれをアークに止められた。

「まだ動かないほうがいいわ。一応脳波の検査も受けて……」

「いやそんな……僕、そんなに貧弱じゃ……」

「何言ってるの！後で何かあったら困るのは貴方なのよ？」

ぴしゃりと言われてフェーンはそのまま黙り込む。しばし厳しい表情をしていたアークの顔が緩んだのは、それから間もなくだった。大したことはなさそうで良かったわね、という言葉が紡がれるとほぼ同時にベッドのカーテンが再び外から開かれる。入ってきたのはそのスペースに納めるにはやや大きな男の体が二つ、先程自分を止めようとした一人と、

「あ」

「おう……また会ったな？」

バスの中で見かけた顔に遭遇して、フェーンは軽く頭を下げる。そのやりとりにアークが大男に問いかけた。

「ガベル少尉……彼を？」

「ああ……ここに来るバスの中でちょっとな。ダグラム少尉って言ったか……初日から散々だったな」

苦笑しながらガベルが中へと入ってくる。その陰にもう一人の人影が見えて、フェーンは罰が悪そうにその場で苦笑した。

「すみません……皆さん。以後気をつけます」

「そうだな、以後気をつけてくれ。アーク、後は頼む」

じゃ、と言ってガベルがまずカーテンの外へと出る。入れ代わるようにもう一人がその中に入り、そして奇妙に大きな溜め息をつくと言った。

「しかしお前、あの手のシミュレーターは初めてって、本当か？」

「はい……訓練所のものはシートも固定されていて、衝撃もほとんどありませんから」

「にしちゃあよくやったよ。あおられて乗ったことにゃ感心できないが……あの動きには感心したね、俺は」

いたずらっぽく笑って彼が言うと、つられるようにフェーンも微かに笑う。傍ら、アークはじろりときつくスライサーをにらみつけ、

「そういうことを軽々しく言わないでもらえますか？スライサー少尉。そういうところ、グランド少尉とそっくりですよ？」

「はい……すみません」

言われて、スライサーがわずかに小さくなった。

そんなアクシデントのおかげで、その日のうちに新入隊員、フェーン・ダグラムの名は一気に基地内に広まった。十年のキャリアを持つパイロットを相手にした模擬戦は、端から見れば無様な負けっぶりではあったが、その評価はそうしたものではなく、

「さすがに、半年で寄越されるだけのことはある、てか？」

「あのバカ相手に三分もったら十分だろ？フツー」

「それで？感心して強制停止もかけなかったってのか？お前は」

その夜。人気のまばらなシミュレーターブースでスライサーは説教の続きを食らっていた。もとい、フェーンとグランドの模擬戦のデータをガベルとともに検証中、であった。やや大きめのテレビ画面にはグラフィックスで忠実に作られた二機のマシンが映し出されている。最初対峙していたそれらはやがてお互いに距離を測りはじめ、先にグランド機がダグラム機に突進した。カウンター攻撃をよけて後退し、装備していた電磁丈を構えてダグラム機が応戦し始める。三分後、あっさり攻撃を受け流したグランド機にダグラム機は転ばされ、それによって機体の四割が破損、稼動はできたが中のパイロットが脳震盪を起こしていたため体勢は立て直されず、直後機体は至近距離から実弾を撃ち込まれて爆破された。

「……そう怒るなよ。さっきからも言ってるように、大隊長からの指示もあったんだぞ？止めたらやめちまいましたー、なんて言えると思うか？」

「そんなのは知ったことか」

ぐだぐだと続けられるみっともない言い訳に、冷たくガベルは言い放つ。むっと眉をしかめて、スライサーはその隣でふてくされていた。大きく息を吐き出し、ガベルはその画面を見つめたまま、小さくつぶやく。

「確かに……素人に毛が生えた程度にしちゃ動きはいいが……何つーかこう、無謀だな」

「そりゃお前、まだここでの訓練も研修も受ける前だぜ？訓練校でやるのは理論と基礎知識と、ごくごく基本的なマシンの動かし方くらいのもんだ。本当の戦い方なんてのはこの先覚えることだろ？」

はん、と半ばやけ気味に鼻先でスライサーは笑う。そして、

「でもそういうヤツを上は新型に乗せろって言うんだろ？ここでみっちりしごいて」

言葉に、チラリとガベルがそちらを見やった。スライサーはそのまま、

「お前、昇格また断るつもりなんだってな？」

「誰に聞いた？」

「そりゃもちろん、レイシャ少佐から。妙に長く足止めくらって整備手伝いさせられてると思っただが、俺にもそういう可能性がある、とかいうことも言われた」

聞いて、ガベルは苦笑を漏らした。スライサーは彼より二つ年上で、なおかつ二年後輩にあたる。搭乗経験は八年で、その戦績は生き延びている中では群を抜いていた。本部基地に詰めていることはほとんどなく、通常はミネア地区の前線でマシンを駆り続けている。笑いながらガベルは言った。

「年齢順に言えばお前のほうが先だ。そういう話は」

「バカ言え。俺はそういうガラじゃねえよ。もっとも、あのすつとこ品性下劣バカに新型部隊を任せる、ってな話になりゃ、変わってやってもいいけどな」

「俺も、それには同感だ」

スライサーの返答にそう言って、ガベルは声を立てて笑った。肩をすくめて、グランドもその場で苦笑う。

「ま、いずれにせよ候補は他にも何人かいる。お前と一緒にミネアから引っ込んだヤツらの中にも何人か五体満足でピンシャンしてるのがいるだろ？そっちから人選してくれりゃ、俺としては気が楽だ」

「何言ってる、三カ月もそいつのお守りに行ってたんだろ？お前。だったら決定だよ。乗り慣れていて使い勝手がわかってて、しかもアストル・ガベル」

砕けた物言いのガベルに対し、スライサーの口調もややふざけていた。ガベルは笑いながら、

「何だその、しかもアストル・ガベル、てな」

「実際お前はすごいよ、俺なんか足下にもおよばない。尊敬もしてる」

「やめてくれ、気持ち悪い」

声を立ててガベルは笑った。スライサーは何を、と笑いながら言って、

「それで片が付きゃ、多少のしんどいのにも目エつぶっとけ、ガベル。でなきゃ出世もできない上に、一生モノ扱いだぞ？お前は特に」

言い終えると、その目は笑ってはいなかった。どちらかと言うと寂しそうな表情をたたえるそれを見て、ガベルはまた苦い笑みを口元に浮かべた。

「せめて昇進して結婚でもしろ。変な意味で言ってるんじゃないぞ？」

「悪いが俺にはどーも、そういう甲斐性はなくてな。女やら家族やらは、今はほしいとは思えん。実際いつ死ぬかわからん訳だしな」

その答えにスライサーはそれ以上何も言わなかった。ふふん、と鼻先で笑い、ガベルは立ち上がる。

「明日から一週間、俺もD休暇だそう。里帰りも墓参りもできそうにねえな、こりゃ」

じゃあな、と言い残してガベルはそこから歩き出す。その背中に向けてスライサーが、

「あのガキ死なせたくなかったら、お前は大隊長の指示通りに昇進しろよ、わかったか？」

「何だ、そりゃあ。変な理屈だな」

笑いながら、ガベルは立ち去る。見送って、一人スライサーはその場で溜め息をついた。

マシン・メイス第七小隊と呼ばれるチームがフェーンの最初の配属先である。機関におけるマシン・メイス部隊は軍隊の一個旅団相当の規模を擁し、現在総本部基地の警護にはその一個中隊が当てられている。とは言えそれは表向きの話であり、有事の際にはそこにある機体と人員の全てで防衛は行なわれる。現在ラビスデンとの国境地帯、リウヌ国内ミネア地方の前線基地に一個大隊が駐屯し、その他中隊、小隊は他国境地帯の防衛及び連合体各国の地上国境を警備している。激しい戦闘も作戦も繰り広げられてはいない現在、警備、防衛と言ってもほとんどが監視のみの状況下ではあるのだが、それでも彼らは多数の希望者の中から選ばれてしか、地上に出ること

は叶わなかった。

「ま、当分はジムで体力造りね」

そして地上に出たばかりの新人パイロットが翌日言い渡されたのが、その命令だった。

「……体力造り、ですか」

「ええそうよ……不服そうね？」

アークはそう言ってくすくす笑っている。フェーンは黙して、しばらく笑っている目の前の彼女を見ていた。ややふてくされたような少年の表情を見、アークはこう付け加えた。

「たった三分でシミュレーターに酔ってしまうようではこの先本物に乗って戦うことなんてできないわ。違う？」

とにかく今は機体に乗ることよりも、乗るための体力を付ける、と言うのが上からの指示らしい。言われてみればその通りだった。昨日の失態を思い出し、フェーンはその場で小さくうめいた。その様子を見て、アークは笑いながら言葉を続ける。

「貴方の任務は「待機」。その間やることは次の戦闘に備えて少しでも強くなっておくこと、よ。そうがっかりしないで」

「そーだそーだ！アークの言う通りだぜ？ぼーず」

横合いから、そんな声が投げられる。無言のままフェーンは目を上げ、そしてその眉をひどくしかめた。その異変に気付いてアークも振り返る。そしてそこにあつたにやついた男の笑みを見るなり、彼女は苦笑を漏らしながら言った。

「お早うございます、グランド少尉。何か？」

「俺も今日から待機扱いだと。あいにく使えるマシンもないし、他に特別仕事もないんでな。男でも磨こうかと思って。アーク、一緒にどうだ？」

ややもするとのんきすぎる言葉が紡がれ、アークはただ苦笑するばかりだった。

「遠慮しておきます。私にもやるがありますから」

「やること？」

「ええ……ちょっと特記事項になるので言えないけれど。良かったら少尉、彼を見てあげてくださいませんか？」

「え？」

その一言でフェーンの顔色が露骨に変わる。グランドは目をきょとんとさせて、それから改めてそのフェーンを見やり、言った。

「俺が？こいつの相手？そりゃ別に……」

「僕は遠慮します」

構わないが、と言いかけたグランドの言葉を遮るようにフェーンが言葉を放つ。不意打ちを食らったグランドはそのまま目を二、三度瞬かせ、それから、

「……だとよ、アーク」

「随分嫌われましたね、グランド少尉」

その展開に、くすくすとアークは笑う。グランドは苦笑いして、

「おいぼーず、昨日のこと怒ってんのか？」

「……そういうことは、関係ありません」

問いかけられたフェーンは眉をしかめて顔を露骨に背ける。グランドはそのまま、

「俺だってあの後サイテーだったんだぜ？ガベルの野郎にやしかられるわ、スライサーにはあたられるわ。挙げ句お前の吐いたモン片付けさせられて」

「それは自業自得でしょう？僕のせいじゃない」

「いや、お前にも一因はあるな。そんな貧弱なまんまで追い出されてきて、即戦力で使えない優等生なんてお荷物以外の何だって一の！」

けっ、と言葉の後、グランドが吐き捨てる。苦みの混じった笑みもいつかそこにはなく、昨日と同じように、グランドはフェーンの間近に迫って彼を上から見下ろした。

「あれに三分乗ってられないってな、致命傷だ。外に出てから本物に慣れてる時間もねえ。そんなんでパイロットになんかならたら、こっちが迷惑なんだよなあ？」

アークはそれを見てただ困ったように笑っているだけだった。フェーンは微かに上を見上げ、逆光になっている暗い彼の顔を見付ける。目が合うとグランドはまたにやりと笑い、

「どうした、ぼーず。何か言いたいことでもあるのか。ああ？」

「……ダグラム、です」

小声で、それだけフェーンは言い返す。しかしそれも一笑に伏され、

「だからどうした？ぼーず」

「……グランド少尉は人の名前が覚えられない方なんですわね」

言葉の直後、フェーンはその陰からすっと抜け出した。目で追って、追いながらグランドはまた、ニヤリと笑う。

「おう、女の名前なら一発で覚えるけどな。けどお前はここの女以下だ。覚えてやる価値はねーよ」

またか、と内心アークは思った。彼が面白がっていることは誰の目にも明らかで、その上彼が性の悪いのはここでは誰もが承知していることだった。何が理由かまでは彼女にはわからなかったが。フェーンは黙したままグランドの顔を見上げる。グランドは笑ったまま、

「気に食わねーか？ぼーず。じゃ、もう一言付け足してやろうか」

「僕のような貧弱な子供に人殺しはできない、とでも？」

その笑みは一瞬にして消え去った。グランドはフェーンが自分に向ける視線と、そしてその声色に驚き、それからまたにやりと心底おもしろそうに笑う。退屈の最中には何が起こっても楽しいらしい。バカにして。フェーンはその笑みを見て思い、そして更に言葉を綴った。

「僕にだってそのくらいのはわかります。何しに来たと思ってるんです？わざわざこんなところに」 「……上等じゃねーか、ぼーず」

「フェーン・ダグラム、です。シロ・グランド少尉」

まっすぐ、射貫くようにフェーンは彼をにらみつけ続ける。肩を軽くすくめて視線を反らしたのはグランドのほうだった。そして、

「しょーがねーなー、俺様が一人前にしてやろう。オラ、ついてこい」

くるりと踵を返してグランドは歩き出す。フェーンは無言のまま、その背中とアークとを交互に

見る。

「サボらなければ訓練の内容は問わないわ。ただし、貴方はまだシミュレーターにだけは乗らないように」言いたいことがわかったらしいアークはそう言って苦笑する。シミュレーターにだけは乗るな、と言われてフェーンはまたその眉をひどくしかめた。

「何故です？」

「ある筋からの指示、と言っておくわ。そういう誘いがあっても乗らないこと。いい？」

いたずらっぽくアークは笑っている。その表情は無言で、昨日の今日だから、とフェーンに告げていた。わずかの間黙し、こくりとフェーンは頷く。

「了解しました、レクスライ少尉」

「私のことはアークでいいわ。私にもフェーン君、て呼ばせてもらえればの話だけど」

言葉とともにアークがウィンクを投げる。何故か不意を突かれた格好でフェーンは息をつまらせ

「わっ……わかりました。アーク……さん」

「じゃ、がんばってね」

言い残してアークはくるりと踵を返し、その場から歩き去っていく。な、何事だろう。胸中つぶやきながら、フェーンはその背中をしばし見送り、我に返るまでに少々の時間を要した。グラウンドが、おい、さっさと来い、とその野太い声を投げるまで。

基地内司令棟の一フロアは小隊単位でのミーティングに使用されることの多い小会議室で占められていた。ホールもあれば大視聴覚室、なる立派なオーディオルームも完備されたそこは、通称「コミュニティーセンター」と呼ばれ、時折慰安と称して映画鑑賞会なども行なわれるブースである。もちろん本来の用途は作戦会議であり、そうしたことに使われるケースは滅多にない。一度女性構成員による「対セクシャルハラスメント会議」なるものも行なわれたが、そうした問題もそれ以来起こっていないおかげで変わった行事も特に行なわれてはいなかった。基本的にここは人気も基地内でも最も少ない。とは言っても「密談」とかいうものに使われるには少々向いてはいないのだが。

「よお、待たせたな」

暗幕の張られた広くない室内には、電荷された大きなモニタだけが白く光っていた。その小会議室に一人先に入っていた男は声に振り返り、そちらに向かって言葉を返す。

「いや……待たたってほどじゃない。俺も今さっきスクリーンの準備が終わったとこだ……あいつは？」

スクリーンを照らす白い光でぼんやりと闇の中に二人の姿が浮かび上がっている。待っていた男、ガベルは、やってきた男、スライサーに問いかけた。スライサーは、

「さあ、今日はまだ会ってない……新人の世話でもしてるんだろう。何しろ上からの信頼も厚いな、アークは」

そう言って笑い混じりのため息を漏らした。笑い返し、ガベルはあごで彼に座るように促す。

「大隊長どころか……もっと上から直々にダグラム少尉のことも任されてるって話だし。こりゃ

あ俺達は当分、新型とはご縁がないんじゃないかねえ？」「さて、どうだかな」

椅子を引き出してスライサーが腰掛ける。ガベルは短く返して、白く照らし出されたスクリーンを見やった。

「こんなものを見せておけてって大隊長殿が仰ったんだ。縁がないたあ思えねえが」

「なんだ……早速お勉強会か？」

言いながらスライサーもそちらを見やる。ガベルは笑って、

「ま、そういうこった。結構おもしろいこともやらかしてきたからな。笑えるぞ？」

「ほー……じゃあやっぱりカリナ怒らせて帰ってきたわけだな、お前は」

あきれたようにスライサーは言い、傍らでガベルは困ったように息をつく。

「悪いヤツじゃないんだがな、あいつも。どうも俺は駄目だな」

「何言ってる、まんざらでもない癖に。この色男！」

ばしばしとスライサーがその背中をたたく。手加減なしの攻撃にガベルは眉をしかめ、

「ばしばし殴るな、お前の馬鹿力で骨でも折れたらどうすんだ」

「何言ってやがる。いまだに五体満足で、一カ所もつけかえてない男が！」

「お前だって同じだろうが」

「俺は右足にピンが三本も入ってるぞ」

「威張れることか」

からむスライサーを払いのけでガベルは溜め息をつく。三度、会議室の扉は開いて、暗幕をくぐってもう一人がそこに姿を現した。

「遅くなってすみません……あら、お邪魔ですか？」

「おう、アーク、ご苦労さん」

軽く手を上げて答えたのはスライサーだった。そしてそれから、邪魔って何だ、とその場で考える。無視して、ガベルは彼女を見ると座れ、と短く指示を出した。

「アーク……そういやあいつ……ダグラム少尉はどうしてる？」

「ああ、彼ですか？しばらく基礎体力造りをさせるように、って……」

座った彼女に問いを投げたのはスライサーだった。言葉を途切れさせて、アークはその視線をガベルに向ける。ガベルは笑いながら、

「流石にシミュレーターで三分しかもたねえんじゃないだろ？しばらく乗せないようにさせた」

「……何だ、ガベル。じゃああの話、飲むのか？」

あの話、と繰り返すように言ったのはアークだった。ガベルは笑っただけで答えない。彼はそのままスクリーンの方へと向き直り、手元にあるコントローラーで映写機の操作を始めた。

「これが新型……通称「テスターM」だ。サイズは従来型とほぼ同じだが、新開発のエンジンが入ってて出力は今までの70%増。将来的にはこいつで一個大隊を作るって話だ」

そこにはいまだ完成していない機体の、仮に作られた映像があった。ボディカラーは微かにオレンジがかったパールグレー、カメラアイガードは同系色で、反射がオレンジに光るような、黒。

「来月、テストって名目で六機ミネアに投入される」「直接ミネアに？」

映像を見ながら、アークがガベルに問いかける。ガベルも同じくその像を見ながら、
「テストなんかしてられる状況でなさげなのは、誰もが周知のはずなんだがな。アーク」
「はい」

ガベルに呼ばれて、彼女はそちらを向いた。スライサーも同時にガベルを見やる。
「それまでにもっとマシンに慣れておけ」

「……何故ですか？」

「お前さんの配属はほぼ決定だからだ。ついでに」

言葉は区切られる。ため息と、間。その後ガベルの顔に苦い笑みが浮かんだ。

「ガベル、どうした？」

「二階級昇進の上副長らしい」

「誰が？」

問いに、答えるまでもない。ガベルはアークを見てただ笑っている。ぎょっとしたスライサーは思わず、

「……アークが？」

「私……ですか？でも、そんな……」

言われた当人の困惑はそこにいる誰よりも激しい。嘘だろ、と小さくつぶやいたスライサーの声の後、嘘じゃない、と、小さくガベルも言った。

「けどガベル少尉、私はまだ入隊して二年で、ろくにマシンでの実戦だって……」

「そうだ、アークにやまだ早すぎる。ガベル、一体どういうことだ？」

慌てふためいた様子でアークが言葉を紡ぐと、賛同するかのようにスライサーがガベルに問いかける。ため息混じりに苦笑を漏らし、ガベルはそれでも、何でもなしのように説明を続けた。

「上の判断だよ。ま、十機に満たないテスト部隊が適当に活躍してもどりゃ地下の連中の腹ン中もちっとは納まるだろうってな」

「って……それとこれとどういう関係が……」

「適当な広告塔がほしいんだよ、奴らは。アークはそれには打って付けだ。若いし、見た目もそう悪かないし、おまけにリウヌの王家の血縁関係者と来てる」

言われたアークは息を詰まらせる。驚きとともに振り返って、スライサーは彼女を見やった。出身地はリウヌ、しかもかつてその国で貴族という名を冠していた彼女が前線でラステルのために戦えば、リウヌの国民感情にもそれなりの影響を及ぼすだろう。どうやら上によってそういう判断が下された、ということらしい。スライサーは今一度ガベルを見た。やや大げさなそぶりで困ったようにガベルは溜め息をつき、そして言葉を続ける。

「リウヌは相変わらずラステルの中じゃ立場が弱い。ついでに、考え方はまだまだラビスデンよりだ。戻りたい奴らもゴマンといるだろう？帝国側から追い出されたようなモンだってのに。だから上としてはリウヌの支持を得るために、そういうものを担ぎ出したいわけだ。ミネアで戦闘が繰り返して言うんなら、リウヌにとってはどっちの陣営にいたって大した差もないだろう？ここでのごたつきをちょっとでも軽減させようって意志で連合に参加してるのに、その結果が全

く出ないんじゃない、意味もないしな」

アークは絶句したまま何も言おうとしない。はは、とガベルはそこで声を立てて笑う。傍ら、それを見てスライサーが一人眉をしかめた。

「笑い事かよ？連中、人をなんだと思ってやがる」

「スーパーエリート、戦闘代行者……とどのつまり俺達は道具だ。意志も言い分もないほうがありがたいんだろ？」

「お前が言うな！」

叫ぶようにスライサーが言い放つ。声の大きさに、思わずガベルは肩をすくめた。アークは変わらず、やや呆然とした顔でただそこに座っていた。まさに心ここにあらず、という表情をしたまま。

「アル、お前まさかレイシャ少佐にまでそんなこと言われてきたんじゃないだろうな？他の連中ならともかくあの人までそんなこと言うようなことになったら、ここは本当におしまいだぞ？」

「おいおい、そう熱くなるなよ」

わめくスライサーを横目に、軽くガベルは笑う。そのまま、かみつく勢いで立ち上がった彼を見上げ、すかさずガベルは言った。

「だから俺達を一緒に送り込もう、ってんだよ、上の連中は」

「……何？」

スライサーは眉をしかめる。その言葉に、うつむき加減だったアークの顔も上がる。

「頭の固い三十過ぎにどう聞こえるかはわからんが、こういうことだ。上の連中は今回のパフォーマンスを成功させるべく、それ相応の装備をアイドル様に付けて、でもって大々的に国民の皆様に関の存在意義をわからせたいってことなんだよ。つまり」

「俺やお前がいればなんとかなるだろう、てか？」

がくーん、と、スライサーの肩が落ちた。この男が余裕で笑っていた理由がようやくわかったらしい。けらけらとガベルは笑うと、

「おう、ご名答。さすがはスーパーエリートだ。頭がいい」

「……ジョークも程々にしてくれ、疲れる」

どさりと、スライサーがそのまま先ほどまで座っていた椅子に落ちるように座る。そのままうなだれる彼を見て、アークはガベルに問いかけた。

「つまり、私はいるだけでいいということですか？アイドルとして」

「極端なことを言えば、だがな」

アークはその眉をしかめる。二年前の入隊以来、彼女はその出自ゆえ、としか言えない遇され方をされていた。アーク・レクスライ、本国リウヌではアルシェリア・レクサエーノ。彼女の祖母は、そのリウヌ王家の出身であり、彼女の実家レクサエーノ家はリウヌ国内では名家の一つと言われる大貴族だ。そのリウヌはラステルへの連合加入から既に数十年を経ていると言うのに、連合内では一向に発言権も増えず、その他の権限もないに等しい。未だラビスデン帝国とのつながりを指摘され続け、そのために軍事情報のほとんどが得られず、四国内で最も立場も悪い。

「リウヌの連中は得体の知れない団体に税金で運営費を払うのはどうかって言ってる。そこへ若

干二十歳の姫君が、私は国のために戦っていますよ、なんて言ったらどうなる？言っちゃ難だがあの国には王家の支持者だけは多い。得体が知れないって変な疑念もすっきり解消の上、予算の出し惜しみもしなくなるって、こういう効果を狙ってるのさ、上の方は」

「正しくは、スティラの軍部が、でしょう？」

アークが冷たい口調で間違いを指摘するようにずばりと言った。ガベルは肩をすくめ、

「そのとおりだ。腹の立つ話には違いない」

「でもそれが上からの命令だと言うなら従う他はありませんね。それが兵器の仕事だから」

微かに笑いながらアークが言う。自嘲とも苦笑とも取れぬ顔で、そうだ、と低くガベルは返す。傍らのスライサーは疲れて、そして不機嫌な顔でその二人のやりとりを聞いていた。そして、ぼそぼそと小さく言葉を紡ぐ。

「お前ら、そういう覚悟はいいけどな、ヤケだけは起こしてくれるなよ？」

「何だスライサー、珍しく大人しいじゃねえか。一人だけ常識人のフリか？」

「俺は元々常識人だよ。お前みたいに自分を兵器だって割り切ってもなきゃ、どっかのバカみたいに戦争が大好きってクチでもない」

「嘘つけ、大好きだろ？お前だってよ？」

けけけ、と、バカにするようにガベルが笑う。スライサーは口ごもって、それから今一度アークを見、その場で大きな溜め息をついた。

「.....俺は死にたいと思ったことは一度だってない。死ぬかも、とか、死んでもいいとも一遍だって思っていない。いつ死ぬかわからんから大事なものも持たないとか、そういう下らんことだって考えたりしない。国を背負ってもなきゃそいつに責任転嫁もしない.....確かに俺はおかしいかもしれん。マシンに乗るのは嫌じゃないし、何十人と今まで殺してきて、それでも平気に生きてる。けどそいつは自分のためにしてることだ。それも変なコンプレックスがあってやってるんでもなきゃ、国を守る、なんて大義名分のためにやってるわけでもない。それを、お前らは何だ？戦争に出る理由を自分のパーソナリティーだとかにわざわざ引っかけてみたり、格好つけて素直に思ったことも言えないしできない？バカじゃねえのか？」

「お前に言われたかねえよ」

「ふざけるな、アル。アークもだ」

がっ威嚇するように喉を鳴らし、スライサーはガベルとアークとを順番に見やった。アークは何も言わず、困ったように、ただ微笑んでいる。

「ここへ来たら全員条件は同じだ。王様だろうが孤児だろうが反戦主義者の子供だろうが一般市民出身だろうが、全員が一パイロットで一兵器だ。けどその前に人間だ。どうしてそう考えない？俺達は兵器じゃない、まして道具じゃない。静かに平凡に生きたいって、どうして願えない？」

「.....スライサー少尉は、健全ですね」

微妙な微笑みを浮かべたまま、アークが言葉を返した。話はどうやらまったく通じていないらしい。スライサーは嘆息し再びそこでうなだれる。アークはそのまま言葉を紡いだ。

「私にはそういう考え方はできない。ガベル少尉は.....私とは違う意味で、やっぱりスライサー

少尉のように考えられない。でしょう？」

「ま、そういうこった。諦めてくれや、スライサー」

ぽんぽん、と、ガベルがうなだれたスライサーの背中をたたく。そのままの格好で、

「.....わかったよ、けどアル、アーク、死にしまったら何にもなんねえんだぞ？生きてるからこそそういうくだらない妄想ができるんだ。それだけは忘れてくれるなよ？」

眉をひどくしかめたまま、スライサーは顔を上げた。アークははい、と答えて、

「でも、くだらない妄想、というのはひどいですよ。取り消してくれませんか？」

「やめとけアーク、三十過ぎのおっさんをそういじめるな」

「ってガベル、お前だって人のことは言えないだろう！俺を一人だけオヤジ扱いするな」

げらげらと、その場でガベルが笑い飛ばす。真横で、スライサーは疲れているにもかかわらず、その言葉にわめくように反論した。

ジム内にはさまざまなスポーツトレーニングを行なうことができる設備があった。いわゆるボディビルのための運動器具から競泳用のプールまで、その実にさまざまな設備は一瞬その場所が何のためにあるのかを忘れさせるほどだ。けれどその男はそれらの施設を彼に使わせることはしなかった。彼はその指示のまま施設内にあるリングに上がらされ、ヘッドギアとマウスピース、そしておそらくそのスポーツを本当に行うに足る威力を殺しすぎるグローブとをはめさせられた格好で、くたばっていた。

「ほら起きろ。こんなことぐらいでツブれてんな！」ごん頭をスポーツシューズで軽く足蹴にされ、フェーンは閉じていた目をうっすらと開けた。殴りやしねえから、触りに来い。ボクシングの格好をさせたその男、グランドは全身汗まみれになりながら大して息も乱さず、ぐったりと横たわってまったく動けなくなってしまったフェーンを見下ろし、相変わらずにやにやと笑っていた。

「こんなじゃ本体は愚かシミュレーターにだっていつ乗れるモンだか解りやしねえぞ？オイ」

「っ.....けど.....さわっ.....触りは、しましたよ？」はあはあと激しく胸を上下させて呼吸しながらも、フェーンは彼の言葉に反論する。鼻先をふん、と鳴らし、グランド、

「ありゃ、かすった、って言うんだよ。あんななぁパンピーの高校生にだってできる芸当だぞ？俺は、触れ、つつったんだ。ほれ、ぐだぐだ言ってねーで起きろ」

ごんごん頭は再び二度ほど足蹴にされる。体中から、エネルギーといえるようなものはほとんど抜けてしまっていた。燃えるように熱い体と、時折悲鳴を上げる喉の奥と、汗でびっしょりになった顔や髪が心底心地悪い。思いながらフェーンは体を起こそうと必死になった。しかし、力は体のどこにも入らず、ただにじにじとそこで揺れただけだった。にやにやと、笑っているのはグランドである。

「ぼーず、参ったか？参りました、って言うてみる。ん？そしたらおぶって帰ってやってもいいぞ？」

「.....結構です」

呼吸は相変わらず途切れがちだったが、フェーンはそれだけはきっぱりと言い放った。かわいく

ないガキだな、と小さく忌ま忌ましげにつぶやき、グランドはその場でため息をもらす。そして

、

「じゃあしょうがねーから、その根性だけは認めてやる。とにかく起きてみろ、ぼーず」

「……フェーン・ダグラム、ですっ」

一向にグランドは彼の名を呼ぼうとしなかった。覚えていないわけがない、あれ以来ずっと連呼しているのだから。思いながら、フェーンは全身の力を必死にその上体に集めようともがいた。名前どころもだが、これ以上バカにされるのはいくら新入隊員だからと言っても腹に据えかねる。何とか、認めさせなければ。ぷるぷると全身は震えて、上体だけがゆっくりと起き始める。おお、とスライサーは目を見開き、その様子を観察していた。震えながら起きた体は、しかし角度を三十度ほど付けたかと思うと、あえなくぼったりとその場に落ちた。ぐは、と、フェーンがためた息を思いきり吐き出す。傍らにグランドは座りこみ、そして今度は手で彼の頭をつついた。

「お前本当に軟弱だな。遊んでないで本当に起きろよ。後がつかえてるんだぞ？」

「はい……すみません」

返事だけは、それでもきちんと返された。返事だけかよ、と小さくグランドはつぶやくと、手に付けていたグローブを外し、

「もういい、大人しくしてろ。待ってたら歳くっちゃう」

言うなりフェーンの足をつかんでそのリングから彼を引きずり下ろした。引きずられた彼は抗う間も与えられず、そのままグランドに担がれて、その場所から運び出されていく。まるでくたびれた夜具のように。あーあー、と、運びながらもグランドがぼやく。

「どうして男なんかをわざわざこの俺様が運んだりしなきゃならんのだ。これが十六でもかわいい女の子だったら、お姫様抱っこもしてやろうというところを！」

「……グランド少尉」

ぐったり、のまま、フェーンにはそれに抗う余力はなかった。しかし、言い分はあるようである。

「何だ？お荷物野郎」

「貴方って……そういうことにしか頭使わないんですね」

その言い分に、グランドはひどく眉をしかめた。そして、

「運ばれてるバカに言えたことか？そんな科白が」

「僕は物じゃない……嫌なことを言われれば、気分も害します」

「そりゃそうだろうなあ。モノじゃないなら。けど人間でもお荷物って呼ばれるヤツはいるだろ？お前みたく」

今のお前はまさにそのお荷物だよ、と言いかけてグランドは何故かやめた。フェーンは担がれた格好のまま微かに顔を上げて、何ですか、と黙り込んだ彼に問いかける。

「……グランド少尉？」

「何だってお前みたいなのを、半年で追い出したりしたんだらうな……訓練校の奴らは。本当に使えるんなら、実戦仕様にまでしてから送り出してくれればいいのかによ？」

しばらくグランドはフェーンを担いだまま歩いた。運ばれながらフェーンは微かに苦笑する。やがてジム内の休憩ブースが見え初めるとグランドの歩調が微かに緩む。ふわりと体が浮いた次の瞬間、フェーンはビニル張りのソファに座っていた。いや、下ろされていた。目を瞬かせていると、目の前でグランドはうーむ、とうなって、また言った。

「奴らの考えることはイマイチわからんな。そんなに面倒くさいってのか？」

「……何がです？」

「天才様の教育、てヤツだよ。俺も早めに追い出されたクチだからな……っても、あの頃は今よりもっと忙しかったけどな」

何事かいまいちわからずフェーンは眉をしかめる。グランドは何かリアクションがあるのを待っていたが、ややもするとニヤリと笑って、言った。

「聞いて驚け、お前が入ってくるまでは俺様が最低年齢入隊記録保持者だったんだぞ？」

「……それで？」

しかし、フェーンの反応は余りにそっけないものだった。疲れすぎているのか、元々こういう性格なのか。おそらく後者だろうと判断して、グランドは溜め息をつく。

「つまんねえヤツだな、お前は。わぁびっくりー、とか言ってみろよ、子供らしく！」

「そんな、バカみたいなリアクションして、何かいいことでもあるんですか？」

グランドはそれ以上何も言わなかった。フェーンは、ばかばかしいと思っているのは半分で、半分はつかれきっていて、彼の言うことの意味を半分も理解している余裕がなかった。はあはあ、ひいひいと情けない呼吸はいまだに続き、体も、重くなったまま、まるで自由が利かない。

「ああ、どーせ俺あバカだよ、頭もお前の言うそーゆーことにしか使ってねーよ！けっ何でえ何でえ！人を色欲魔神かなんかみたいに言いやがって、どいつもこいつも！生きてるうちに人生エンジョイしたいってののどこが悪いっつーんだよ、え？」

フェーンは何も言い返さない。その様子を見て、観念でもしたかのようにグランドは大きく溜め息をつくと、そのとなりにどっかりと腰を下ろした。ぎしぎしとソファが揺れる。おさまってから、フェーンが言った。

「グランド少尉は……」

「ん？何だ？」

「……どうして、ここに？」

問われて、最初不機嫌だったその表情が驚きと、奇妙な訝りとに変わった。グランドはやや考えて、それから、

「どうしてって……まあいろいろ思うところがあつてな……十年前には。入っちゃったら後の祭りで、足抜けできないけどよ」

ごまかしでしかないその科白以上のことを、彼は話そうとはしなかった。

「……うぁー、ツカレタ。肩がイテー、あーくそ、なんで俺があんなガキの面倒をこうまでよく見ちゃうかねー」

結局フェーンはその日も、自力で自分に当てられた宿舎に辿り着くことはできなかった。最低一

人一部屋与えられるそこは、基地の外にある居住区に住まいを持たない全構成員の、正しく家と言える。食事は希望者全てに支給されるが、調理を行えるように部屋ごとにキッチンが設けられ、最低限の家具とバストイレは完備、ランドリーは1フロアに十機ずつが設置されており、文字通り住環境の全てを機関が提供していた。希望者には日用品も給与とは別途に配給されることがある。ただその際には申請書を書き、品物違い以外の交換はできないことになっていたため、このシステムを利用しているのはそこで暮らす中でもごく希ではあったが。その宿舎の四階の一室にぐったり疲れて身動きのろくに取れないフェーンを運び終えて、肩をほぐしながらグランドは一人自分の部屋に向かって歩いていた。二つ上のフロアのやや広めのワンルームタイプで、いわく「自由気ままな独身生活」を送っているらしいが、そんなにいいものではないことは本人にもよくわかっていた。

「おう、グランド。こんなところで何してるんだ？」

日はすっかり暮れて、宿舎の廊下には自動的にライトが点り始めていた。声に釣られて顔を上げると、そこにいたのはスライサーだった。けっ、と吐き捨てて、グランドは後方へと視線を投げる。

「お子様ポンチの送迎だ。まったく、手のかかるガキだぜ」

「何だお前……また何かやったのか？」

あきれ口調でスライサーが問いかける。グランドはため息を一つつくと、

「何かも何も……何ちゃってスパーリングさせたらバテて歩けないってんだぜ？貧弱だよなー」

「……またそーゆー、いじめみたいなことを……」

それ以外言葉もなく、スライサーは彼と同じくその背中の向日へと視線を投げた。グランドはやや膨れて、

「いじめってのは人間き悪ィな。俺はあいつのためを思って鍛えてやったんだ。見てて腹が立つとかお前らジジイどもに当たられてストレスでとか、そーじゃないぞ？」

「そんな風に思ってたのかお前は」

言って、スライサーがその頭を軽くこづく。いて、と声を漏らして、グランドは踵を返して歩き出したスライサーの後に、何となく続いて歩いた。

「一週間後……じゃないな。六日後、エプスタイン主任が戻ってくるそうだ。半年ぶりに」

そして突然紡がれたその言葉に、グランドは目を丸くさせて驚いた。

「へー、カリナが？なんでまた？」

「休暇だそうだ。機体の修正も終わって後は組み上げて運ぶだけだから一足先に戻るのだと。

新型……『テスターM』のシミュレーションソフト持って」

スライサーは言い、言ってから足を止めて、無言のままに振り向く。

「………何？」

目が合って、問い返したのはグランドだった。疲れたようにふう、と息をもらしスライサーは言った。

「配備が近い。お前にも話は行ってるだろ？」

「ああ……新型部隊の。それが？」

グランドの言葉の後、再びスライサーは歩き出す。首を傾げ、二、三步遅れてグランドはそれに続く。

「おい、ガトル？」

「今のところ候補者は十五名、最終的には六名だが、俺とガベルとお前を入りたいそうだ、レイシャ少佐が」

かっかっ……足音がしばし続く。黙したまま、グランドはその背中を見て歩いていた。そしてやや間をおいて、一言、

「何だ、レイシャ大隊長殿、俺達にラステル制圧しろってか？」

「そういう意図かも知れないな」

怒った口調でスライサーは答えた。足を止めて振り返り、彼は続けてこう言った。

「上は派手にパフォーマンスしたいらしい。アイドルを使って」

「……アイドル？」

言葉に、グランドは目を丸くさせるばかりだった。

ガベルがその男に呼び止められたのは、ハンガーで何気にその様子を眺めていたその時だった。待機してはいるが扱いはD休暇で、これと言って特にすることもなく、部屋に戻って眠るにはやや早すぎるし、と要するにヒマをつぶしていたその時だった。五十手前の、頭に微かに白っぽいものが混じったブロンドの男は、そのとなりに立つと彼と同じく、そこに居並び、あるものは整備され、またあるものは移動しているそれらの機体を眺めて、言った。

「昨日の話だが、考えてくれるつもりは？」

ジョルジオ・レイシャとアストル・ガベルの付き合いは長い。ガベルが入隊した頃、現在大隊を束ねるその男は、中隊とも小隊ともつかない半端な部隊を率いていた。戦況は芳しくなく、生まれて初めての戦闘を何とか生き延びられただけでも良かったと、ガベルは内心今でも思っている。訓練校での研修期間が半年間と定められたのはちょうど彼らの時代のことだ。それ以前はとにかく内容をクリアするまでは、といつまでもとどめおかれた訓練生も少なくはなかったのだが、時勢が時勢だったが為に彼らは一通りの訓練を受けただけで前線へと赴かなければならなかった。その名残で、現在ももちろんその内容をクリアできなければ入隊することはできないことになってはいるが、最短では半年で正規の機関構成員となることが可能になっていた。たった半年間軍人の何たるかをちらっと学んだ自信過剰な一兵卒、入隊当時のガベルはそんなパイロットだった。以来十年、何事かをクリアしながら、運良く二人そろって生きている。ついでにレイシャは大尉から少佐に昇進して、現在大隊長を勤めるまでになっていた。

「何です？珍しく食い下がりますね。俺は一度断った話を考え直せるほど、人間できちゃいませんよ？」

「だろうね」

くつくつと、レイシャが笑う。ガベルはちらりと横目でそれを見て、わずかにその眉をしかめた。レイシャは笑いをおさめると、再び言葉を紡いだ。

「今日はこれから、何か予定は？」

「別に何も。部屋に戻って休むだけです。明日から当分ヒマなんで、シミュレーターでヒマでもつぶしてますよ」

「うちの奥さんが、君が帰ったと話したら、つれて来いと言うんだが」

言葉に、ガベルはそちらへと向き直る。くつつつとやけに楽しそうに笑いながら、レイシャもガベルの顔を見て、また言葉を紡いだ。

「時間は空いているのかな？ガベル少尉」

「.....そーゆー話だったら、否応なしにつきあいますが」

ふっと、ガベルの顔が緩む。レイシャの妻、サリア・A・レイシャともガベルは古いつき合いだ。目の前の男はよく部下を食事に招き、妻君はその裏で糸を引いていた、というのが真相と言えはそうだった。行こうか、と言ってレイシャが踵を返して歩き出す。ガベルははい、と返答して、その後が続いて歩いた。日が落ちると、基地内はそれ以前よりも静まり返る。警備は厳しくなるが主だった活動は日中にすべて行われているため、宿直役以外の構成員は自宅に戻って休息するのが常であるし、今の所昼夜を問わずに彼らが労働し続ける、というような状況でもなかった。平和、というには物騒ではあるが、静か、というには差し障りがない程度に。

「ところで、六日後にエプスタイン主任が戻るそうだが」

「.....またその話ですか？」

ややうんざりしながらガベルが言葉を返す。レイシャは笑いながら、

「いい機会だろう？二人そろってヒマならこれからのことを話し合うといい」

「大隊長殿、自分はエプスタイン整備主任伍長とはそういった話し合いをしなければならない関係では.....」

「何を行っている。三カ月、向こうでもずっといっしょだったんじゃないのか？」

やけに楽しげに五十手前の男が笑っている。ガベルは眉をしかめて、大きなため息を吐き出すと

「.....勘弁してくださいよ、大隊長。宿舎の食堂でもカリナカリナ、現場出てもカリナカリナ、スライサーにもランドにも、カリナカリナカリナカリナ。俺があいつの何だってんです？」

うんざりした口調で紡がれる言葉にも、ただただレイシャは笑っている。そして、

「何故結婚しない？愛し合ってるんじゃないのか？」

「.....いけしゃあしゃあとそういう科白がよく吐けるモンですね」

「答えろ、少尉。基地中のマシン関与者がみんな気にしていることだぞ？」

からかわれて、ガベルはむっつりと唇を結んで眉をしかめた。三十に手が届くと言うのに昔から全く変わらない部下の姿を見て、またレイシャは笑う。観念したのか、参ったなあとつぶやいて、ガベルは苦笑混じりに言った。

「しつこいのはあいつだけで、俺にはそういう気はないんです。あいにくと」

「つれない男だね。それとも今は女性に興味を持っているヒマがない、とでも？」

奇妙な物言いに、笑っていたはずのガベルの表情がくもる。レイシャは笑いながら、

「昨日の少年.....ダグラム少尉、と言ったか。どう見る？」

「どうもこうも.....まだ本当に素人に毛が生えた程度でしょう、あいつは。新型に乗せるにはま

だ頼りなさ過ぎる」

「とある筋からの提案としては、彼を上手く使って国民に好印象を与えてくれ、とされている。使えないでは困るんだが」

「とある筋、ねえ……」

その言葉だけを繰り返すように言い、ガベルは笑うのをやめて眉をしかめた。並んで歩きながら、二人はその会話を続けた。

「レクスライ少尉を大尉にまで昇格させて副長、彼も同階級で隊長、と言うのもありえなくはない、可能性としては」

「現場を知らないヤツらは気楽なことだ」

「そうでもないさ。スティラ、ソレアはともかく、ヌウイやリウヌは資金の出し渋りどころか、いまだに協議会の指示を無視して動くこともある。四国連合、とは聞こえも良ければ体面もいいが、実のところは鵜合の衆で協力して一つのことをやり遂げることすら未だにできていない。新型一つ造り出すにしても、二国の承認が下りるのは機体ができるから、というのが実情だ。まず六機、はいいが、ここでそれなりのパフォーマンスをしなければ次がどうなるか危うい。予算的にも」

「ピンボーもいいところですからね、ウチは」

言って、ガベルは苦笑する。実際問題、ラステルは裕福な国家ではなかった。戦争にかかる費用はそれでも莫大であり、削るという行為は国家の自殺行為に等しい。今のところ何とかラステルと特務機関が成り立っているのは十五年前に割譲したヌウイと言う土地があるためであり、また、隣国カシュールに対する二大河川の利水権のためであった。大陸の西側を主に潤すのはこの二本の大河川であり、もちろんその利水権を巡っての戦争が西側と今までに何度も起こっていた。今現在は落ち着いてはいるものの、またいつ起こるか知れない戦争の危機を孕みながら、とりあえずラステルは東側の国家と現在交戦中である。

「中にはこんな意見もあるそうだ。新型機と『トリオG』を売れば、一国の軍隊をたやすく養えるだけの莫大な資金が得られるだろう、と」

「そいつあすげーや、で、直後その『トリオG』にラステルは滅ぼされるってワケですか」

大声でガベルは笑い飛ばす。苦笑を漏らしたのはレイシャだった。実に、性の悪いジョークだ。そして、それでも現実に考えられない話でもない。あくまで噂としてだが、兵器の機密が隣国に高値で売られているとの情報もある。ラステルのマシン・メイス技術は大陸一を誇っている。もちろん実際前線で戦闘を行えばそこからデータが漏れることもある。そしてその漏れたデータが外国へ高値で売られているのもまた事実だ。ありえない話ではなかった。

「売り飛ばされたいか？ガベル」

「……そいつあ勘弁してほしいですね、流石に。別にラステル自体に恩義があるとは思ってやしないが」

言葉を紡ぎながらガベルはその眉をしかめる。レイシャは笑いながら、その場所で足を止めると不意にため息を吐いて、言った。

「この国を守れ、とは言いたくはない、私も。君達にはそれぞれ思惑もあるだろう。何故軍隊

に入ったのか、特務機関に入ったのか、なんて聞いたところで、結局何がどうなるわけでもない。けれど組織を運営して存続させるためには、いろいろと矛盾したことも言わざるを得ない。わかるな？ガベル少尉」

「俺たちを生かすために苦労してるんだ、とでも？」

「それもあるな」

真顔で挑むように言ったガベルの言葉をさらりとレイシャは交わした。思わずガベルは苦笑を漏らし、「そういう性分だからあんたは生き延びられたんだ。この先も、そいつを貫いてもらいたいモンだな、隊長殿には」

「レクスライ少尉とダグラム少尉の特進に、何か思うところはないのか？ガベル少尉」

「別に。俺はどこまで行っても俺です、変わりようがない。下っ端ってのは案外楽なモンですよ？些細なミスくらいじゃクビにもならない、重要な役目も貰わない、責任は負わされない、身軽で、実に動きやすい」

「だが、この荒れ地を一面の耕作地にはできない。下っ端では」

言葉を放ち、ニヤリと笑ったのはレイシャだった。不意を突かれた格好になって、ガベルはその場で言葉を失う。

「この戦争に勝たない限り、ここで農耕作業なんてできはしないよ。違うか？」

「……ごもつともなことで」

短くガベルはそう言い返し、レイシャから目を反らして奇妙な笑みをその顔に浮かべた。その大地は疲弊している。長い間さまざまの形で行われた戦争によって、土は踏み固められ、木々は焼き払われ、その後残ったのは背の低い水分をたくさん必要としない乾いた草だけだった。いつかここに緑があふれるといい。そう言ったのは果たして誰だったか。そんなふうに思いを巡らせて、ガベルはひどく眉をしかめた。今ここでは、地上に広がる荒野では、ただひたすら殺し合いだけが繰り返されている。国と国とがその大義名分で多くの人間を、ただひたすら消費し続けている。倫理も何もあったものではない。

「けど大隊長殿、たった六人で騒いだくらいじゃ戦争は終わりやしませんよ？ついでに、そいつらを俺が率いて歩く理由も、どこにもない」

「何だ、若い命を無駄に捨てさせる気か？ガベル」

「そう聞こえたんなら、それでもかまわないが」

夕闇の中を、風が吹き抜ける。乾いたその風が遠くで、ごう、と、その音を響かせている。ガベルは眉をしかめたまま、ややもすると苦しげな顔で言葉を紡いだ。

「あんたは、もっと上へ行ってくれ。別に俺はどこで何してようとかまやしない。生きて戻りたきゃ戻る努力はするし、死ぬと思ったらきっと死ぬんだろう。ここが平和になろうと、緑になろうと、それが生きてる間だろうが死んでからだろうが、どうだっていいことだ。ただあんたは後続のために、もっと動いてやってくれ。どうせこの国は滅びるんだ。それまで高いところから、滅ぼす奴らを見ていてくれ」

「無責任なことを言う。これでも私は人道家だぞ？」

言葉に、レイシャは苦い笑みを漏らす。そして、

「私はそういう考え方はしないつもりだよ。もっとも、より良く戦果が上げられるように、組織の改善を行うためにも、私はもっと上へ行くつもりだが」

その男は、きっと自分よりも弱いのだろう。レイシャはガベルを目の前にして思った。二十歳で当時組織崩壊の応急処置をするためだけに入隊させられた戦争代行者は、今では右に出るものがないとまで言われるパイロットに成長していた。まだ少年とも呼べそうな頃には、いつかこの広大な平原の全てを、黄金に光る麦畑にしたいと願っていたのに。けれどそれも仕方がないことなのかも知れない。少年は大人になる途中で夢を捨てて、その命も、生きながら半ば放棄している節がある。いつ死んでもかまわない、死は恐くはない。だから夢も見なければ、結婚もしない。彼はいつも平気そうそぶく。そんなに困窮しているなら、こんな戦争はさっさと放棄して、顔首揃えて全員極刑にでも処されちまえばいい、と。まだ事の道理もわからない、わかりたくない少年のようにふてくされて、ガベルは遠く荒野の向こうをにらみつけていた。横顔を眺めて、レイシャはただ、苦笑するばかりだ。

「機嫌を損ねたかな？」

「別に。俺も大人の男です。たまにやそういう話にだって、つきあいますよ？」

苦い横顔が僅かに緩む。ガベルは苦笑を漏らすとレイシャに向き直った。見て、レイシャも微かに笑みをこぼす。そして、

「何だかカリナの気持ちか、わかる気もするよ」

「……何です、そりゃあ？」

その言葉にガベルは眉をしかめた。軽く彼の肩をたたいて、レイシャは、

「しかし冗談じゃなく、本当にどうするつもりなんだ？この先」

「だから本当にあの女とは何にもありませんって！わっかんね一人だなあんたも！」

が一っ、と、威嚇するように喉を鳴らしてガベルがその強い意志を示そうとする。軽く笑いながら、レイシャはちらりと、陽の沈んだ荒野を見やる。もしここが広大な耕作地で、彼が従事しているのが農作業だったなら。一瞬浮かんだ考えをレイシャは否定した。それはありえない夢で、思うことすら彼を傷つける行為だ。軽くかぶりを振って、再び彼は歩き始める。

「所詮は……夢想か？」

わずかにガベルは先を歩き始め、聞き取れなかった言葉を気にして振り返る。何でもない、と、レイシャは笑ってそれに答えた。

夜もまだ明け切らぬ早朝が、基地がもっとも静まり返っている時間だった。後二時間ほどもすれば宿直の警備兵も交代し、更に二時間後には自宅もしくは宿舎で休んでいた構成員達が、それぞれの持ち場へと出勤してくる。一年を通して夜明け直前は一番冷え込む時間であり、地上に出るからは本当にそれが顕著なのだと改めて彼はそんなことを感じていた。湿気が少ないため、ここでは昼夜の温度差も激しい。制服が一年を通して長袖というのはどうかなどと初めは思っていたのだが、ここへ来てそれは納得できる事実でもあった。コートもそうだ。岩砂漠に放り出されて夜を迎えたら詰襟の上着ではもたない。おろしたてのラベンダー色のアーミーコートに包まって口元を吐息で曇らせ、フェーンはその時ハンガーでマシンを見上げていた。ここへ来て一週間、初日に乗せられたシミュレーターでの模擬戦以来、彼はまだ一度たりともそのシートに座ってはいなかった。半年で訓練をすべてクリアした秀才、という鳴物めいた評判も今ではどこへやら、だ。どこからどういう沙汰でかは知らないが、当分はその機体は愚か、模したものに触れることさえ許されないらしい。

「……スーパーエリート、かぁ」

ややもするとあどけない顔でフェーンはつぶやく。十六歳、と言えればつい最近義務教育が終わったばかりの、まわりから見ればほんの子供に過ぎない。その年齢で特務機関への入隊を希望する人間は少なく、ここ数年の平均入隊年齢は20.7歳、大学卒業後の入隊希望者がが増えているらしい。訓練校でも、フェーンはやや目立っていた。テストの受験資格は義務教育終了者、だからおかしくはなかったにしても。確かに、とんでもないところに来たみたいだ。思いながら見上げる機体は、その装甲を剥かれて、まるで人体標本のように上から吊るされていた。人間で言う筋の働きをする稼動部が剥き出しの巨人は、どうかすると放置されたままの、作りかけの操り人形のようにも見えた。つま先で立って、その場で大きく伸びをする。その大きさに叶うわけではないが、改めてフェーンはそれと自分とを比べてみた。訓練校のシミュレーターは、ただ単に操作手順を追うために作られたものであって、高速移動中に感じられる重力も、攻撃を受けた際の衝撃も搭乗者には伝えては来ない。もちろん、シミュレーターと呼ばれるあの機体も、実際のものと比べたならかわいいレベルなのだろう。激しくシートが揺れても、そのモニタに「第一装甲破壊」と表示かなされても、自分は生きているのだから。手を伸ばし、伸ばし、伸ばし、これ以上大きくなれないな、というところでフェーンは背伸びをするのをやめて、踵を地につけた。かつん、と、新品同様のブーツの踵が音を立てて、静まり返ったハンガー内に響き渡る。別に、これに乗りたいたいと思ったわけじゃない。強くて大きなものが特別好きだと言うわけでもない。確かに強いものには憧れる。けれど本当の強さとは、一体なんなのだろう。こんなものに頼ってまで守らなければならないものなんて、この世にあるのだろうか。

「あら、珍しい……随分早い人がいるのね」

声は広いハンガー内でほわんと響いて、フェーンはその大きさにやや驚いて振り返った。薄暗い、歩くのがやっとの明るさの常夜灯だけが点ったその中を、陰がこちらに向かってくるのが見える。

「それはあなたの担当？何をしているの？」

やがて陰ははっきりとその姿を現す。背の高い、長い巻毛の女性を視界にはっきり捕える頃、あちらも彼を認識したらしい。少しあわてたような声で、

「あ、あら、ごめんなさい……てっきり知っている人かと思って……」

そう言ってその長い髪をかき上げた。白の詰襟に、同色のタイトスカート。女性であってもパイロットはその手のスカートを滅多に履かない。その下にはやはり白いパンプス、通信士か、もしくは管理担当のスティラからの出向者か。思いながらフェーンはその襟元へ目をやった。バッジは逆三角、幅広の黄色のラインが一本。整備担当者の襟章だ。背中に届く長い巻毛の女性は彼の隣まで歩み寄り、並ぶとその機体を見上げた。そして、小さく息をつく。

「ドゥーローにこもっていた間に、ずいぶんたくさん壊されたみたいね……あらやだ、これ、踵のワイヤーが伸びてる……どういう稼働させたのかしら」

形の良い眉がしかめられる様子を、黙ってフェーンは観察していた。三十手前くらい、だろうか。化粧気はないがやや派手な作りの顔の女はため息とともに視線を下へと下ろした。そして改めてフェーンを見て、笑いかけながら言った。

「初めまして、でいいのよね？しばらくいなかったものだから、もしかしたら半年前に会っているかも知れないけれど」

「いえ……初めてです。一週間前に入隊したばかりですから」

「あら……そうなの？」

疑問符のついた言葉と同時に、ためらいのない手がフェーンへと伸びる。反射的に捕まえてからフェーンは言った。

「フェーン・ダグラム……パイロットです」

「カリナ・エプスタイン整備主任です、よろしく、少尉」

言葉の後、彼女はそう言って手を納め、一応の敬礼をしてみせる。あわててフェーンが同じように手を上げようとする、くすくすと彼女は笑って、下士官にはそんなことする必要ないわよ、と言ってまたマシンを見上げた。

「少尉も……こういうのがお好き？」

「……フェーン、でいいです。まだ、入ったばかりで何もできませんから」

ここ数日で思い知らされたその事実をフェーンは自分で口にする。スーパーエリート of 呼称は、確かに伊達ではない。けれどまだ自分はそんな立派なものでもない。まわりが言うように、訓練校の教官に嫌われて、さっさと追い出されたようなものだ。言葉の後で微かに苦笑して、フェーンもマシンを見上げる。その様子に気づいて、彼女はちらりと彼を見ると、言った。

「じゃ、私もカリナ、でいいわ。親しみを込めて、お姉さんだと思って呼んでちょうだい。ところで、マシンは好き？」

改めて問いかけられると、フェーンはそこで困ったように笑った。小首を傾げて、カリナは息を吐き出す。

「好き、じゃないみたいね。なら一体何をしていたの？」

「さあ……自分でもよくわかりません。目が覚めたから、ジョギングがてら走って来て、そ

れで……」

何となくここに来て、一休みついでに見ていこうと思ったのだ。フェーンはそれを言葉にはしなかった。カリナは小首を傾げ、それからマシンに向けるように大きく息を吐き出した。そして、

「知ってる？このコは『ネイヴ』。マシンがこの大きさになって初めてまともに戦闘ができるようになった機体『ミネルヴァ』を改装して作られたものよ」

「これが、ネイヴ？装甲もないのにどうして……」

「そりゃあ、プロですもの。この子にはまだ作業用ロボットの名残も残ってるし。安定はいいけれど動きが遅い、とか、骨格が重すぎ、とか」

驚くフェーンを置き去りにカリナは笑う。そういうものかな、と思いながらフェーンはその機体を見上げた。そういえば訓練校には、一般市民が知りえないマシンの情報に何故か詳しい訓練生もいたが、あれは一体どこから手に入れるものなのだろうか。その名称や稼働数は一応訓練校でもレクチャーされるが、その情報のほとんどが機関外に漏らされることはごく希なのに。いわゆるマニアというヤツは底が知れない。そこにあるものは兵器であって、持っていて楽しいものではないはずなのに。

「それにほら、あそこ」

思いを巡らせるフェーンに、カリナはかまわず機体の間接の一部分を指で指し示した。目を凝らしてフェーンが見やると、彼女はこころと笑いながら言った。

「……何です？あれ」

「機体のナンバーとハンガーアウトの年代。早い番号が打たれてるでしょ？この機体が出回った頃には他の機種がなかったのよ。だからわかるの」

その言葉に、そういうものなのか、と感心しながらフェーンは彼女へと向き直った。カリナはマシンを見上げたまま、二、三步ほど後ろに下がり、

「あとでこのコの担当者に会わなくちゃ。ここまでばらして何してるのかも聞かなきゃいけないでしょうし」

言って、くるりと踵を返す。そのままカリナは彼に背を向け、

「じゃ、またね、フェーン君。早く立派なパイロットになるのよ？そしたらお姉様が飛び切りのマシンを調整してあげるから」

そう言い残して歩き去っていく。見送って、その姿が見えなくなってから、フェーンは改めてそこにある、裸の機体を見上げた。ネイヴ、十数年前に戦闘に投入された土木作業用ロボットの改装して作られたマシンとそれ以後の戦闘専用のロボットとの間で線引きをする事になった機体、ミネルヴァを改装して作られたそのマシンは、現在中型マシン・メイスと言う分類をされ、主に前線部隊によって使用されているものだ。ボディカラーは宝石のペリドットを思わせる薄い黄緑色。ミネルヴァの後継機、サヴァよりも少々重く、しかしその重さを生かして重火器の装備を可能にした初めての機体でもある。欠点はその重さだが、それでもどうして稼働速度は速く、何より頑丈な作りで、この先も数回の改装を繰り返されて使われるであろう『名機』である。そして、

「……ネイヴの、コンセプトデザイナー、って……」

フェーンはあることを思い出し、その場で絶句した。原形となったマシン、ミネルヴァはその後マシン・メイスの雛形と呼ばれるようになったが、それはネイヴの完成後のことで、それをひねり出した人物は現在も現役で、整備担当でありながら現在も新型開発などを手がける、女性整備伍長である、確かそんなことをどこかで聞いた気がする。そして、

「エプスタイン……整備主任伍長？」

思い出すと同時に、フェーンは静かなハンガー内では耳が痛くなりそうなほど響く声で言い放ち、その音の大きさとその名前に一人、驚かざるを得ないのだった。

ガトル・スライサーはやや広めの部屋でその時、髭を剃っていた。つい先日までは周囲の指摘がありながら面倒だと取り合わなかったのだが今朝になって何故だかそういう気分になって、というのは言い訳がましいだろうか。彼は一人考えるというほどでもなくそんなことに思いを巡らせながら、髭を剃っていた。ただ単に普段より早く目が覚めて、時間があるから剃ろうかと思っただけなのだが。電器かみそりは心地よくモーター音を鳴らして、実はあまり濃い目ではない彼の髭をさくさくと剃っていく。生えている方が自分の顔らしい気もするが、一部からは「お前の不精髭はジョークにならない」とか言う批評も出ていて、これがなかなかどうして管理の難しいシロモノだった。ごく一部からは「触ると痛い」という意見もあったが、その極々一部だけは無視することにしている。他人が触る必要があるものではないし、その言い草が気に入らないからだ。ウィィ……電源をカットするとそんな音を立てて電器かみそりのモーターが止まる。後片付けをしようかと思ったその時、どンドン、と、部屋の扉が外からたたかれてそんな音を立てた。一応呼び鈴は着いているのだが本人がいないこともあって滅多には使われぬ。誰だ、こんな朝早くから。朝食のお誘いか。そんなことを思いながら彼は玄関へと急ぐ。ごんごん、と鋼鉄製のドアはその後も再三、殴られている様子だった。

「ちょっと待て、今出る……」

「おい早くしろ！急げ！」

ごんごん、という音に紛れて、焦った男の低い声はした。何事か、と思いながらも彼が扉を中から開けると、飛び込んできたのは、

「……ガベル？何だどうした？こんな朝っぱらから」

「ちょっと匿え！奥のクロゼット借りるぞ！」

「……は？」

怒濤のごとく、男は駆け込んでそのまま奥の奥へと去っていく。見送って、何気にグラントは彼に問いかけた。

「……何やってんだ？ガベル」

「俺はここにはいない！今朝はまだ見てない！いいな？」

血相変えてそのまま、ガベルは勝手知ったる他人の部屋のクロゼットに駆け込む。何だろうと思いながら無言で見送ると、今度はピンポン、と呼び鈴の電子音が室内に響いた。

「ガティ、いる？今ここにアルが来なかった？」

インターホンから叫ぶような女の声が響く。久々に聞くその声に、ああ、そういうことか、と一人ガトル・スライサーは朝の来客の行動の理由に納得していた、ごくごく希に彼を「ガティ」と呼ぶ人間がいるが、彼女はその中の一人であり、そしてガベルを唯一「アル」と呼ぶ人間でもあった。

カリナ・エプスタイン整備主任伍長をシル・ソレアの総本部基地で知らない、という人間はまずいない。根っからのエンジニアであり整備士としての腕が確かなこともさることながら、その威勢の良さも女性構成員の中では群を抜いていた。適性さえあれば今頃はエースパイロットとしての名をほしいままにしていだだろとも言われている。その才能はマシンの整備だけではなく、新型機の開発という方面にも花開き、今では殆どそちらの仕事に従事している。新型機「テストターM」の設計にも一言二言提言したとかしないとか。

「……テストターM？何です？それ」

「っと……しゃべりすぎたか」

相変わらずフェーンはと言うと体力造りばかりの毎日であった。たまたまジムで顔を会わせたスライサーに早朝のことを話すと、彼は快くその女性整備士について教えてくれたついでに、そう言って口元を押さえたのだった。

「何か……大事な機密ですか？」

「……今のところは。そのうちお前にもきちんと知らされるだろうから、詳しい話はその時間いてくれ」フェーンはクビを傾げて、やや拳動の怪しいスライサーを眺めている。あはは、とごまかすように笑って、今度はそのスライサーが逆に彼に問いかけた。

『そんなことよりおまえ、そんな朝早くにハンガーに、一体何しに行ったんだ？』

「何って……走っていて、たまたま通っただけです」そして、今度はフェーンがやや怪しい口調で答えて、口ごもる。スライサーはわずかにニヤリと口元を歪めると、

「何だ、乗りたいのか？マシンに」

「そういうわけじゃ、ありません」

すう、とフェーンの視線が彼からそらされていく。見送って、スライサーはおや、と首を傾げた。ここへ鳴物入りで入隊した少年は、最初に予測したように子供にしては扱いにくいことこの上ない性格はしていた。そういう輩は決まって一秒でも早くマシンに乗りたがるものだ。そして大概自分の「才能」とかいうものに溺れていて、そういうのを揶揄って遊びたい誰かにこてんぱんにやられてしまうのがオチだった。乗りたいのかと問われれば当然、応と答えるだろうと予測していたスライサーは目を丸くさせ、

「何だ……乗りたくないのか？早く」

「今の僕じゃ、移動途中で酔って吐くのがオチです、そこまで浅はかじゃないですよ」苦笑混じりにフェーンは言葉を返した。そして、逆に今度はスライサーに問い返す。

「スライサー少尉は最初どうだったんですか？本物に乗った時」

「ああ、俺か？俺は一……」

言いかけて、スライサーは眉をしかめた。それを見てフェーンは笑っている。

「どうかしましたか？少尉」

「いや……あんまり思い出したい事でもなくてな、本当に無様だったから、何しろ」

言いながらスライサーは短く刈った髪をばりばりときつく搔いた。当時は今のようによくできたシミュレーターもなく、電子ゲームに毛の生えたようなシミュレーターでとりあえず訓練を済ませて即出撃、というのが当たり前だった。そのため初めてその機体に乗った進入隊員は予想を超える激しい揺れと衝撃にたいい初戦は命からがら逃げ出して来られればラッキー、というひどい状態だったのだ。その最中での記憶が、思い出して気分のいいもののはずもない。

「何しろ、何ですか？」

そのまま黙り込んだスライサーにフェーンは問いかける。溜め息をつき、

「この話はとりあえず保留にしといてくれ。できたら無用の恥は搔きたくないからな。生き恥は散々さらしてきたつもりだが」

スライサーはそう言って苦笑いを浮かべている。フェーンは笑うのをやめて、そんな彼を観察でもするようにじっと見ていた。

「そんなことよりお前、ちょっとは体力着いてきてるのか？この間から何回かグラウンドに担がれて帰ってるんだろ？」

話題は突然切り換わる。これで相手も黙るだろう、と予測したスライサーの顔は笑っていた。が

、

「ああ、そんなこともありましたね。でももう平気です、慣れましたから」

さらりと言ってフェーンは彼の真横を通り過ぎ、そこから歩き去ろうとする。確かに冷めていて、可愛げのない子供だ。擦れ違い様振り返って、スライサーは苦笑を漏らした。

「そうだ、フェーン」

背中が遠のくのを見ながらスライサーは声を投げかける。足を止め、振り返り、フェーンはちらりと彼を見た。

「何ですか？」

「理由もナシに人気のないハンガーなんかに立ち寄らない方がいいぞ？」

言葉に、フェーンは眉をしかめる。スライサーはそれを見て、またニヤリと笑った。

「いろいろと疑われたりすると後がやっかいだ。見ちゃならんものを見ることも、たまーにあるしな」

「見ちゃいけないもの？」

「例えば大人の恋人同士のランデヴーとか、な？」

横から、それまでに聞こえなかった声がかぶるように耳に届く。スライサーとフェーンはそろってそちらに目を向け、そしてそろってその眉をしかめた。

「グラウンド少尉」

「いつからそこにいた？」

「オイオイ、二人してそんなにやな顔するなよ？おもしろい話仕入れて来てやったつてのによー？」

「お前のおもしろい話がろくでもなくなかった試しがどこにある？」

「ってそりゃちょっと言いすぎだぞ？スライサー」

いたずら坊主のようににやにやと笑っているグランドに、きつくスライサーは言い返す。フェーンは無視して、再びそこから歩き出そうとする。

「おいフェーン、どこ行くんだよ？」

「指示通りにジムで基礎体力を養うんです。それが何か？」

振り返ってフェーンが問い返す。グランドはその眉をわざとらしくしかめて、

「んな下らね一事より、おもしろいネタ聞いて、わぁびっくり、とかしねーか？」

「下らない話にだったら、つきあう義理はないですよ？」

「そうとんがるなって！な？」

どうやら完璧にこいつは嫌われているらしい。ややもするとこびを売っているかのようなグランドを見ながら胸の内だけでスライサーは呟いた。フェーンは相変わらず、にらむような目でグランドを見ている。

「グランド少尉、前から言いたかったんですが」

「ん？何だ？」

「どうしてあなたと言う人はそこまで品性下劣で下品で下世話なんですか？」

何事を言ってくれるのかと一瞬期待したグランドの顔が直後凍りついた。側で聞いていたスライサーはその言い様に驚き、それから、その場で声を立ててげらげらと笑い出す。そして、

「おいガトル、そんなに笑うな！フェーンお前も、そーゆー口聞いてるところじゃ長生きできねーぞ、ああ？」

怒りを露にしてさしものグランドも怒鳴り散らす。腹を抱えて爆笑しながら、スライサーはその言葉に言い返した。

「わめくなシロ。フェーンの言う通りだ。本当にその通りの品性下劣顔だけ性悪バカ男だよ、お前は！」

「あ、ひでー！そこまで言うか？普通。俺はこれでもお前の二年先輩なんだぞ！もうちょっと立てるって事も考えたらどうだ！」

更にグランドはわめき散らすのが、その原因を作ったフェーンはと言うとそれをまったく無視してそこから歩き出す。グランドは気付いて振り返り、

「あっ、おい待て！このクソぼーず！」

「やめとけ、お前の手に終える相手じゃねえよ、ヤツも」

追いかけて捕まえようとする彼を、笑いながらスライサーが止めた。むっとした顔でグランドはそちらに振り返り、

「何だと？じゃあ俺はあのお子様ポンチ以下だって言うのかよ、え？」

「俺やアークだって、煙にまかれっぱなしなんだからよ」

最後に、その笑みは苦笑に転じた。その一言にグランドは目を丸くさせ、

「お前とアークが？なんで？何かやらかしたのか？あいつ」

「まあ、ちよろつとな……例えば志望動機とか」

言葉にグランドは首を傾げるばかりである。立ち去る背中を見送りながら、独言のようにスラ

イサーは呟く。

「あいつにとっちゃ禁句なのか……それとも、深い事情ってのがあるのかもな、あの歳で社会人になろう、ってのは」

言葉の後、ため息は吐き出される。目をきょとんとさせたまま、グランドはなれなれしくスライサーの肩の上にその腕とあごを乗せて言った。

「上のガッコに行ってもツマンネー、とか思ったんじゃないの？あいつ頭いいし」

「それだけの理由でヌウイ出身者がここを目指すとは思えんがな」

「ヌウイ？あいつヌウイ生まれなのか……へえ、そいつはまた……」

その事柄に妙に納得したようにグランドがその国名を繰り返す。軽く声を立てて笑うと、改めてスライサーは彼に問いを投げかけた。

「で？お前のほうのおもしろいネタってな、何だ？」ああ、と我に返ったようにグランドは言った。そして、

「結構あいつにもイイシラセだったんだけどなー……逃げられちゃーなー」

そう言ってから息をつき、フェーンが立ち去った後の空間を眺めながら答えた。

「シミュレーター訓練の許可が下りたんだよ。俺となんちゃってスパーリングしても自力で歩けるようになった、つったら」

「下りたって、どこから？」

「決まってるだろ？」

間抜けなほどにきょとんとした顔になったスライサーの問いかけに、あっさりグランドは答える。

「我らが上司、アストル・ガベル『メルドラ』隊隊長殿からだよ」

ニヤリと口元を歪めて、彼はいつものように笑っていた。スライサーはしばし黙し、

「何だあいつ……何だかんだ言って飲んだワケか、あの話」

「飲まされたっばいぞ？さっき会った時、とんでもなく不機嫌なツラしてやがったからな」

笑うグランドの言葉の後、なるほどね、と胸の中だけでスライサーは呟いた。そして、

「……こりゃあしばらく、当たられるなあ……カリナも戻ったことだし」

「カリナが戻った？もう？で、どこにいる？」

言ってしまうからスライサーはまた口が滑ったことをひどく後悔した。グランドは目をららんと光らせて、仕事も何もあったものではなさげなうれしい様子で、そんなスライサーの顔をのぞき込んだ。

同時刻、同基地内司令棟の小会議室フロアの一室、ガベルはふてくされてその片隅で聞くでもなしにその説明を聞かされていた。つい最近、たった三人でしたミーティングよりも数倍大きな規模で行われている会議の中心は、この五日後に基地へ運び込まれる新型機に関する内容で、今現在説明をしているのはその主任開発者である整備主任、カリナ・エプスタイン伍長であった。その機体のデータは既に電子情報として基地内に送られていて、以後特に変わった点もなく、ガベルにとってはどうでもいい内容ではあったが、上司の命令とあらば顔を出さないわけにも行か

ない。その、おそらくこの先直属の、というおまけつきになる上司はと言うと、そのとなりで苦笑していた。小声で、ガベルに問いかける。

「退屈か？ガベル」

「まあ、そんなところですね。俺は機械の中身のことは専門じゃないからよくわからないし、向こうでされた話をここでも聞かされてるかと思うと、時間ももったいない」

スピーカーを通して室内に女性の声は流れ続ける。配属される機体を映した映像が正面のモニタに写し出され、テスト駆動中の新型マシン『メルドラ』の動く姿に、あちらこちらから歓声のようなどよめきが上がった。運動能力がどうだの、反応速度がどのくらい上がったかの、実際乗っている側に、数字はどうでもいいことだった。搭乗して稼働させて、その力加減というものはそうしないといまいちわからない。何でもそうだ。このくらい、という感覚をつかむには実際そうしてみなければわからない。とりあえず時速何キロでどのくらいの重力が、というところだけわかったようなふりをして、ガベルはまたぼんやりと、モニタに映る機体と傍らの女とを見やった。彼女とのつき合いは長い。同時期の入隊だったから部署は違えどよく知っている。プラスアルファ、もなきにしもあらず。悪いヤツじゃあないんだがなあと胸中で呟いてガベルは溜め息をつく。今朝もそうだ。食事をとろうと部屋を出たところを何故か襲われ……というより自分から先に逃げた。つきまとわれるとしつこい、そしてたった一つの問題にここ何年かえんえん彼女は執着し続けていた。何か質問事項は、とその声が辺りに向かって問いかける。反応は少なく、ではまた何かありましたらと言って彼女は演台から下りて元の席へと戻っていった。後は重役という区分で分けられた年寄りの会合が残っているのみだ。ガベルにとっては更なる退屈な時間がやってくる。あふあふ、とその場で大きくあくびして、彼はその退屈でも紛らわそうと辺りを見回した。何をしている、と耳元で言われて苦笑いはするが、その年寄りの中に混じって話をしようと言う気は毛頭ない。傍ら、上司はひどく眉をしかめ、

「自分が担当する部隊の話なんだぞ、何か言っておかなくていいのか？」

「……やれやれ、じゃ、仕方ない」

やや大きさに肩をすくめてガベルは寝そべるようにしていた体を起こす。とは言えこの場で実際、何か言えることもろくにありはしないだろう。年寄り達は今までに行われた新型兵器のことをまず話題に、何やら頭を突き合わせていた。が、やがてその話が搭乗者はどうか、といった話題に移り始める。隣の上司がそのことでしたら、と言ってガベルをその中に無理矢理投げ込んだ。何かしゃべる羽目になったか、そんな心地で指名を受けたガベルは立ち上がり、同時にあの女と目が合って、その場で苦笑を微かに漏らした。

新型マシン『テスターM』用のシミュレーションソフトが基地内の特別ブースに設置された演算機に組み込まれたのは、その小難しい会議が終わってすぐのことだった。と言うより、その会議の延長で、と言ったほうが正しいのかも知れない。出向で基地と組織を運営しているいわゆるお偉方が、曰く付きのサポートシステムを乗せるのはどうか、というような問題を提示したため、である。

「一応、データは全てその中に入っています。本物の機体のものと同じサポートシステムを組み

込んでありますから、よりよく新型の性能がわかっていただけたらと思います」

どうして自分がスポークスマンなんかをしているのだろう。ソフトの開発者は私じゃないのに、と、少々機嫌をそこねながらも説明しているのはカリナだ。そしてその、物見高い集団の最後尾に、面倒くさそうな顔をしてついて歩いているのがガベルだった。見ていると、欠伸をしていたり余所見をしていたり、こちらを見るとにやにや笑ってみたりで、やる気や責任感などまったく感じられない。加えてこのシミュレーターで大丈夫なのか、という上からの疑問が出たおり、その男は会議室の一角で何を思ったか大声で笑ったのだ。おかげで余計にやりづらくなってしまった。何しろそのテストパイロットは稼動シミュレーション中に、あろうことか機体を後方宙返りさせ、演算機をパニックに陥れてしまった張本人なのだから。

「しかしテスト中にプログラムミスを起こして丸二日間その修正に手間取ったそうじゃないか。その問題はどうしたのだね？」

「そちらはもう解決済みです」

データ上でのマシンは一応それを成し遂げたが、パニックを起こしたのは実験用計測器であった。通常のマシンではおよそ不可能なその大技のおかげで計算の上で一瞬にして稼動不可能になってしまったのである。やった当人は悪びれもせず「何でもやってみるに越したこたないだろ？」と、涼しげな顔で言うのけ、そんな脆い機体に人を乗せる気だったのか、と挙げ句の果てには文句を付けた。もちろんその言い分は実戦に参加しているパイロットにしてみても、整備してみる側が受け取るものにしても正論は正論だが、そうした些細なアクシデントも技術屋にしてみれば大きな問題の一つになってしまう。納品先に知れ渡ってしまえば、その印象は最悪である。それ以前にあんなものでバク転をする必要性がどこにある、というのが彼女の思うところでもあった。そして当人が「それもそうだな」とけろっとした顔で吐いたのも、また事実である。

「何でしたら、どなたか試しに動かしてみますか？」

列の最後尾から、やや間延びした男の声はした。ぴくぴくと額を痙攣させ、その声の持ち主を極力見ないようにして、カリナは言った。

「それがいいかも知れませんね。どなたか実際乗っていただけませんか？」

いらだちと怒りは下らないことでしつこく食い下がるその集団と、その最後尾の男に対して向けられていた。ざわ、と一団がざわめく。明らかに狼狽の体をさらした年寄り達からも完全にカリナは目を逸らし、

「……正式配備までにまだしばらく時間はあります。プログラミングのほうも、パイロットにあわせて調整が利かない時間ではありません。それまでに完璧に仕上げれば、戦闘に支障は及ばないと思います」

「エプスタイン伍長の言う通りです。そちらは彼女に任せましょう」

怒りで微かにゆらぐ声の後、フォローはやはり列の後ろからやんわりとなされた。それはそうだとどこからともなく別の声が上がリ、ほっとカリナはその場で息をつく。

「では機体のほうは解決、かな。レイシャ少佐、搭乗者の方はどうなっている？」

「そのお話は戻って続けましょう。おおよその候補は絞ってあります」

完全に話題が移行し、ブース内にいた人間がレイシャの方へと注意を向けて歩き出す。見送って

カリナは今一度溜め息をつき、やや乱れた髪をその手で整えるようにかき上げた。

「……あーもー、疲れた。だからあいつらの相手って嫌いなのよ！信用してないって言うなら自分たちでなんとかしなさいっての！」

陽に透かすと炎のようにも見えるトレードマークのカーリーヘアを気にしながら、チッ、と彼女は舌打ちする。微かな笑い声が聞こえてますます眉をしかめたのはその直後だった。ブース内にいた大人数の姿はない。が、

「しかし、結構な見ものだったぜ？今のは」

「それは純粋に誉めてくれているのかしら？ガベル少尉」

にやつく笑みが近く見なければ遠くでもない距離からこちらを見ている。眉をしかめたままカリナは言って、それから足音高く彼に詰め寄ると、言った。「そもそもあなたがドゥーローで余計なことをしてくれたおかげでこんな面倒な話になってるのよ？あの時だってそう。おかげで耐震強度も耐熱温度も一つランクが上のものに換えることができたけど、金輪際ああいう無茶はしないでほしいものね！」

「以後気をつけるように努力はしよう」

「一切やめてちょうだい！」

おどけた口調で答えたガベルに対してカリナは怒鳴りつけるように言う。そして更に、

「それもそうだけど、どうして今朝は逃げたりしたのかしらねえ？あなたって人は」

ずい、と、ややもすると凄味のあるその顔が近づいてくる。ガベルは微かに後退りし、

「朝っぱらから襲われそうになったら、普通は逃げるモンだろ？」

「襲う？冗談じゃない！せっかく人が朝御飯の支度でもしてあげようって思ったのに！失礼しちゃう！」カリナの手が伸びてガベルの詰襟の首元をつかもうとする。するりとそれを交わして、ガベルは言った。

「それより、お前今日帰ってくる予定じゃなかったのか？しかもしばらく休暇だろ？」

「ええそう。だから帰ってきたのよ、今日朝一番で。夜中に出る車に乗って」

会議はたまたまのことよ、と、言葉の後で彼女は付け加える。ガベルは眉をしかめ、

「って、夜中に走ってる荷運び用のトラックにか？」

「そうよ？一刻も早くアルの顔が見たくて。健気でしょ？」

カッ離れたガベルを追うようにカリナは一步踏み出した。そしてにっこりと、あからさまに作った笑顔で言葉を続けた。

「さっきレイシャ少佐に聞いたわ。仲人、引き受けてくれるんですってよ？」

「なんだお前、結婚か見合いでもするのか？」

「あなたにも、今時間があるんでしょ？じっくり話し合いができるくらいの」

見る見る顔は近づいてくる。手を上げてガベルは正面から彼女のその顔を塞ぎ、そのまま押し返した。

「やんっ……何するのよ！」

「話し合うことなんかあったか？俺達の間。その話ならもう五年……いや、六年くらい前にきっぱりぱっさり終わってるはずだろ？」

軽く押し返したはずの彼女がよろよるとその場でよたつく。それを見てから、ガベルは踵を返した。

「ついでに言うがな、そいつが配備って事がどういうことだかわかってんのか？お前」

「新型ができたらさっさと戦闘に投入するのは当たり前でしょ？何言ってるのよ？」

カカツよろめいたカリナのポンプスの踵が床を鳴らす。直後、二人きりの室内はしんと静まり返った。彼女に背中を向けたまま、ガベルが一つ溜め息をつく。

「……アル？」

「お前はいい女だ、そんなこたあ、とっくの昔に思い知らされてるよ。だが俺は大した人間じゃない。明日をも知れぬ大馬鹿男だ」

言って、ガベルはそこから歩き始める。カリナは言葉を失って、無言でその背を見送る。

「そいつが完璧に使えるようになったら教えてくれや。乗せてやらなきゃならんヤツがいる。ペーペーの新人を後一カ月で、シミュレーターの訓練だけで本物に乗せるってのは、気が引けるんだがなあ……」

独言でも言うように言葉を紡いで、それからガベルは笑った。背中が去っていくのを見ながら、カリナはその場で叫んだ。

「この弱虫、軟弱もの、いくじなし！今度こそきっと後悔するわよ！バカ！」

答えるように背中でガベルは手を振る。カリナは唇をかんで、その場にしばらく立ち尽くしていた。

フェーン・ダグラムの元にその命令が下ったのはその日の夕刻のことだった。きちんとした任命式はないのだが、と言ったのは入隊一日目に顔だけ合わせた大隊長で、彼はただ目を白黒させて「拝命します」と答えることしかできなかった。

「……あの、スライサー少尉」

そのフェーンを大隊長の元に連れていったのが、同じ用件で呼び出しを食らったガトル・スライサーだった。そして、一緒にグランドの姿もある。三人は同時に同じことを言い渡され、そして今宿舎への帰り道を何故かまた一緒に歩いているのだった。

「なんだ？フェーン……どうかしたか？」

「『テスターM』って……テスターって事は、試作機、なんですよ？」

ああそれか、と、小さくグランドは呟く。フェーンは見るでもない様子で太陽が沈んでいく様を見つめ、黙り込んでその答えを待った。スライサーはちらりと、傍らを歩いているグランドを見る。グランドは息をついて、

「今はまだな。正式な配置になった時には「メルドラ」とか言う名前になるらしい。今日その訓練用のプログラムと開発をやった主任メカニックがこっちに戻ってきた」

言葉に、歩きながらフェーンがそちらに振り返る。「今朝話してただろう？カリナ・エプスタイン。彼女だ」

「まーカノジョ、なんていいモンでもないけどなー」わはは、と笑い飛ばしたのはグランドだった。スライサーは困ったようにため息をつき、そして言葉を紡ぐ。

「ガベルのヤツにもとうとう止められなかったか、こうなることを」

「しょーがねーだろ？俺らもあいつも一介のマシパイロットなんだ。せめて隊長クラスにでもならなきゃ、人事に意見なんてできねーよ」

冗談めかした口調で言ってグランドは笑い飛ばす。眉をしかめたのはスライサーだった。いい加減にしろ、といなすと、グランドはへん、と鼻を鳴らしてその眉をしかめる。

「ま、ぼーずはとんでもなく早く出世ができるか、早死にするか、そーゆートコロに来たワケだ。せいぜい上手くやれよ？」

「何ですか、それ」

ややもすると、そう言ったグランドの口調は自暴自棄気味だった。やめておけ、と低くスライサーは言って、それから、

「これは極秘情報で、ついでに大半が俺達の予測だ。本気にとるなよ？」

言われたフェーンは首を傾げるばかりだった。スライサーは正面を向き、フェーンのほうを向いて話そうとはしなかった。

「この頃全線の様子がおかしいんだ。負けてはいない。だが、戦力はじわじわと削られてる。弱らされていると言うか……試されてるような感じで。俺もそいつも通常はミネアの方で働いてるんだがちょっとした拍子に本部に足止めくらって……どのくらいだ？」

「一カ月くらいじゃねえか？ガベルはそれより前に引き戻されて、どうしてかドゥーローに回された。テストパイロットならどこにでもざらざらいるってのにな」

問いかけられたグランドは怠惰そうに言い、あーあー、とわざとらしく溜め息をつく。フェーンは黙ってそんな二人の様子を見ながらその話に耳を傾けた。

「新型のテストパイロットなんかは、通常は暇な部隊の女性戦闘員が担当することが多い。ドゥーローにだって警備のために駐屯している部隊もあるし、訓練だってここと似たようなレベルでできるようにはなってる。不自由は欠片もないはずなんだ。なのにあいつは指名されて行った。最初はジョークだと思ってたんだが、行ったら一ヶ月戻ってきやしねえ」

「オートクチュールでマシンでも作ってんのか、とかジョークで言ったら、向こうも同じ様なツラでそんなとこだ、だぜ？笑えねーつつーの！」

そう言いながらも笑い飛ばしたのはグランドだった。話はよくわからないが、そこでフェーンは口を開く。

「それが『テスターM』って事は……ガベル少尉の専用機、って事ですか？」

「バカ、そんなムダなモン誰が作るってんだよ？作られるのはあくまで汎用機だ。あいつはそのサポートシステムのプログラミングの験体として出向いてたって事なんだよ。あいつが機体の動かし方のベース作るときゃ、後で使い勝手がいいからな」

答えたのはグランドだった。ますます訳がわからず、フェーンは無言でスライサーを見やる。

「簡単に言うと、戦況が怪しいから早いところ新型を作ってそれに対抗したい、てことだ。ついでに、より良い組織運営のために若いパイロットを上手く使って、我々はこんながんばって戦ってますよと、地下の市民に宣伝したいらしい」

「……僕を『目玉商品』にしたい、って事ですか？この機に」

フェーンは眉をしかめる。それを見てニヤリと笑ったのはスライサーだった。そして、入れ代わるようにしてグランドが言った。

「ま、半分はそういうことだな。ぼーず、わかったか？」

「もちろん、理由はそれだけじゃない。訓練を早くパスするヤツはそれだけ適性も高いって事だ。パイロットは常時人手不足だからな。新型機ができてきても乗るヤツが手配できなきゃ意味がない。お前の任官は人員補充のためにも早くされたって訳だ」

総本部基地には常時マシン・メイスだけでも一個中隊以上の警備がしかれ、それとは別に訓練や調整、待機中の戦闘員がその任務を遂行している。彼らもちろん非常事態になれば全員が戦闘配置に着くことになってはいるが、それでもラステルの戦闘要員は少ない。連合の国境地帯には国境の監視を担当する組織構成員が配置されてはいるが、現在その中でマシン・メイスを通常装備しているのは東側と南側の一部の部隊だけで、他地域は下手をすると人手が裂かれていない場合もある。そこから攻撃を受けたらひとたまりもないが、現状としてはそれが精一杯の彼らの防衛であった。

「ついでに、上で大きく騒げば地下にも影響が出る。総員が動く時はこの国が滅びる時だ。そういうことを知ったら国中はパニックに陥る。そうならないために気付かれないうちに処理したいって、協議会の思惑もからんでる訳だ」

前線での奇妙な戦況の把握もろくにできておらず、だからといって過剰反応を示すわけにもいかず、組織としてやりづらいことこの上ない。だからこんなにイレギュラーに人員の手配がされるんだ、と言ったのはスライサーだった。

「何しろ、失敗したら国家存亡の危機だって言うのに、最初の投入数がたった六機だぜ？俺らに死ねって言ってるのも同じじゃねーか、なあ？」

「バカ言え、だから俺達が『護衛』に選ばれんだよ」

「護衛？」

「知らねーのか、ぼーず。俺達は『トリオG』つって三人でラステルの制圧ができるほどなんだとよ？」

言ってグランドは笑い飛ばす。驚いてフェーンがスライサーを見やると、困ったように彼は答えた。

「今生き残ってる中じゃ俺達は一番優秀なパイロットらしい。ガベルなんかは『超スーパーエリート』とも呼ばれてる。そういう人選がされるほど、いろいろが大事って事だよ、要するに」

あやふやな戦況の打破と、国民への組織のアピール、そして新型機の投入。上層部はそれを一度に何とかしようとして躍起になっている。そのためには他に策もないと言うのだ。派手な動きを避けるために。今現在の戦闘状況は「膠着」と言うにふさわしい。国内はそれなりに安定していて、この機に協議会や運営要員の出向者は組織をもっと強化したいらしいのだが、なかなかどうして賛同者は少ない。その賛同を得るために、特に組織運営に非協力的な二国へ強くアピールするために、今回の状況は半ば「利用」されていた。複雑な事情、も、いわゆる偶像を打ち立てての宣伝活動も、わからないでもない。しかし。

「ここでは結局僕達は、兵器なんですね」

ぽつりとフェーンは呟く。スライサーは苦笑し、グラントは軽く笑った。

「特別扱いされるヤツなんてな、大概みんなそんなモンだ。俺達は『スーパーエリート』って呼称で煽てられて、結構な給料を貰って、住みやすいところ住まわせてもらって、飯も食わせてもらってるがそれは優秀な兵器だからであって他の理由はない。確かに聞こえは悪くはないが、実情は兵器だ。手足がもげて戦えないはずの人間に、手足をつけてくれる辺りがいい例だ」

その技術は随分と昔に完成していたが、何故かいまだに「軍事用」にしか使われていなかった。人間の体の一部が破損した場合、または延命のために切断しなければならなかった場合、その後に健康な人造のボディを繋げてほぼ元の姿形に戻し、そして元の機能を回復させる。一般市民に使用するにはコストが高いだの、一時は繋げた部分とそうでない部分とが互いに拒絶反応を起こすから、だの、様々の理由が提示されたが、むしろそれはその技術が国外へ流出しないようにとの防衛策のようであった。実際問題、民間でその技術を使って人体をもとの形に戻し、また機能を取り戻すには個人の負担する金額が大きかったために実用にまで及ばなかったのだが、ここではそれらはすべて国費でまかなわれる。戦って、瀕死であっても生きてさえ戻れば、彼らは強制的に生かされて再び戦場へ投入される。壊れた兵器を直すように。リサイクルの率がここまで高いと脱帽ものだな、と、冗談めかしてグラントは言った。フェーンは黙り込んで、その場で足を止める。その視線を黒い地面に落として、彼は眉をしかめた。

「……おいフェーン、どうした？」

「何でもありません」

「……なら、いいが」

明らかに様子は違っていた。しかし本人が何でもないと言うのだから、と、放置してスライサーは歩みを進め続ける。立ち止まったのはフェーンだけでなく、グラントも一緒だった。その半歩後ろから少年の小さな背中を見て、グラントは言った。

「どーした、今更怖じ気づいたのか？」

声は完全に彼を見下し、小バカにして笑っている。けれどフェーンは俯いていた。何も言わず、ただ地面だけをじっと見つめるようにしている。

「フェーン？」

様子がおかしい。グラントも今度はいぶかしげに眉を寄せ、そんな彼の様子をじっと見つめている。

「ようやく『死ぬ』って事がどういうことなのかわかったか？」

問いかけたのはスライサーだった。顔を上げてフェーンはそちらを見る。うすら笑いを浮かべて、スライサーは言葉を続けた。

「フェーン、お前どうしてこんなところに来ることを選んだ？軍人になりたいんだったら、てめえの国の軍隊にでも入りゃ良かったじゃねえか。そのほうがよっぽど生活も安定してるし、家族だって安心するってモンだぞ」

「あ……あなたには、関係ないでしょう？」

答える声が微かに震えていた。フェーンは明らかに狼狽えて、スライサーから露骨に目を逸らした。スライサーはため息を漏らし、そしてまた苦笑する。「ま、それはそうだ。入っちゃって

から志望動機がどうこう言ってる余裕はないしな。何をどうお前が悩んで憂いてるかはわからんが、そんなものだってはっきり言って吹いたら飛ぶくらいのちっぽけな問題に過ぎない」

「いいか、ぼーず。生きて戻ろうなんて思うなよ？お前はアイドルだ。死んで戻っても十分その役が果たせるレベルにな」

残酷と言えば残酷な科白をグラントが吐き出した。フェーンは何も答えず、その場で一人俯いて、その唇をかんだ。

「乗り心地はどう？と言っても、まだソフトだけだけど」

「なかなかの使い心地ですよ。けど主任の担当はハードでしょ？どうしてこちらにまで？」

「ま、いろいろとあってね。組み込むだけならバカでもできるし、一足先に戻りたい、って言ったら、運んでくれて頼まれたのが本当のところよ」

新型シミュレーター用ブースのシミュレーターの傍らで二人の女性構成員はそんな会話をしていた。一人はパイロットスーツを身にまとったショートヘアの女性、アークで、もう一方はメカニック担当のカリナだ。

「反応速度が、ちょっとだけ速いみたいですね？今度の新型」

「そう？あ、そうか、あのバカのベースフォーマットだからだわ」

シミュレーターを使った感想、とやらをリサーチしていたカリナはそう言って眉をしかめる。アークはその目の前でくすくす笑いながら、

「そう言えばベースのプログラムのために行ってたんでしたっけ、ガベル隊長」

「ええそう。ついでにとんでもないことまでしてくれて、ありがたかったらなかったわ」

荒々しく刺々しくカリナは言い放つ。アークはただ笑ってその様子を眺めていた。白い大きな箱に扉が着いただけの外観の中には球体のスクリーンが展開され、その中にリニアシートが設置されている。本物のコクピットとほぼ同じ仕様のシミュレーターは、本物の動きを計算して出された全ての結果を、できうる限り忠実に再現する。乗りなれていない人間が『酔う』事はよくある話だ。だから慣れなければならない。移動するだけで体調を崩しかねない大きな乗物に。そしてその上で戦うためにも。

「でも耐久性はちゃんとアーク仕様になってるから大丈夫よ？ちょっとやそっとのことじゃパイロットに影響が出ないように……揺れは仕方ない話だけど」笑いながらカリナがそのシミュレーターを見やる。アークはそんな彼女を見て、くすくすと笑い声を漏らした。気付いて、カリナ、

「あら……なあに？」

「いいえ、そうしてると、本当にマシンか好きなんだなあって思えて」

「ええ、好きよ？何ととっても素直でいいコだもの、みんな。バカが乗らない限りは人畜無害だし、手を入れればそれだけしっかり働いてくれるし。人間の子供なんかよりよっぽどかわいいわ」

「そうですか？それはちょっと……」

答えて笑うカリナのその言葉にアークは賛同しかねながら、その白い箱を眺める。カリナはこんこん、と傍らの箱の外壁をたたき、言葉を綴った。

「確かにこのコ達は破壊活動のために作られてるわ、かわいそうなことにね。でもそれはそういう用途に使うヤツが悪いのよ。このコ自体に罪はないわ。たくさんの人を殺して、怪我をさせて、時にはいろんなものを破壊して……そういうことに使おうってヤツらが悪いの。で、それに乗じてせっせと作ってる私たちも」

なんだかんだ言って、好きなのは機械をいじることなのよね、とカリナは付け加えて笑う。アークは困ったような笑みを浮かべてそんな彼女を見つめていた。そして、

「じゃあ、なるべく壊さないようにして帰ってこなくちゃいけませんね」

「あら、そんなことないわよ？ぐちゃぐちゃに壊して帰ってきても、きれいに直すのが私たちの仕事だもの。中のあなたが壊れないほうがよっぽどいいに決まってるわ」

振り返ってカリナはアークの言葉に返す。アークはまた笑うと、

「そうですか？でもいつかすごく怒ってませんでした？誰かが半壊状態にして帰ってきた時に」

「それはそれ、これはこれ、よ。わざと壊して帰ってくるようなバカにはきつくお仕置きするのも私の仕事なの。いくらラステルのリサイクル率が良いからって、あんなサイズの鋼鉄の合板がそうがらん作れるかって言ったらそうじゃないし、つぎはぎのマシンなんか外に出したらそれこそ恥ずかしいじゃない」

ややムキになって力説する年上の女性の姿にまたアークは笑った。カリナも釣られて笑い出し、しながら、こんこんとシミュレーターの壁をたたく。

「あのかわいい新人君にも、できたら大事に乗ってほしいものね。うまく使えば本当に役に立つ破壊兵器だから」

「主任、フェーン君に逢ったんですか？」

「ええ、朝一番に格納庫で」

何気ない問いかけの答えにアークは驚いて目を丸くさせる。様子が変わったことに気付いたのか、カリナは振り返り、

「あら、どうかした？」

「いえ……彼、あまりマシンが好きそうじゃないと思ってたから……意外で」

「そうね……好きそうではなかったわね、熱心には見てたけど」

アークの言葉に納得したようにカリナは返す。そして、

「何か思ってるところがきっとあるんでしょうね、彼にも。若いし、固いし、すごくまじめそうじゃない？」

「ええ、とてもまじめです。賢くて、勘も良くて、負けず嫌い」

くすくす、アークは笑う。目をしばたたかせ、カリナはいたずらっぽい笑みをその口元に浮かべると、「よく知ってるのね、レクスライ少尉。彼とはどういう間柄？」

「お目付役ですよ。ここでみっちり彼を鍛えるための。最もこの頃はテスターMのことで私も忙しくて、そのお相手はグランド少尉ばかりですけど」

「あら、そうなの。シロがお相手？やーねー、あいつ、女の子がなびかなくなったら今度は男の子？」

「そ……そーゆー事では、なさげですけど」

やけに真剣になって心配し始めるカリナを見て流石にアークも彼をフォローする。カリナはそのまま、

「でもいいわよね、シロは。自由奔放と言うか、あんまり物も考えてなくて。戦争しに行くって事を大問題にしていなくて、今この瞬間をいつでも楽しく生きられるタイプで」

「そうですか？あの人って、そんなにいいものですか？」

「うらやましいって事よ。誰かさんは、せっかくわずかな時間の蓬瀬だって言うのに、この頃ぜんっぜん相手にしてくれないしっ」

ややすねながらカリナが言う。アークは困ったように笑って、

「ああ……隊長ですか」

「そう、あの阿呆よ」

カリナの口から多大なため息が吐き出される。アークは何も言わず、困ったようにその場で笑っている。「何がいけないのかしら。別にわがままを言ってるつもりはないのに。戻ってきたら『お帰り』って言われるのって、そんなに嫌なものかしら」

「さあ、どうでしょう。あの人の変なところが特に繊細にできているみたいですし」

「それは世間じゃ「意気地無し」って言うのよ」

「あら、かわいいじゃありませんか」

くすくす、とアークが笑う。ちらりとカリナはそちらを見て、それから言った。

「……そーゆーところが好きなわけ？あなたは」

「そういうところも、です。ああ見えて配慮も細かくて世話好きで後輩思いで。『死にたがり』なところは玉に傷ですけど」

カリナは眉をしかめて黙す。笑ったまま、アークは言った。

「最後に残ったもの勝ちだと思いませんか？主任」

「全然思いません。とどめの一言を言わせない限り」「その意味だったら、私なんかとっくに負けてますけど」

アークはそう言って苦笑を漏らす。カリナはそれを見て、つられるように苦い笑みを浮かべた。

「……そろって二人とも、あんな男に振り回されるとは。女が廃るわね」

「あら、私はまだ若いですから、この先取り返しなんていくらでもつきますよ？」

「ああ、そうだったわね」

御年二十八歳のカリナは八つ年下のアークの言葉にやや力強く言い返す。くすくす、と笑い出したのはアークだった。笑えないわよ、と、カリナは小さく一人ごち、またその場でため息をつく。

。

「どうしてあんな風になっちゃったのかしら……昔は照れて『バカ』とか言いながらも、ちゃんとして受けとめてくれたのに」

「仕方ないですよ。ガベル少尉は優しいから。戦争なんて本当はできないくらいに」

アークが困ったように言う。その通りだわ、と胸の内でカリナは呟いた。

人気のない時間に一人でハンガーに入るな、というのは誰に言われたんだっけ。思いながら、フェーンはまたその場所にいた。配属先決定から一週間、毎日のようにフェーンは早朝のハンガーを覗いていた。あれから何だか走ることが癖になってしまったようだ。そして決まって最後に、ここに入り込んでマシンを見ている。昨日、今日からみっちりシミュレーションをして操縦に慣れる、と帰り際に言ったのはグランドだった。指示は隊長からだったらしいが、その隊長と言

う男に、フェーンはここのところまったく逢っていない。三分で吐いてたら身が持つ持たないのレベルの話じゃないぞ、と言って笑い飛ばしたのを、聞く側はどう思って聞いていたのかなんて、あの男には考えの及ばないことだろう。たった一週間ほどだが大体パターンは見えてきた。そして、そうやって人の行動パターンを読もうとするから、自分はかわいくないとか言われていることも、彼は十分承知していた。そんな仕組みがわからないほど愚かではない。そしてできればスムーズにいろいろなことを運びたい、とも。人気のないハンガーには火の入っていないマシンが、ただオブジェの様に静かにたたずんでいた。整備、調整の終わったものもあれば、装甲の外された、内部間接がむきだしになったものもある。一週間前からあまり変わらないようで、ハンガー内は毎日その様子を変えていた。事に最近は完成したマシンを屋外に出すなどして、その中に空き場所を作っているらしい。何でも近々新型がドゥーローから運ばれるとかで、彼の回りにもわかにあわただしくなっていた。

「おい、誰だ、そこにいるの！」

マシンを見上げていると、そんな声が辺りに響き渡った。守衛にでも見つかったか、思いフェーンは振り返る。ここの管理をしているのはスティラからの出向者だ。見つかっても特別おとがめはないが、聞いていて気分の良くないことを言われるのは目に見えている。まずいな、思いながらもフェーンはそこから動こうとしなかった。自分は子供だし、素直に謝って適当に逃げればすむ。そんな考えが働いたからだった。

「……何だ、ダグラム少尉か。こんな朝から一体何をしてる？」

姿を見せた男はそう言って驚いたように彼を見ていた。フェーンも、思いも寄らない人物の登場に、思わず、

「が……ガベル少尉……じゃない、隊長……」

驚きを隠さずにその名を呼ぶ。ガベルはその様子を見るとニヤリと笑い、そして言った。

「こんな朝早くからこんなところで何してるんだ？守衛の許可は？」

「……いえ、とっていません」

これは、注意でもされるか。フェーンは直感してその場で俯く。ここは先手必勝で謝れば、思ったその時、また意外な言葉がその口から発せられた。

「実は俺もだ」

その内容に驚き、思わずフェーンは顔を上げる。ガベルはニヤリと笑うとフェーンのとなりに立ち、

「意外にいたずら小僧だな、お前。聞いた話じゃまじめでおカタイ優等生、って感じだったが」
そう言って目の前のマシンを見上げる。啞然としたままフェーンは傍らの男を上から下までじっくりと観察するように見た。顔は変わらず、まるでいたずら小僧のように笑っている。

「そう言やぁ初日に逢ったきり、まともに話したこともなかったな。元気か？」

「は……はい」

「そーかそーか……そいつは良かった。シミュレーターの訓練はどうだ？」

「いえまだ……今日から乗れ、って指示が……」

「おー……そうだったか？あれ？その指示、俺が出したんだったな、そう言やぁ」

言っただがベルはがはは、と声を立てて笑う。何なんだ、この人は。そんなふうに思いながらフェーンはただ、彼を見ていた。ガベルはマシンを眺めて笑いながら、

「のっけからあんまり無茶はするなよ？俺もアークも今忙しくてろくに見てやれんが……変わりにスライサーは任せてある。お前さんにちょっと退屈なメニューかもしれないが素っ飛ばさずに丁寧にさらってこい」

「は……はあ……」

返答も、曖昧になる。それでもガベルは機嫌良さそうに、何故かうれしそうにその場所で笑っていた。首を傾げ、フェーンは思い切ってその理由を訊ねた。

「隊長はここで……何を？」

「俺か？ああ……ちょっとな。散歩がてら寄ってただけだ。お前は……早朝の散歩するほど年よりには見えないが……何を？」

「いえちょっと……走っていて……」

そう答えてフェーンは彼から目を逸らした。語調がはっきりしないことが気になったのか、ガベルはちらりと横目でフェーンを見、しかしすぐまたその視線をマシンへと向けた。

「ほーお……走ってて、かあ……何だ、毎日走り込んでるのか？」

「ええ……まあ……」

「あのシミュレートの結果、か？」

顔を完全にフェーンに向けてガベルが問いかける。フェーンは答えず、そして彼を見ようともしなかった。少々膨れたような顔でただマシンを見上げている。鼻先で軽くガベルは笑い、突然その場でくるりと踵を返す。目の端に移ったその動きに気付いて、フェーンもマシンからそちらに向き直った。

「隊長？」

「ちょっと着いてこい」

「え？」

「いいから……お前、朝飯は？」

言っただがベルは独り歩き出す。あわててフェーンはそれを追いかけて、

「まだです……あの……」

「いいからこい！食ってないならなおのことチャンスだ」

「……は？」

やけに楽しそうにガベルは笑っていた。まったく訳がわからないまま、フェーンはその後についてただ歩いた。

「ほー、それで朝っぱらから二人でシミュレーションしてたわけか」

「おう。なかなか楽しいぞ、あいつを見てるのは」

「そりゃあそうだろうよ、噂の天才少年を間近に見られて、しかも教育できりゃな」

二時間後、シミュレーションブースにスライサーは大きな紙袋を抱えて立っていた。目の前でガベルは両手を広げて、ご苦労さん、ほら寄越せ、とその荷物をこちらに渡すように促すが何故か

不機嫌なスライサーは紙袋を抱えたまま、微塵も動かなかった。「何だ早くしろよ。腹減ってんだよ俺もあいつも」

「カリナからほうほうの体で逃げ出して何やってるかと思えば、今日はガキのお守か」

「.....何ごちゃごちゃ言ってんだ？お前」

「お前はこれでも食ってろ」

ぺっ小さなパックがその袋の中から取り出され、ガベルの頭に投げつけられる。額に一度ヒットしたそれが宙に浮かぶ間にうまく捕まえて、ガベルは眉をしかめて問いかける。

「って.....何だよお前。俺が何かしたか？」

「お前は何にもしてないがな、俺はお前のとなりの部屋に住んでるせいで、毎朝いろんなことに巻き込まれるんだよ！」

どさどさっブース内のテーブルの上に運んできた食料をスライサーが下ろす。普段温厚で常識人のはずの顔が、この時ばかりはやや不機嫌で危険なものになっていた。ガベルはそんな彼に笑いかけると、

「いやー、悪ィな、いつもいつも。いろいろと世話になってよ？いっそのことどうだ？カリナ自体引き受けて.....」

「てめえのケツくらいてめえで拭きやがれ！このいくじなし！」

スライサーの怒声は直後ブース内に響き渡った。幸い、まだ朝早いおかげで人気はなく、それにいちいち反応する人間もいない。たった一人耳が痛い思いをしているガベルも、それにはさすがに笑うのをやめて言葉を返す。

「って.....そんなに怒鳴るなよ。俺だってやりたくてこんなことしてるわけじゃなし」

「ほー、じゃいい加減なんとかしてくれるな？引っ越すなりあいつと住むなり何なり」

「って.....冷たいこと言うなよ。つきあい長いじゃねえか、俺達。な？」

手の中のパックは長期間の戦闘に備えて作られた携帯非常食だ。はっきり言ってあまり美味ではない代物で、できればせっかく食堂がある基地にいるのだからまともなものを食べたいと言うのがガベルの思いだった。が、運んでくれと頼んだ相手は他のものを寄越す気はないらしい。トホホ、と思わず呟いて、ガベルはパックのストローに口を付けた。

「フェーン、出てこい。朝飯だ.....食えるか？」

シミュレーターの中と外とを繋ぐ通信機越しに、スライサーは呼びかける。中から微かにコンピューターの稼働音がした後、

「はい、今出ます」

と、明朗なフェーンの返答は届いた。

白い箱の外に設置されているテレビモニタの上には、ポリゴン映像で作られたマシンが戦っている姿が映し出されている。同じ画面のすみでは小さな数字の表示が、くるくると音も立てずに目まぐるしく変化を続けている。

「ほー.....こりゃあ、なかなかだな。たかがシミュレーターとは言え」

映像を見ながら嘆息しているのはスライサーである。フェーンはその傍らで運ばれてきた朝食、

主に調理パンとミルクを交互に口にしながら、見るでもなくそんな彼の背中を見ていた。すぐとなりではガベルがにやついた笑みを浮かべながら、

「どうだった？フェーン。乗り心地は」

問いかけてあわててフェーンは口の中のものを飲み込む。そして、

「.....あんまり、いいとは言えないです、やっぱり」「二回目でそんだけけろっとしてりゃ上等だ。飯も食えるみたいだし」

誉められたのだろうか、それとも。思っただけフェーンはかぶりついていた三個目の調理パンに何気なく目を向けた。初日のシミュレーションでは三分でやられた上に、大失態をしているのだ、誉められたようでもあり、からかわれたようでもある。相変わらずスライサーは感嘆の声を漏らしながらその画像を見つめ、さすがに鳴物入りの新入生だけあったなあ、と、言わなくてもいいようなことまで口走っている。フェーンはその眉をわずかにしかめたまま、彼の背中の方こうにあるモニタに、目と言うより気持ちを向けていた。そんなフェーンに向かってガベルがまた言葉を投げる。

「鳴物がダテって訳じゃねえよ。そいつは努力のたまものだ。そうだろう？フェーン」

「努力？毎日グランドと手抜きスパーリングごっこしてたのが、か？」

笑うガベルの科白にスライサーは顔を上げる。そういう認識だったのかとフェーンは思いながら、しかし、

「.....特別なことをしてたわけじゃありませんよ。この頃早く起きる癖がついて、時間を潰してただけで」

「フイてんじゃねえよ、このガキ。毎朝走り込んでたんだろ？乗り物酔いの克服のために」

「え？そうなのか？」

驚き丸出しの顔でスライサーが派手に声を上げる。にやにやとガベルは笑って、所在無さげになってしまったフェーンが俯くのを楽しそうに眺めている。ほー、とまたスライサーは感嘆の声を漏らし、

「お前、本当ににまじめなヤツだな。それで訓練校を半年でパスか.....いやはや」

「そーだろそーだろ？頭が下がるよなあ」

何がおかしいのかガベルは笑っぱなしだった。スライサーは驚きっぱなしで、

「だったら最初から新型のパイロットとして指名が来るのも、納得いく話だよ.....何もなくても」

一人でそんなことを口走って一人で納得している。ガベルはそれを聞くとその笑みを苦いものへと転じさせ、

「このバカ、余計なこと言うな。そういうのは上の意向で、俺達とは関係ないことだろが」

「ってお前だってそういう懸念してただろ？こいつがヌウイの出身で、とかなんとか.....」

スライサーが何気に口走ると、フェーンの様子が微かに強ばる。ガベルはバカ、と小声で言い、言われてからスライサーは口を滑らせたことによろやく気付いてフェーンを見た。

「僕がヌウイの出身だと.....何か？」

「あー.....いや.....」

あーあ、とガベルはため息をついた。スライサーはフェーンを見られず視線を反らし、ごによごと口の中で何かを呟くように言う。

「ダグラム少尉、悪く思うな。こいつはちょっと口が軽くてな。ついぼろっと言っちゃいってしまうこともあるんだが……別に……」

「ヌウイ出身者はここであまり信用されない、というのは聞いて知っています」

弁解しようと口を開いたガベルの言葉が終わるより先に、フェーンはそう言い放つ。ヌウイは十数年前敵国ラビスデンから割譲した小国だ。ラステル四国中最も土地が狭く、現在ではその場所に暮らしている人間は殆どいない。人口の殆どは主にスティラ、ソレアの地下都市に移住しており、廃虚と化した土地は、今では特務機関の管理下にまでされている。彼らは自ら連合に参加している訳ではない。戦争によって奪い取られたからやむなくラビスデンから切り放されたと言うだけのことだ。割譲とは言っても返還の予定はなく、占領との違いは一応の自治が認められている点くらいのものだが、誰も住まない土地には政府も自治体もあつたものではない。廃虚では資源回収やその他「強奪」とも取れる行為だけが繰り返され、追われた人々は他の土地に連れてこられて暮らしながらも、そこに打ち解けていくことはできないでいる。ヌウイが四国協議会において権限が皆無だと言う事実もあいまって、その状況は今日まで、そしてこれ以降も続くことだろう。結局はよそ者だ、だから信用どころか仲間にさえ入れてもらえない。それがヌウイ出身者の、連合に対する意識だった。

「ダグラム少尉……あのな」

「この間スライサー少尉とグラント少尉に僕はアイドルだと言われました。適当な広告塔がほしいんだとか。スティラからの出向者や機関の運営委員会はヌウイから資金を得るために、僕を使って派手なパフォーマンスでもしたいんでしょう？大体読めています。でなきゃいきなり新型に配属されるわけがない。しかも僕はまだ十代だから、他の国家の人たちにもそれ相応のアピールができる。ついでに、死んだところで機関自体の損害は大きくないし、むしろその方が宣伝効果は大きい。ヌウイ出身の子供がラステルのために戦って戦死した、なんて、できすぎている気がします」

違いますか、と言葉の後やや間をおいてフェーンが付け加えるように言った。ガベルは黙し、スライサーは口を開きかけ、やめて一つ深呼吸をした。

「……ガベル、すまん。こいつの勘がいいことを忘れてた」

「バカヤロー、それ以前の問題だ。下らないこと二人して吹き込みやがって」

顔を片手で覆う様にしてガベルもその場でため息をつく。フェーンは黙したまま、二人のどちらかがその問いかけに答えるのを待った。大の大人は二人して困惑の表情を浮かべていたが、やがてガベルは口を開いて言った。

「お前はどの……何が不服だ？」

「別に何も。このまま特別扱いでしばらく僕はアイドルをやらされ続けるんでしょう？それも、おもしろそうだと思うくらいで」

微かに、フェーンの口元が笑う。所在無さげにスライサーはその視線を泳がせ、ガベルは逃げ場がないと悟ったのか、その口元に苦い笑みを浮かべた。

「おもしろそうだと思うなら、そのことについてはもう言及するな。そういう思惑で動かされて不服なら、どこへでも言い触らしてくりゃあいい。その後ただですむと保障はできないが」

「扱いがどうだろうとかまいません。僕は僕のできる限りのことをしてマシンに乗るだけです。そのためにここに来たんですから」

「お前……マシンが好きなのか？」

「そんなことをあなた方に答える必要はない」

笑って、フェーンは言葉を返す。それはうれしいだの楽しいだのというときに浮かぶものではなく、勝利を確信した時に上る、ややもすると冷たすぎる微笑だった。それを見て、苦笑を漏らしていたガベルはその眉をしかめる。見下ろすようにして、フェーンはそんな彼に問いかけた。

「何か、気に入りませんか？」

「別に。マシンが好きでもない、傀儡が楽しいわけでもない、なのにどうしてこんなところのこのこ出てきたのかとちょっと思っただけだ。間抜けなくらいにすんなりと」

「上からの指示にしたがったまでです。あなた方よりもっと上からの」

「ダグラム少尉、志望動機は？と聞いてるんだ、俺は」

フェーンの笑みが崩れる。逆に、勝ったとばかりにニヤリと笑ったのはガベルだった。ぐっと言葉に詰まり、フェーンはおうむ返しのように先刻の言葉を繰り返す。

「そんなことをあなた方に答える必要はない」

「答えられない、とは言えないのか？」

言葉に、かっとならフェーンの顔が赤くなった。ガベルは笑いなが立ち上がり、傍にいるスライサーにあごで、行け、と指示を出す。所在なげだったスライサーは、ややもするとおどおどしすぎの目でちらりとフェーンを見やり、何も言わないまますごすごとシミュレーターブースを去っていく。ガベルはそれを見送ると、改めてフェーンを見て言った。

「そこにある教習用対戦ソフト、三日で全部クリアしろ。お前なら簡単に片付けられるだろう？希代のスーパーエリート」

「……そういう言い方は、されたくありません」

「上司の命令は絶対だ。逆らえば軍律違反。それとも、覚悟の上での口答えか？小僧」

答えを待たずに、ガベルはその場から歩き去る。フェーンは一人残されて、怒りに肩を震わせていた。何だ、何なのだ。自分は本当のことを言ったまでなのに、明らかに相手に勝っていたはずなのに、どうしてこんなに嫌な思いをしているんだ、しなきゃならないんだ。握り締めた拳までもが振動しているのを見て、フェーンは悔しげにきつく奥歯をかみしめた。ぎりぎりときしんで、あごが砕けんばかりに。

翌日から目付役が姿を消した。何でも「自分たちの仕事」とかでそれぞれ忙しいらしいという話だったが、フェーンにとってはどうでもいいことだった。一応隊長が作ったプログラムの通りに日々の訓練をこなすだけだ。それが今の彼の「任務」なのだから。大方他のメンバーは新型のシミュレーションでも行なっているのだろう。テスターM、まだ本物を見たことはないが、データによれば今までのマシンの常識を覆す性能を持った攻撃型の機体であり、防御に重きを置かれ

ない代わりに、駆動性とパワーをより強化されている。そしてその機体を駆る部隊は通常の作戦を遂行するためのものではなく、遊撃部隊になるだろうとも言われている。急襲、夜襲、単独行動、など。マシン自体は元々そうした特殊な作戦に向けた兵器である。機関の上層部は新型を開発するのと同時に、その遊撃部隊に最も適した人材を前機関構成員の中から選出して現状を何とか打開したいらしい。詳しいことはわからないが、それはそうだろう。何しろこの国は建国から五十六年間、ほとんど絶え間なく戦い続けているのだ。いい加減「勝利」しなくては政府の存在価値も問われかねない。もっとも、勝てない戦争をし続ける理由などフェーンにとってはどうでもいいことではあったが。

「.....くそッ」

シミュレーターのシートが擬似衝撃でぐがくと揺さぶられる。足下近くに張り出した機体状況を表示するモニタには「破損率40%」という文字が、全くもって機械的に映し出されていた。左足の膝部分が攻撃の際にかかった負荷で破損している。その他にも避け損なった敵銃弾やその他攻撃の為に機体はすでにボロボロだった。立って歩くことがやっとで、単体での帰環が難しいと思われるレベルだ。稼動不可、と真正面のモニタにまでメッセージが浮かび上がり、フェーンはいらだちに傍らのコントローラーを強く殴った。昨日隊長に示されたソフトの大半はコンピューターと対戦するタイプのもので、半ばゲームのような代物だったが彼にとってはまだまだ手強い「敵」ばかりである。大体、破損率が40%ならまだ稼動はできるはずなのに、それで強制的にゲームオーバーとは、一体どういうことなのだろう。いつかグランドも言っていたではないか。動けなくなるまで、と。どうせこの外は戦場なのだ。生きて帰るための訓練など必要ないじゃないか。思いながらフェーンはシミュレーターの外へ出るためにそのドアを開ける。完全に動けなくなるまで動けるパターンのソフトはないのか。思いながらフェーンは白い箱の外へ出、その壁を殴りつける。

「こら、備品は大事に扱わなきゃ駄目よ？」

声がしたのは直後だった。振り返り、フェーンは微かに息をつく。にっこり笑って立っていたのはメカニック主任、カリナ・エプスタインだった。が、フェーンは視線を彼女から反らして、その横を通り抜けていく。

「すみません、以後気をつけます」

「よろしい.....で、どこに行くの？」

カリナはそのままフェーンを目で追いかけて始める。四、五メートルも歩いてからフェーンは振り返り、

「喉が渴いたので何か飲みに行こうと思って。僕に何か？」

「ええ、何か。一緒に行ってもいいかしら」

立ち止まったフェーンの元にカリナが小走りにかけていく。しばらく見守って、

「かまいません」

「そう。じゃ、お姉さんがジュースでもおごってあげるわ」

フェーンが答えると機嫌良さそうにカリナは言葉を返した。

「そう言えばどうしてあなたは一人だけ、こっちのブースにいるの？」

ジム施設内の休憩室のテーブルについて、カリナは紙コップ入りのドリンクをフェーンの前に差し出しながら問いかける。腰掛けていたフェーンは軽く一礼して、

「そういう指示です。あそこにある対戦ソフトを三日ですべてクリアするように、って隊長が」「へえ……で、どんな具合？その前に、一人で退屈じゃない？」

整備担当者だからか、彼女の態度は構成員らしくなくフェーンも目に映る。興味津々の体でカリナはじっとフェーンの顔をのぞき込んでいた。まるで何も、大人の女性が年の離れた子供の私生活に興味を示している、その様子に他ならない。フェーンは笑いもせず、

「それが指示ですから」

「指示ですから、じゃなくて、退屈かどうかを聞いているのよ。答えなさい」

そっけなく返したが、それで満足する彼女ではなかった。フェーンはちらりとカリナを見やり、「聞いて、どうするんですか？」

「あら、どうもしないわよ？なぁに、誰かに頼まれて来たとも思った？」

言葉に、カリナはくすくすと笑う。思わぬところで凶星を指されたフェーンは黙り込み、伸びているドリンクのストローに口をつけた。答えない彼を見てなおもカリナは笑う。

「でも聞くまでもなく退屈よね？一人で黙々とシミュレーション潰けなんて。民間のゲーム会社で作った娯楽用でもないし、やることと言ったらひたすら戦闘でしょ？しかもコンピューターと対戦だもの。よっぽど好きかおもしろいオマケでもなきゃ、普通サボるわよね？」

カリナの瞳がフェーンの瞳をのぞき込む。フェーンは視線に気付いてストローから口を離すと、「今の僕の『任務』ですから。任務法規は群立違反でしょう？」

「……本当にまじめね、あなたって」

言いながらカリナはその場で苦笑とも取れないため息をもらす。何なんだろう、思っただけでフェーンは微かにその眉をしかめた。どこまで行っても自分は子供扱いの上「アイドル」らしい。からかいにでもきたのだろうか。ストローでドリンクを飲み干すまでの間、フェーンはそんなことを思っただけで何も語ろうとはしなかった。カリナはそんな彼の様子を観察しながら、何かおかしいのかまた笑い始める。

「エプスタイン伍長……何か用があったんじゃないんですか？」

「ええ、そうよ？」

コップの中身が空になった頃フェーンがそう言って話を切り出そうとする。カリナは笑いながら答えて、それから立ち上がった。

「これからあなたを連れ出そうと思って。許可は下りてるわ。出かけましょう」

「……え？」

何事かと問うより前にカリナは言ってその場で大きく伸びをする。フェーンは呆気にとられて、「出かけるって……どこへですか？」

「さあ、どこでしょう？気分転換にドライブ、って感じだから大したところに行くわけじゃないけど」

内緒よ、と、言葉の後に付け加えてカリナがウィンクを投げて寄越す。フェーンは呆気にとられ

ながら、のんきと言うか勝手と言うべきかわからない彼女をしばし見上げていたのだった。

二人乗りの小さなジープに乗って、フェーンとカリナは基地の敷地の外へと出た。目の前に広がるのは広大な荒れ地ばかりだ。湿気がないために昼夜の寒暖の差が激しく、おかげで植物も育たなければ、生息している動物もほとんど見当たらない。一応舗装された道路を、カリナが運転するジープは東へと向かって走っていた。そのまま進めば国境地帯へ出る。そこ以外に目的地らしい目的地があると言うのだろうか。何気にフェーンは思いながら、横目でカリナの様子をじっと観察していた。しばらくジープはその道を進み、やがて舗装が途切れたその場所で止まった。目の前には一面の岩砂漠、足下に這いつくばるようにして時折生えている草もあるが、それ以外その場所には何もない。舗装、と言っても一体いつごろされたものなのだろうか。かなり痛んでいて、小さな車は走っている間中がたがたと揺れていた。

「気分転換するならもっとおもしろい場所のほうが本当はいいんでしょうけど、私たちが出歩ける範囲って言ったらこのくらいなのよね」

辺りを見回しながらカリナが言う。フェーンはその様子を見ながら、やはり黙っていた。苦笑を漏らし、彼女は天を仰ぐ。そして、その両手を高く突き上げて言った。

「けどずーっとあのブースに閉じ込もっているよりいいでしょう？外の方が」

「……そうでしょうか」

ぼそりと、小さくフェーンは呟く。初めて見た時から、外、地上には幻滅していた。文字通り何もない。今では廃虚というものさえ、そこには残っていないようだ。その表情は固いまま、微塵も動かない。カリナは振り返ってそれを見て、それから困ったように少し笑った。

「そう？じゃあ悪いことしたわね。余計に退屈させちゃったんじゃあ……」

フェーンはやはり何も答えない。横顔を見て、カリナはため息混じりの苦笑を漏らす。

「どうして僕を連れ出そうと思ったんですか？」

逆に、彼はそう言って彼女に問いかけた。カリナは苦笑いをその口元に浮かべたまま、

「何だか機嫌が良くなさげだったから、どうしたのかな、と思って。そういうときにしたくなさげな話をしなきゃならなかったし、ね」

ついでに密談をするにはこういうところの方がばれにくくていいのよ、とカリナは笑って付け加える。

「話、ですか」

その言葉にフェーンがようやく振り返った。カリナはわざとらしいくらいに大きく、ため息をまた吐き出す。ごう、とうなりを立てて、砂漠の上を熱い風が走る。乾き切ったその風と交じる砂に頬をたたかれて、フェーンはわずかに眉を寄せた。

「本当は、みんなと一緒に新型のシミュレーターのところにいると思ってたのよ。それが、聞いてみたら一人だけ従来機の方にいるって言うじゃない？だからあの場所まで出向いたんだけど……」

言い終えてからカリナが振り返る。フェーンは罰が悪そうにその顔から視線を反らし、

「別に……機嫌なんて、どうだっていいでしょう？」「あら、そんなことないわよ。トリオGの

三人なんか本当にわがままで、気分次第でとんでもないことやってくれるんだもの。メンタルって何につけても重要よ？」

「それで、どういうお話なんですか？」

それていく話題の方向修正を無理矢理するようにフェーンが彼女に問いかける。カリナは肩を軽くすくめて、それから話を切り出した。

「今やっているシミュレートのデータを見せてもらいたかったの。あなたの機体を触る時のために。それから、こっちは専門じゃないけど機体のソフトの調整のためにもいろいろとデータがほしくて。あなたまだ本物のマシンに乗ったことがないでしょ？」

フェーンは何も答えなかった。やれやれ、本当にご機嫌斜めだわ。カリナは胸の内で呟き、そしてまた空を見上げる。

「確かにご機嫌なんて伺う必要はなかったわね、私たちは軍人で、している仕事はすべて任務で、人間的な感情なんてそこには必要ないことだもの。兵器と同じで」

言葉の後には大きなため息をおまけにつけてカリナが吐き出す。フェーンはそちらを微かに見やり、それから何気に空を見上げた。

「……兵器と同じで、か」

ぱつりとフェーンが呟く。声を聞いて、カリナがそちらに目を向けた。わずかにぼんやりとした目が空を眺めていた。それは他の何者も見ないために向けられたのであって、空を見ているというわけではなさげだった。

「そう、兵器と同じ。パイロットの人はまさにそう。私はあいにくメカニックだから労働者だけど。でもどちらかと言うと労働力よね。忙しくても待遇が悪くても文句も言えないし、下手すると工具と同じ扱いだし」

言ってカリナは微かに笑う。フェーンは視線を彼女に戻し、彼女を見ると言った。

「エプスタイン主任は、どうして機関構成員に？」

「カリナ、でいいわ、少尉殿。私は……単に機械をいじるのが好きで、他に生きていく術がなかっただけの話」

「生きていく術？」

「ええそう。地上居住者なの、私」

首を傾げるフェーンにカリナは笑って返す。軍事施設が置かれている地上にはその特務機関が許可するだけの人員しか居住できない決まりになっている。機関構成員とその配偶者、そして十五歳未満の構成員の家族である子供たち。時折それ以外の居住者もいるが、彼らは特に「地上居住者」と呼ばれ、特務機関がその管理を行なっている。端的に言えば、

「戦災孤児よ。両親がソレアの軍人だったの。まだその頃は機関がなくて、各国の軍が独自に国境線を守ってて……そういう頃の」

当時から地上は軍の管轄であり、居住が許可されるのはやはりその妻子に限られていた。もちろん現在もそうした枠の居住者は、地上の定められた居住区で十五歳まで生活している。その後も自立するまで機関のサポートは受けられるが、時と場合によっては強制的に機関構成員にさせられる場合もある。

「私には何にもなかったわ、この空以外何にも。地下に行っても知り合いもいなければ親類もない、本当に独りぼっち。残念なことにマシンのパイロットなんて立派なものになれる適正もなかったから、ここで生きていくために整備士になっただけ。入るのは結構難しくて苦労したけど、中に入ったらこっちのもので、それまでよりもっといい暮らしもできるようになったし...
...別に悔やんではないわ」

最後の言葉は独言めいた響きを持っている。その後しばらくカリナは空だけを眺めていた。フェーンは黙したまま、そんな彼女の横顔をじっと見つめていた。

「でもいくら好きでも嫌になることはあるわ。何しろ手塩をかけたコがみんな人殺しの道具に使われる訳でしょ？それだけでも嫌なのに、壊されて帰ってきたらもっと嫌な気分よ？更に中に乗ってたヤツに怪我でもされたら私たちの面目って本当に丸潰れなんだもの。世の中ままならないったら」

特務機関構成員は基本的に足抜け不可だしね、と、その後カリナは軽い口調で付け加える。フェーンはやはり何も答えない。カリナは言葉の後、ふふ、と鼻で軽く笑う。そして、

「そういうダグラム少尉はどうして？マシンが好きでもなければ、あの手の組織が好きそうにも、見えないけど」

問い返され、フェーンは驚いた顔になってあわててそっぽを向く。そして、

「別に.....特別な理由は、ありません」

「へえ、そうなんだ？あんまり一生懸命だからてっきり何か高い志でもあるのかと思ってた。でももし、戦争が好き、とか言ったら殴っちゃうところだけど」くすくす、カリナがその場で笑う。追求を逃れたような気分でフェーンは今一度そちらを見やり、カリナが同時に言葉を紡いだ。

「ま、理由はどうあれ私たちは軍人で、やってる仕事は戦争。せいぜい長生きして人生楽しまなきゃ損よ。時々おいしいものを食べたりドライブしたり、生きてるんだなあって思ったりして」

フェーンは無言のままだった。カリナは彼に笑いかけ、そしてまた空を仰ぐ。

「昔はこの辺り一帯.....もう少し川のほうだったかしら。広ーい農地だったんですって。草が生い茂っていて、地下のプラントなんかよりずっと健康的な。まだ機械文明が発達していなかった頃は戦争をするにも農業を無視してはできなかったから、この土地はずっと豊かに守られていたそうよ？最も、奪い合いの目的の一つがこの場所だったらしいから、守られていたのは当たり前なんだけど」

今ではその場所は巨大な国家の権威だか体面だかのおかげで、ひどく荒らされたまま放置されている。生命の暮らさない大地は広く荒涼としていて、ただ戦争をするために空けられているようなものだ。くすくすと笑いながらカリナが言葉を紡ぐ。傍らで、何も言わずにフェーンはその言葉をただ聞いていた。

その夜ガベルは一人シミュレーターブースでデータとにらめっこの状態だった。三日間ですべてこなせ、と言い渡したソフトを言い渡された側がクリアしたのは予定よりも二日ほど早く、つい先ほどまで彼のすぐそばにある白い箱の中では任官したばかりの少年士官が機械と格闘していた

。まだいるだろうか、と何気にのぞいた時、何か用ですか、と彼は言い、加えて、すべて終わりましたが明日からはどうしたらいいでしょう、と問い返してきた。その答えを保留にさせて、ガベルはとりあえず彼を帰した。一人除け者にされてくさっているかと思っていたのだが、どうやらそういう性分でもないらしい。頼もしいと言うか、恐ろしいと言うか。思いながら洗い始めたそのデータは、しかし、頼もしさは欠片もなく、ただ「嫌な感じ」がひどくした。どうしてこんなデータなんだ、と思わざるを得ない。明日する返事は「もうしばらく一人でゲームしてろ」ぐらいが妥当か。ガベルは思いながらブース内の小型モニタと電算機から離れようと立ち上がった。声は、そこに投げられる。

「アル、何してるの？」

振り返ったそこにカリナを見つけて彼は軽く笑ってみせた。そのままあごをしゃくり、

「見てみるか？あのぼーずのシミュレート」

「フェーン君の？どれどれ」

言いながら、好奇心をむきだしにしてカリナは今までガベルが座っていた椅子に腰掛ける。モニタを前にしてその再生を始めると、途端にその眉はしかめられた。

「.....まだまだ下手クソねえ、やっぱり。慣れてないって言うのかしら」

その動きは無謀で危なっかしい。確実に敵機をヒットしては行くものの、自分の被害をまったく顧みていないようだ。モニタの片隅に表示される破損率稼働率その他の数値はくるくると姿を変え、やがて画面は止められる。真正面に戦闘不能の表示が出て、いわゆるゲームオーバーとなると、

「やっぱり最初はこんなもんよね。それにしても無茶だわ。アル、ちゃんと教えてあげなさいよ？」

「何シロートみたいなこと言ってんだ、お前は」

振り返ってそう言ったカリナに向かって、ガベルは呆れの吐息とともに言葉を吐き出す。そして、

「全部さらって見てみないことには何がどうだかわからんが、多分そいつはお前が一番嫌いなタイプだ」

「そいつ、って.....フェーン君が？彼はいいコよ？どうして？」

その言葉にカリナは眉をしかめる。ガベルは近くの別のモニタの前から椅子を運ぶと、彼女の傍らにそれを置いてどかりと腰を下ろした。カリナは小首を傾げ、直後ため息をついたガベルを不思議そうに見ている。

「その調子そのまま乗せてみる。毎回機体がおじゃんだぞ」

「でもそれって初心者だからでしょ？それにシミュレーターと本物じゃ勝手が全然違うじゃない？対戦ソフトの場合破損率が30%を超えたら強制終了だけど、本物のほうは稼働率が30%以上あったら動くことはできるもの、最低ラインだけど」

「バカ、そういうことじゃねえよ」

あっさりガベルがその言葉を否定する。カリナは更に眉をしかめ、

「バカとは何よ？それに、機体を壊さないように、なんて最初から機にしたりしてた？アルは」

「機体は壊れても仕方がないが、問題は乗ってる人間だ」

モニタをにらんでガベルが言う。カリナは首を傾げ、黙ったまま続く彼の言葉を聞いた。

「自分のことをまったく考えている様子がない」

「……それ、どういうこと？」

「下手すりゃ敵を巻き込んで自爆もしかねないやり方だ、って言ってんだよ」

カリナは眉をしかめる。ガベルは苦笑を漏らしながら、

「ゲームじゃねえってわかってんのか？こいつは。それとも、死にたがりのクチか？」

そう言ってモニタを眺めている。カリナは眉をしかめたまま、

「何それ。彼、自殺するためにここに来たって言うの？」

「さあ、だが当たらずとも遠からず、だろうよ。そういえば、志望動機もまだはっきり聞いてなかったなあ……」

言ってガベルは立ち上がる。カリナはモニタを食い入るように見つめ、それからため息をついて言葉を放つ。

「また死にたがりが一人増えたって訳ね、ここに」

「また増えた？何だそりゃあ」

苦笑いのままガベルが問い返す。振り返って、カリナは言い返した。

「言葉の通りよ。死にたがりさん」

「おいカリナ、俺は別に……」

言い返そうとしてガベルはそれを途中でやめた。座ってこちらをにらみつける彼女と目が合っ、ただ苦笑をもらすばかりだ。

「男ってみんなこんな風なのかしら、それとも、あなたたちが特別なのかしら。そんなに死にたいならとっとと死んだらいいじゃない？わざわざこんなところに入ってこなくても、首を吊るなり手首を切るなり、やり方はいろいろあるでしょうに」

心底困った様子でカリナが言葉を紡ぐ。聞いて、笑ったのはガベルだった。立ち上がった格好のまま、ガベルはそんな彼女を見下ろして、言葉を紡ぐ。

「みんながみんなそういうわけじゃないだろうよ。女がみんなお前みたいじゃないように。どっちかって一とその性格は、女にしとくにやもったいねえし」

「どーゆー意味よ！」

反射的に激昂してカリナが怒鳴り返す。ガベルは笑うと、

「そういうところがだよ。恥も外聞もなく堂々としてるし。いろんな意味で頭が下がる」

「だったらそれ相応の敬意を示してもらいたいモンだわね。そんないい女が間近にいて、どうぞ私をあなたの好きにして、なんて言ってあげてるのに！」

語調が更に陰しくなる。わははとガベルは笑うと、「フラれたくせに何言ってんだよ、今更じゃねえか、なあ？」

「今更じゃないわよ！それに、私は認めないわよ！『帰ってこられる自信がなくなったから』って何？笑わせないでよ！」

いつか聞いた科白をわめくようにカリナが吐き出す。ガベルは苦笑して、

「そういう時もあったな、確かに。今となっては大昔の話だ。けどその時ケリはついたはずだ。いつまでも食い下がるな、みっともない」

「みっともないですって？どっちがよ！この、意気地無し！」

「おう、その通りだ。俺は意気地無しの臆病者の卑怯者だよ。だからどうした？」

カリナの罵詈雑言も、ガベルにとっては大したものでもなかった。慣れっこと言ってしまえばそうだが、それ以前に自分で彼はそれを認めていた。意気地無しの臆病者の卑怯者。初めはそう罵られてひどく傷ついたりもしたが、考えるまでもなく自分はそんな男だ。

「お前もいい年だ、そろそろそのネタで俺をいじめるのもやめてくれ。生き残りたくないわけじゃねえが.....残した、なんて思ったて死んでいけるほど頑丈にもできてない、俺は」

自覚しながらも、ガベルは彼女にとってとどめとも言えるその言葉を口にせずにはいられなかった。カリナは絶句して、そのまま男から視線を反らす。所在なげに俯いた彼女を口元に苦笑みを浮かべて、ガベルはしばらく見つめていた。最後の一言はその女にとってかなり意地の悪いものだ。黙らせるには具合がいいが、その後の気分は実を言えばあまりいいもでもない。いつものように女は眉をしかめて、そして恨めしそうにこちらをにらむことだろう。それともいつかのよう、嫌いだとわめいてこの場を立ち去るだろうか。何気にそんな予測を立てながらガベルは笑う。そして、俯いている彼女に向かって言葉を投げた。

「そこに入ってるデータが今日のフェーンのヤツだ。要るんならもってってかまわんぞ」

何か言われたりされないうちにこの場から逃げようか。思いながらガベルは歩き出す。背後で物音がしたのはその時だった。がたがたと耳障りなその後、振り返るとカリナは立ち上がっていた。そして、

「その手の逃げ口上にはもう慣れてるわ。ついでに、あなたに対してそういう気を使うのももうやめる。この私をなめてかかったらどういう目にあうのか、この後百年かけてでも思い知らせてやるんだから。覚悟なさい！」

普段以上の強気の科白でカリナは笑っている。ガベルは、

「.....怖い女だよ、お前は本当に」

そう言っておびえながらも何故か笑っている自分を不思議に思うのだった。

翌早朝、マシンメイスハンガー内、

「.....スライサー少尉」

「おう、早いな」

駆け込んできたフェーンが見つけたのはその男の姿だった。呆気にとられている彼に、スライサーは笑いかけながら、

「今そこの守衛に聞いた。最近じゃ顔パスだって？本当によくやるよ、お前」

「少尉.....どうしてここに？」

「俺だってパイロットだ、たまにゃこいつらを見に来る。ちょっと早すぎるって言やあ早いかな」

問いかけに答えてスライサーはそこに立つマシンを眺めやる。日課のジョギング途中のフェーン

は呼吸を整えながら、そのスライサーに更に問いかけた。「僕に何か……用でも？」

言葉に、スライサーは振り返る。そしてその顔に罰の悪そうな笑顔を浮かべると、

「……やっぱり勘がいいよ、お前は」

「……何ですか？」

苦笑している男を見てフェーンは問いかける。スライサーは今一度マシンを見上げ、そうやったまま言葉を紡いだ。

「この間は、悪かったな」

「この間……何のことですか？」

「嫌な気分にしただろう？出身がどうの、アイドルがどうの、って。そのことだ」

その言葉にフェーンは目を丸くさせる。スライサーはややムキになったような口調で更に言葉を綴った。「……悪気はなかったんだ。素直に誉めてるつもりだったんだが……話が変な方向に言ったのは俺のせいだからな。謝罪は必要だろう？」

呆気にとられ、フェーンはそう言った男をまじまじと見ていた。スライサーは困ったように笑うと、

「まあ、何だ。同僚だしな。お互い嫌な気分のままで出撃するとあとでまた面倒だ。それに、個人的な問題に他人が踏み込むってのもよくないことだろ？常識的に考えても」

その後もう一度、悪かったな、と彼は付け加えるように言った。フェーンは何も答えず、再びマシンを見上げるようにしてスライサーから目を逸らした。「ところでどうだ？最近は。一人でシミュレーションしてて」

照れ隠しのような仕種にスライサーが微かに笑う。フェーンは軽く眉をしかめたまま、

「別に、どうも。揺れや衝撃には慣れてきた感じはします」

「そうか……じゃ、本物に乗って酔う、なんてこともなさげだな。そいつは良かった」

何がいいものか、思いながらもフェーンは言葉を何も返さない。スライサーはその隣に立ち、マシンを見上げると深く息を吐き出す。

「俺達の職場はいつ何が起こるか本当にわからないところだ。シミュレーターでの訓練なんて、役に立つのかどうかもわからん。だがやらないに越したことはない。死にたくなきゃ人より多くこなして、現場でも努力するほかに方法はないからな」

「死にたくなければ、ですか」

「ああ、死にたくなければ。死にたいヤツはどうか知らないが。俺はそういうのの気が知れないから、できうる限りの努力は一応してる」

微かに、言葉の後でスライサーは笑う。フェーンは黙ったままマシンを見上げ、続く彼の言葉に耳を傾ける。

「何をどうするにも、死んだらおしまいだ。誰も生き返らせてはくれないしな。手足はもげてもすぐ替えが利くが、命ばかりはどうにもならん。気分の悪い話だが、生きてる限り俺達は兵器だ。命のある限り「修理」されて繰り返し使われる。精神異常でも来して使い物にならなくなりゃ話は別だが、生かされる、てなそういうことだ。ま、そういう不毛なサイクルが嫌なら死んだほうが楽だが、俺はそういうふうにはどうしても割り切れない」

言葉の後でスライサーは苦笑する。フェーンは視線を彼に移して、何気なく問いかけてみた。

「じゃあ何故、パイロットに？」

「パイロットになれたのは向いてたからだ。なろうと思ったのは……クサイ理由だ。当ててみる」

答えず、スライサーが笑う。フェーンはクサイ、と言われて思いついたことを素直に口にした。

「国を守るため、ですか？」

「ま、そんなところだ。国、と言うより……故郷だな。政府がどうなろうと知ったことじゃないが、無力で小さいヤツらがその犠牲になるのは忍びないだろう？」

「お子さんでも？」

「残念ながらそういうかわいいのはいねえよ。言ってみれば『高い志』だ。クサイだろ？」

自分でそう言ってスライサーは笑う。そして、

「だから俺はお前みたいなのがこういう場所で重宝されてるのは、本当は嫌なんだ。妬いてるわけじゃないぞ。子供の癖に明るい未来も将来も棒に振らされてるのがとてつもなく。もちろん、軍人として明るい未来を夢見てるヤツもいるだろうが」

言葉の意味はわからないでもない。それにしては明るい顔をしている。思いながらフェーンはいぶかしげにスライサーを観察していた。スライサーは更に笑い、

「他の面子に言わせりゃ、俺はバカなんだとよ。こんな国を守る価値もない、こんな組織で努力する意味もない、そんなふうにするヤツだっているよ。ただ単にマシンに乗ればそれでいいってのもいれば、命とか倫理とかとは関係なく、ここで楽しくやってるのもいる。死ぬのも恐くないや人殺しもいとわない、それが「兵器」としてあるべき姿なんだろうとも思わないでもない。けど俺達は人間だ。ものじゃないし、兵器でもない。みんな理由がほしいんだらうよ、言い渡されて人殺しをすることの」

結局のところみんなどうしようもないバカばかりだよ、と、言葉の後で彼は付け加える。フェーンは黙したまま、そんな風に言って笑う彼をただ見つめていた。

「けど実際、ヌウイの出身でここに来ようってヤツは少ない……だからアイドルにされるんだが。お前、もしかして死に場所でも探してるのか？」

先ほどの自分の言葉、個人的な問題に他人が踏み込むのも云々を忘れたかのようにスライサーが問いかける。フェーンは一瞬息を止めて、それからその場所で苦笑を漏らす。

「さあ……どうでしょう」

スライサーはやれやれ、とでも言いたげに肩をすくめた。そこにいる少年が本当のところを語るはずもないのに。それに、聞いたところで自分に何かができるわけでもない。そういうことを忘れるから、誰かにバカ扱いされるんだったな。思い至って彼は笑った。しかし、笑いながら、

「そんな風なことをもし考えてるんだとしたらガベルの下じゃ一生マシンになんか乗せてもらえないぞ」「何故です？」

言われて、フェーンは眉をしかめた。そちらを見ることなく、笑みを続けたまま、スライサーは問いに答えた。

「あのバカはそういう類のバカだ。死ぬことは恐れてはないが、犬死にするヤツが大嫌いだな。」

無論それは俺も同じだが」

じゃあな、と言ってスライサーは去っていく。どういう意味だ、そう思いながらフェーンは彼を見送り、その場所で小さく舌打ちした。

もうしばらく独り相撲でもしてろ、と言い渡されてフェーンが不服を申し立てたのは、その早朝から三時間ほど後のことだった。隊長、アストル・ガベルは目の前で果敢にも自分を睨みつける彼を見下ろし、その眉をしかめもせずと言った。

「何が不服だ？フェーン」

「指示通りにソフトはクリアしたのに、また同じことをしろと言うんですか？」

「同じソフトを使えと言っただけだ。同じことをして進歩があるか」

睨み付けて低い声で脅すように言っても、フェーンに怯む様子は見られない。ガベルはため息を吐き出しながら、人気のない従来機用のシミュレーターブースを見回し、それから改めて言い放った。

「昨日指示したソフトをクリアしろ。それがお前の仕事だ」

「承服できかねます。三日で、と言われたものが一日で片付いたのに、どうしてまた同じことを？」

「じゃあ明日まで同じものを何通りでもさらってろ。で、どうしてそんなことを言われるのか気が付いたら俺のところへ来い」

「シミュレートの結果はオールクリアだったはずですが？」

「そいつは認めるがな」

結果は「好成績」であることに間違いはなかった。とは言え、それは演算機の中での話であり、結果的に、という枕詞がついて初めて言えることだった。ガベルは溜め息を幾度もつき、そこにいるフェーンを疲れたような目で見やった。

「.....何ですか」

「こいつはゲーセンのゲームじゃねえんだ。動かし方をおベンキョウするオモチャでもない。実戦の訓練をするためのものだ。わかるな？」

フェーンはその問いかけには答えようとしなかった。睨み付けたまま、ガベルの様子をただ見つめている。

「.....わかってねえな、そんなツラしてるようじゃ。しょうがねえ.....今日は俺が相手をしてやろう」

白い箱の前に立つフェーンの目の前でガベルがぐるりと踵を返す。背を向けられて、フェーンはその眉をひどくしかめた。

「ついてこい。お前の何が根本的に間違ってるか、教えてやる」

言い捨てるようにガベルは言った。フェーンは無言で、その背中に続いてシミュレーターブースから出た。

約三時間後、フェーンは医局のベッドの上にいる。訓練と称して私刑まがいのことをしたガベルは大隊長室にて訓告を受け、

「人にいじめるなとか言っというて、自分でいじめてやがる」

「バカヤロ、俺はお前と違う。そういういじめと一緒にすんな」

「リンチはリンチだろ？弁解の余地がどこにあるってんだよ、え？」

にやにやと笑いながら、さも楽しげにグラントは彼にからんでいた。彼の指摘は正しい。さしものガベルも今回ばかりは何も言えない状況だった。傍ら、呆れてものもろくに言わないのはスライサーだった。「で……何をどうしたんだ？今回は」

「そこのバカがやってたなんちゃってスパーリングごっこみたいなもんだよ。オプションに杖を使った」

それでも一応スライサーが問いかけると、あっさりガベルは何をやらかしたかをあっさり吐いた。グラントは目を丸くさせ、

「何だそりゃ？俺がやってたようなことで、何であいつがぼこぼこになってるんだ？」

「だからオマケ付きだっというただろ？たたかれると痛いってことを教えてやったんだよ」

問いかけにも、素直にガベルは答える。目を丸くさせるグラント、対してスライサーは何とも言いがたい疲れた顔でため息をついた。

「ガベル、お前……」

「そんなのだったらシミュレーターで俺がいくらでもやってやったのに……ズリィなー」

おう、そうか、と軽くガベルは言葉を返す。スライサーは内心フェーンに同情しつつ、相変わらず無茶苦茶なその男のしたことにやはり言葉もなかった。「けどそれにしたってボコボコにしたよな。生きてるのか？ちゃんと」

前回と同じ部屋の同じベッドに横たわる少年をちらりと見やってグラントが何気に問いかける。体中あざだらけの上、口元を切って頬を腫らした少年は、包帯でぐるぐる巻にされた格好で天井を眺めていた。幸いと言うべきか否か。いつかのように失神はしていない。だから余計に質が悪いのかも知れなかった。何しろベッドを囲むカーテンの外での会話は、すべて筒抜けなのだ。気分がいいはずがなかった。

「おい、ぼーず、生きてるか？」

その向こうから声とともにグラントがその姿を現す。体を起こすこともままならないまま、フェーンは小さな声で返答した。口が切れているおかげでうまくしゃべることもできない。そんなことを思いながら。

「……はい」

「お前死に損ないだな、完っ壁に」

わはは、と無遠慮にグラントがその場で笑い飛ばす。フェーンは眉をしかめ、その向こうから覗いているガベルに気づき、更にその表情を陰しくさせる。

「どうだ、実際殴られてみて。痛かったか？」

あからさまにバカにする科白に、フェーンは何も答えない。ガベルは鼻先で軽く笑った。おいやめろ、とその向こうから更にスライサーの声がする。かまわず、ガベルは言葉を続ける。

「確かにシミュレーションでのお前の成績は良かったよ、敵をヒットするって点ではな。相手の隙を突いて飛び込むタイミングもばっちりな上、確実に仕留めてその上反応も速い。だがあのやり方で実戦に出れば確実にお前は殺される。マシンごとな。死ぬのが恐くないのはかまわないが、こちとらそう簡単に死んでもらっても困るんだ。何しろお前はアイドルだ。ミッシュ・マッシュのためにうまく戦って生き延びて、五体満足で戻ってもらわなきゃ困るんだよ」

フェーンは何も答えない。ガベルの科白を聞いて、そうだそうだと、ややもするとふざけた口調で言ったのはグランドだった。

「俺達の役目はお前のお守、てのもあるんだからな。言っただろ？ぼーず。お前は宣伝用の目玉商品だってよ？」

「だったら……何なんですか」

もごもごと口内が腫れているおかげでうまくしゃべれないながらもフェーンが言葉を返そうとする。聞き取りにくいのか、あ？とグランドが聞き返す。かまわず、フェーンは言った。

「目玉商品でもアイドルでも……別にかまやしない。それとこれと、一体どういう関係があるんです？僕らは軍人で兵器で、結局使い捨てでしょう？初めての戦闘で死んだって文句は言えないし、生き残ったからって特別うれしいわけじゃない。大体、六十年も戦争している国を守る理由なんか僕にはない。ただ腹が立つだけだ。ラステルには世界最先端の科学力がある？そのおかげで生き延びてる？だったら何なんだ！そんなものが何になるんだ。この国はいつか滅ぼされるんだ。僕だってきっとマシンに乗っていたらいつかあっさり死ぬんだ。あなた達なんかにそんなことをとやかく言われる筋合いはない。僕を守るのが嫌なら放っておけばいいんだ。若くして戦死したら生き残って年を取るよりよっぽど宣伝効果だって高い。それに、僕だってこんな場所で這いつくばって生きていきたくなんかない！」

体を起こし、いつかフェーンは叫んでいた。声は響き渡り、直後室内はしんと静まり返る。はあはあと息を切らせながらフェーンはガベルを睨みつける。ガベルはため息を一つ吐き出し、それから今までになく興奮している少年を見て、問いかけた。

「フェーン・ダグラム。特務機関への志望動機は何だ？」

「あなたには関係ない」

「ヌウイ出身者として引け目でもあったのか？それとも、地下にいたくない別の理由か？」

「あなたには関係ないと言っている、それ以上詮索しないでくれ！」

「言えないような理由でここに上がってきたならそうだと認めろ。隊長命令だ」

「そうやって権威を傘に着る！所詮特別扱いされている「兵器」のくせに！」

「おいフェーンやめろ！」

ガベルとの言い争いの間にスライサーが割って入る。フェーンは燃えるような鋭い瞳でそこにいる三人を睨めつけ、口元を微かに歪めて言った。

「地下でも地上でも、ヌウイ出身者は冷遇される。あなた達にはわからないでしょう、国を失って、追われて、強制的に三ヶ国の建造した地下都市に振り分けられた人達の気持ちなんか。又

ウイはきっとこの先激戦地になるからと言って強制的に移住させられて、家も土地も財産も奪われて……政府はその先の保障も何もしてはくれなかった。僕の両親も兄弟も友人も……何の宛てもなくて知らない場所で生きていかざるを得なかった。戦争が終わったら帰れる、なんて誰かは言っていたけど、終わったところで元に戻るわけじゃない。又ウイの国土もこの辺りと同じに荒れ地になって、僕達はそこに投げ出されるだけなんだ。又ウイ出身者が適正テストを受けない理由を知ってますか？あなた方の政府に情けをかけられたくないからだ。管理もされたくない。けどそのために僕達は非協力的だの批判的だのと言われて協議会だって又ウイを認めてはいない。そのくせ軍事費用は巻き上げようと躍起になっている。それでも兄さんは……ここへ来て何とか、一日も速くこんな不毛な戦争が終わらせられたらいいと願っていたんだ。なのに……」

言葉は途切れる。フェーンは俯いて、その唇を痛みもかまわずきつくかみしめた。端から、唾液の混じった血が滲む。それが落ちるより先に、涙がシャツの上をたたいた。

「パイロットの資格試験には落ちたけど、何かできることがあるならって、ここに上がることを望んでいたのに……」

ガベルがその視線をスライサーに投げる。神妙な面持ちからスライサーは何事かを読み取り、その場からすぐさま立ち去っていった。フェーンは目頭を押さえ、あふれ出す涙をこらえながら小さく肩を震わせた。グランドは所在無さげにガベルを見やり、ガベルはそれを受けて苦笑するとあごで、出ている、と指示を出す。カーテンの中が二人だけになってしばらくしてから、ガベルはため息とともに言葉を紡いだ。

「お前の兄貴は、どうしたんだ？ここにいるのか？」「……知りません。行方不明のまま、戻ってこない」「それでお前は、組織に復讐しようとも思ったのか？」

問いかけの後、フェーンが目から手を離し、顔を上げた。ガベルは笑いもせず、少年をただ見ている。

「……わからない。ただ、あの場所にいたくなかった。地上に出て……兄が選んだことがどんなことなのか、知りたかったのかもしれない」

「そうか」

言葉の直後、ガベルはその手でぼんぼんとフェーンの頭を軽くたたいた。呆然とフェーンはそれを見送り、その様子を見てガベルは軽く笑うと言った。

「立派な動機だ。何故言わなかった？バカにされるとでも思ったか？」

フェーンは何も答えられず、ただ黙ってガベルを見ていた。ガベルは笑いながら、

「だが、もしその兄貴の意志ってヤツを本当に知りたいなら、お前は最後まで生き延びなきゃならん。生きていたくないとか、こんなところは嫌いだとかいう言い分は胸の中に押し込めてでもな。ついでに、まだお前十六だろ？もうちょっと明るい未来を夢見ても、罰は当たらん。せいぜい長生きしろ。で、そんな時にどうしててめえがここで生きてるのか考えてみやがれ」

言い放ち、ガベルは今一度その頭を軽くたたいた。フェーンは流れ始めた鼻を軽くすすって、うなずいてその言葉に答えたのだった。

ラウル・ダグラムという名の受験生が資料から見つかったのはそれから間もなくのことだった。

五年ほど前パイロットの適正試験を受験したが不適性で、それ以外の資料は総本部基地のコンピューターには残っていなかったが。

「ま、声を大きくして言いたいことじゃねーよ、あーゆーの。実際問題、俺達には関係ねーことだし」

「何だシロ、お前にしちゃあ殊勝な物言いだな」

その資料を眺めながら、ガベルは小隊に当てられたミーティングルームで傍らの彼に言葉を返した。シロ・グランドは露骨に眉をしかめると、

「どーゆー意味だ、そりゃあ。この死にたがり男」

「そ、俺は死にたがりだ。お前も似たようなもんだ。そういう人間が言う科白じゃないってことだよ」

笑ってガベルは言葉を返した。グランドはふてくされ、しかし言い返せる文句もなく黙り込む。しばらくガベルはその様子を見て笑っていたが、ややもするとふいに口を開いた。

「グランド、お前明日からフェーンの相手してやれ」

「俺が？なんで？」

「一人にさせとくより当たる生身の人間がいたほうがいいだろう？俺は今日の明日じゃ下手にあいつにちょっかいは出せないし、それに」

「それに？」

言って、ガベルはニヤリと笑う。グランドが目を丸くさせていると、

「納入が早まった。明日新型が来る。人手が足りんから俺とスライサーは組上げの手伝いでもさせられるんだらうよ。アークは別のところで本物を動かす練習をさせてるし」

「って、それって責任転嫁ってゆーんじゃねーの？」

ヒマなのはお前だけだ、とガベルが言うより先にグランドが意見を述べる。そうとも言うかもしれないな、と、笑ってガベルは返し、

「組み上がり次第、フェーンには機体でシミュレーションをさせる。短期間で機体に慣れるにやもってこいだ。ついでに、ソフトの面倒も見させれば慣れるのももっと速いだろ」

「本当に面倒見だけはいいな、お前はよ」

呆れ口調でグランドは返した。もっとも、そうする背景には「時間がない」という現実があることは彼にもよくわかっていたが。

「けど本当に納入速いな。予定じゃ一ヶ月とか……」

しかしそのことだけは腑に落ちない。グランドが問いかけると、ガベルは困ったように嘆息し、笑ってから言った。

「ついさっき大隊長から訓告ついでに言われた。ミネアから大多数が戻ってくる。ついでに、敵もひきずってな」

グランドの表情が強ばる。手元の資料を一応設置されている隊長用の机の上に放り出し、ガベルは更に言った。

「今朝方、面倒くさいことがあったらしい」

「今朝未明、基地内に敵側の作業者が潜入。警備兵が三十人ほど惨殺されて感知システムが一切切られたところへ約三十機の敵マシンが攻撃を開始。ミネア基地はほぼ全壊、マシン・メイス部隊は単独で後退、基地内のスティラ出向者及び調整中のマシンはほぼ全滅、の大打撃だ。幸い二個中隊分の戦力はそれぞれで野営をしていたらしくて無傷だった。最近向こうの出方が不穏だったために、逆に基地の敷地外を警戒していて、そこを突かれた、そうだ」

「マシンに乗ってたパイロット以外ほぼ全滅、かよ……すげーな」

窓から見える荒野にはすでに西日が落ち始めていた。二人きりの室内でガベルが大隊長から直々に聞かされたその状況を説明すると、グランドは心底驚いたとでも言いたげな表情で、思わず感嘆の声さえ漏らした。

「に、しても後手後手だな。相手は小数だろ？やられる前に何とかできなかったのかよ？」

「そこまでの読みまでしてなかったんだろ、参謀本部は。そういうネタが入ってなきゃ下手に大軍団も動かせん。にらみ合いとニアミス程度のことで大々的に予算を使うわけにはいかないだろうしな」

「って……ゲリラ戦法は俺らの十八番だろ？相手にやられてどーするよ、っての」

「まったくだ」

あきれかえったグランドの言葉にガベルが笑ってそう返す。

「待機中だった第三、第四中隊とドゥーローにつめてた大隊が一個、戻ってくる連中と合流した地点でキャンプを張って、とりあえずそこを第二防衛線にするそうだ。予定ではミネアから南に八十キロの地点、何にもない砂漠のど真中らしい。もし第二防衛線付近まで向こうが侵攻してこない場合は、様子を見てもう一度ミネアに戻る。仮に占拠されてた場合はそこから総力で一気にミネアを取り戻す。壊滅させた基地なんか欲しがるヤツはいないと思うけどな」

聞いて、あーあ、と、グランドはあきれの声を漏らす。言っているだけなら簡単なことだが、実際それをやるとなると、面倒を通り超えて至難の業であることは言うまでもない。

「で？どうするんだ？俺達」

思いながらもとりあえず、グランドはガベルに問いを投げた。ガベル、

「全てのパーツがそろっていないから五機は無理だが何とか二機だけなら組み上げられるらしい。運んで戻ったら、俺達三人はネイヴで、アークとフェーンはメルドラで出る」

「やばすぎだな」

言いながらも、グランドの顔はけろっとしていた。ガベルは軽く笑い返し、

「何しろ時間がない上に兵力も減ってる。ミネアでやられた連中は多分スティラの施療施設に直行で、壊されたマシンその他は放置されっぱなしだろ？一機盗まれりゃデータは漏れたい放題だ。近年希に見るやばさ加減だよ」

「けどそーゆー話になるとミヨーにうれしいんだよな、俺達は」

言って、グランドがその口元に笑みを浮かべた。バカ言え、と、おどけた口調でガベルはそんな彼に言い返す。

「そういうことを俺やお前が口に出して言ったらシャレにならんだろうが」

「とか何とか言って、一番楽しんでるタマだろ？お前が」

「仕事を楽しくやって何が悪い？俺達の本分は戦争で、人殺し、だぜ？」

「ま……そうだな」

顔を見合わせ。いい歳をした男達はその場所で二人してほくそえむ。そして、

「不謹慎だよなー、まったく不謹慎だ。あのぼーずにばれたら何言われるかわからんくらいに不謹慎だ」

グランドが、言葉の内容の割にやけに楽しげに言う。ガベルは笑い飛ばし、

「何も言わないだろうよ、あいつは。何しろ俺達を「兵器」だって言い切ったんだ、自覚もしてるしな」

「なるほど」

その言葉に言い返すと、グランドも同じく声をあげて笑った。

そして基地内はその日からにわかに慌ただしさを増した。待機中だった部隊は装備を固め、ミネアに向け、あるいはドゥーローやスティラ方面へと次々に出て行く。最中、残っているのは基地の警備担当部隊とスティラ軍から回されているマシンを装備しない、その後方支援のための補給部隊、そして新型をこの場で組み上げることとなったたった五人の遊撃部隊、メルドラ隊のみである。

『パネルテスト開始、一番から四番、テスト』

「テスト開始オーケー。一番から四番異常なし……左右足元指示パネル呼び出しテスト開始……」

それから四日後、ドゥーローから届いた新型マシン・メイス「メルドラ」が二台シル・ソレア基地内のハンガーで組み上がった。搭乗者アーク・レクスライ及びフェーン・ダグラムはそれと同時に訓練を中止し、機体の調整を開始した。新型新型と連呼してもそのコクピットは従来のものと大差はない。もっとも、フェーンにしてみれば生まれて初めての本物への搭乗で、そんな言葉は慰めにさえならなかった。マシン・メイス「メルドラ」。現在最も使われている汎用機「ネイヴ」の約1, 7倍のパワーと二倍以上の情報処理能力を持つ、攻撃型マシン・メイス。ベースフォーマットと呼ばれる基本戦闘補助プログラムにパイロット、アストル・ガベルの戦闘データを使用し、初起動の際のパイロットの負担を軽減している。だから初乗りでも特別気を使わなくともバランスくらいは取れる、と言うのが製作者の弁だった。それが初心者である彼を慰めたり安堵させたりするかはさておき、ではあったが。

「マニピレーター呼び出しテスト開始……」

新品のコクピットはフェーンの体の大きさにあわせて調整された。各種ギア、ハンドル、レバー、ペダルもオーダーメイドの洋服を更に体にフィットさせるために直すが如く、細かくセッティングされている。シミュレーターのシートよりも何もかもが使いやすく、また力も入りやすい。ピット内の調整とテストが終わったらこの機体を使ってのシミュレーションをして、とにかく慣れる、と言うのが回りの意見だった。もちろんフェーンにもそれはわかっている。マシンは兵器であり、そして唯一自分を守る、鎧のようなものだ。しかし鎧も、着ているだけでは役には立たない。自分にあった大きさと防御力とを持ち、動きやすいものであるのは最低の条件だ。

『ダグラム少尉、マニピレーターテスト開始……ダグラム少尉？』

外のオペレーターからスピーカー越しに呼ばれ、あわててフェーンはマイクに向かって言葉を返す。

「マニピレーターテスト、左右から呼び出し……呼び出し完了。次、いきます」

ぼんやり何かを考えてられるヒマは、もうどこにもない。上からの指示では、明日にでもリウヌ国内の第二ミネアと呼ばれる仮設キャンプに向かってくれと言われているのだ。機体は上がったばかりでろくにテストもできない状態ではそれも不可能だと、流石にそこまでのことは言い渡されてはいなかったが、それでも、急いでいることに違いはない。

「カメラテスト開始……目標は、と……」

次々にコクピット内のテストが終わっていく。その内壁はすべてモニタになっていて、外の様子をほとんどその内面に映していた。表面にはテスト状況とクリア結果が文字列で表示され、その一角にカメラアイで拡大したものが映し出されるスペースが、ぽっかり開けられている。何か適当なものはないかと辺りを見回し、フェーンはズームカメラをそちらに向ける。映っているのはガベルとカリナだ。言い争いでもしているかのような険しい顔つきで、何やら話し込んでいる。

『ダグラム少尉、ノゾキか？』

テストを手伝ってくれているメカニックの声がする。かまわず、フェーンは彼に問いかけた。

「音を拾ってみてもいいですか？テストついでに」

『馬に蹴られて死んでも知らないぞ』

「……何ですか？それ」

スピーカー越しの声がやけに楽しげに笑っていた。止められてはいないと勝手に判断し、フェーンはその辺りの音を拾い始める。話している内容は案の定マシンのことだった。冷静なガベルに対してカリナはややもするとヒステリックにまくしたてている。

『何だ……大したこと話してないな。テストはオーケーだ』

ピット内に響く二人の会話を聞きながらフェーンはインカムのマイクに向かって何気なく問いかけた。

「あの二人って……仲が良いんですか？」

『は？何だダグラム少尉、知らないのか？』

「知らないって……何をですか？」

カメラテストも何事もなく終了する。音を拾うのをやめてズームを切り、しながらフェーンは笑うメカニックの声に逆に問い返した。スピーカーの向こうで何やら数人の話し声が聞こえる。そして、

『ま、知らないなら知らないで……そのうちわかるだろうから、俺は余計なことは言わないぞ』

「………何です？それ。本当に」

何事かわからないまま、フェーンは眉をしかめた。

あわただしく、時間は過ぎる。メルドラの組み上がりから四日後、全ての調整と一通りの訓練がとりあえず終了するなり、アストル・ガベル以下五名は翌日の出発を命じられ、その日もあわた

だしくその準備に追われることとなった。シル・ソレアから破壊されたミネア前線基地までマシンのホバーを利用しての移動でかかる時間は丸一日。途中の仮設キャンプまでは約半日、夜明けに出れば昼には着くはずだ、と言うのはその説明の最中に言われたことだった。今のところ特別に作戦はないが、あちらに着いたら仮設キャンプの司令部と連携をとって動いてくれ、と総本部司令は彼らに言い渡し、同行する補給部隊やその他の連絡事項などの説明がその後続いた。が、何もかもが初めてのフェーンにはまるで頭に入らない。しかしややもするとそのミーティングも終わり、各員解散の声とともに集められていた人員も、まばらに散っていく。

「隊長、私たちはどうするんですか？」

最中、散り散りに歩き出すガベルを呼び止めたのはアークだった。あふあふとガベルはあくびをしながら、緊張している新人二人に向かって言葉を放つ。「明日は速いぞ、寝坊はするな。じっくりゆっくり休んで備えろ。以上だ」

「そ……それだけですか？」

思わず、傍らにいたフェーンが問い返す。笑いもせず、けろっとした顔で、

「ああ、それだけだ。どうせ明日は移動だけだろ？いざとなったらそんな時はそんな時だ。お前らは逃げることだけ考えてればいい。以上」

言ってガベルはさっさとそこから歩き出していく、見送って、フェーンはその場に立ち尽くした。背後でげらげらと笑う声がするの気付いたのはその時だ。振り向かなくても誰がいるのかは想像できたが、わざわざそちらに向き直り、フェーンは彼に問いかける。

「何がおかしいんですか？グランド少尉」

「そうですよ、明日出発なのに。いいんですか？」

傍らのアークもやや憤っている。グランド、笑いながら、

「いいも何も、あの場合ガベルが他に何か言うこともないだろ？なァ？スライサー」

「俺はその件に関してはコメントを控える」

話を振られたスライサーはそう言ってかたくなに関与を拒む。仕方なさにグランドは笑うのをやめ、しかしその表情はやけに楽しそうなままで、二人に向かって言葉を放った。

「とりあえず二人とも、今晚はじっくり休め。それとも、貫徹でシミュレーションでもするか？」

「うおーい、ぼーず、いるかァ？」

日が暮れる。先程のガベルの指示に一言もなかったフェーンはその時、

「……って、なんでお前がここにいんだ？スライサー」

呼んでもいない来客の接待をしていた。と言っても、飲みものを支度するくらいのもものだったが。二人目の客、グランドは何やらプラスチックのディスクケースを抱えて先客、スライサーがそこにいるのを見、目を丸くさせて見ている。

「別に。ちょっとな」

「そう言うグランド少尉こそ何か用ですか？」

困った顔で溜め息をついているスライサーを横目に、フェーンが問いかける。グランドは我に

返り、

「用も何も。明日発出撃だろ？景気付けにおもしろいモンでも見せてやろうかと思って。フェーン、テレビはどこだ、テレビは。それとプレーヤーと」

そう言ってずかずかとフェーンの部屋に乱入する。おもしろいものって何だろう、思いながらフェーンは小首を傾げ、やけに機嫌のいいグランドを見てスライサーはまた溜め息をついた。

「どこかに安眠できる場所はないのか……」

「何だ？ガティ。寝不足か？ここんこハードスケジュールだったもんな。お前ももう若くないんだから、とっとと部屋にかえって休め、な？」

かちかちとやかましく物音を立てながらグランドがそう促す。ため息混じりに、

「てめえの部屋でそれができんから避難してきたんだ！お前こそ帰れ！」

「何だそりゃ。煙草の不始末でボヤでも出したか？」

最後には叫びに変わっていた彼の声色にもまるでかまわず、なおもグランドは問いかける。フェーンは何故かテレビと映像ディスクのプレーヤーをセットさせられながら、そんな二人の様子を眺めていた。

「そういうバカをやるのはお前一人で十分だ。まったく……何だって俺があいつの隣組になんか……」

ブツブツと、独言のようにスライサーが愚痴をこぼし始める。グランドが目を丸くさせてフェーンを見ると、フェーンは問われる前に答えた。

「何でも隣が騒がしくて、ゆっくり休めないんだそうです」

「隣？ガベルの部屋が、か？」

言いながら再びグランドはスライサーへと振り返る。どうなんだ、と言いたげなその視線に、ため息だけでスライサーが返す。ニヤリとグランドが笑ったのはその時だった。何事かとフェーンが思うより先に、スライサーはため息をつきながら言い放つ。

「シロ、ちょっかい出すなよ？余計にややこしくなる」

「ちょっかい？俺あそんな無粋なマネはしねーぞ？ちょっと音だけ聞きに……」

「同じことだ、止めとけ。カリナに半殺しにされたいか？」

「うっ……しかしそう言われると、よけーに気になるッ」

いつも通りのグランドの言葉に再びスライサーはため息をつく。フェーンは首を傾げたまま、

「……何なんですか、一体。その、ガベル隊長とエプスタイン伍長、って」

問いかけに、目を剥いて振り返ったのはグランドだった。ため息をまたついて、スライサーは言った。

「あの二人、結婚寸前まで言ったんだ、一時期な」

「あーっ、お前！俺の科白とるなよな！それにそんないいもんじゃねーぞ？男と女ってーのは！」

「バカ言え、お前がややこしくしてるんだ、勝手に」

二人のやりとりにフェーンはただ目を丸くさせているだけだった。そして、

「ああ……それで今日メカニックがあんなこと……でもどうしてしてないんですか？結婚」

問いかけると、目の前の大人はそろって目を丸くさせた。そして、

「って……言われても、なあ……」

「お前、大人ぶってるけど本当にガキだなー」

スライサーは考え込み、感心したようなからかうような態度でグランドは笑う。そのままグランドはフェーンの頭を軽くたたき、

「ま、そういうのは大人になったらいくらでもわかるようになる。そのために今日は俺様がおとつときのディスクを見せてやろう！」

「おとつときのディスク？」

わしゃわしゃとそのまま髪を力任せにかかれて、フェーンは眉をしかめた。

約二時間後、フェーンは一人ハンガーをうろついていた。自分の部屋では今頃いい歳をした大人がアルコールをとりながら、何やら見づらい映像を前にケンケンガクガクやっているに違いないことだろう。出撃前夜だと言うのに。思いながらフェーンはため息をつく。いや、だからか。明日は死にに行くのだ、と思ったら、きっと今夜は一睡もできないことだろう。だから普段通りに、もしくはそれよりもややわがままに、時間を過ごそうとしているのかも知れない。そう思うとフェーンは彼らの行動にも納得できた。もっとも、スライサーは自室で休めないと悟って移動してきたのだったが。何だかおかしいや。思いながらフェーンはその場所で一人笑い、それからその場所に置かれている巨大人型兵器に目をやった。マシン・メイス「メルドラ」。明日自分が乗ってここを出ていくそれは、全ての準備を終えてその場所にたたずんでいた。ハンガー内にはすでに人気はなく、稼動していないマシンは文字通り微かな音さえ立てず、ただ人形のようにその場所に立っている。まさか本当に、こんな時が来るとは思わなかった。思いながらフェーンは息を飲む。自分がこれに乗って、この機械の塊を操縦して、戦争に参加するなんて。思うと緊張のためかどくどくと心臓が強く鳴った。胸と、手足の指先が微かに痛む。戦争だ戦闘だと口にはしながら、一度もその経験が彼にはない。怖じ気づくのも緊張するのも当然のことだった。息を何度も飲み込んで、フェーンはただじっと兵器を見上げる。

「フェーン？」

突然声がして、驚きも露にフェーンは振り返った。緊張していたためかその驚き方は普段にも増していた。呼びかけた声の主はそれに逆に驚かされたらしい。不思議そうな目で、しかし笑って彼は言った。

「何やってんだ？こんなとこで」

「隊長……あなたこそ、何を？」

奇妙に高鳴る心音を聞きながら、フェーンは微かに震える声でその場所にいる彼に問いかけた。ガベルはニヤリと笑うと、

「ちょっと逃げてるんだ。こわーいお姉様から」

おどけた口調で彼は言う。フェーンはその言葉に首を傾げ、

「お姉様……エプスタイン伍長、ですか？」

何気なく先程仕入れた情報を思い出し、その名を口にする。ガベルは笑うと、

「お、お前勘がいいな？けどそんなふうにしてたのか？」

「いえ、そういうわけじゃ……」

逆に問い返され、しかし別に理由があるとも言えず、フェーンは言葉を濁らせた。ふうん、そうか、とおどけた口調で言ってガベルは笑う。そして、

「何だ、眠れないのか？今日はきちんと休んでおけよ？明日は丸一日、ひたすら移動だ。その後もまともなベッドで当分眠れやしないんだ……お前はまだ若いからいいかもしれんがな」

言いながらガベルはその視線をマシンに向けた。フェーンはそんな彼をちらりと見、それから同じようにその機体を見上げる。

「元は土木作業ロボットたあ、思えねえよな」

「……はい？」

独り言めいたその呟きにフェーンが振り返る。苦い笑みを微かに漏らしながら、ガベルはその場所でマシンを見上げたまま、言葉を続けた。

「そいつが妙な拍子に戦闘に使われて……果てがこのサイズだ。戦争の仕方も大昔に比べてずいぶん変わった。戦争ってものの自体には、大して差はないのかも知れんがな」

フェーンは無言でその横顔を見つめている。視線に気付いたのか、ガベルは目だけを彼に向けた。

「どうかしたか？フェーン」

「……え？あ、いや……」

唐突に問いかけられてフェーンは何故か困惑する。ガベルはニヤリと笑い、

「明日出るとなったらやっぱり落ち着かないのか？流石の超スーパーエリートも」

その言葉にフェーンは再び黙り込む。やれやれ、ジョークも通じなさげだ。思いガベルは肩をすくめた。フェーンはしばらくそのまま俯いて黙り込んでいたが、ややもするともそもそと口を動かし、

「……エプスタイン伍長と、何かあったんですか？」「何だ、いきなり」

「いやその……スライサー少尉が、自分の部屋で休めないからって、僕のところに……」

言い訳に聞こえる、思いながらもフェーンがそう切り出すとガベルはその場で困ったように笑った。

「そうかそうか、そいつは悪いことしたな。あいつもそろそろ諦めて自分の部屋に戻ってる頃だろう。スライサーに言ってやってくれ。もう平気だって……」

「いや……それが、その……」

言い出しにくそうに、フェーンはことのあらましを手短かにガベルに説明する。別にスライサー一人くらいなら構わないのだが、云々。それを聞き終えるとガベルはその場所で笑い始めた。真赤な顔になって、フェーンはそんな彼を睨み付け、

「笑い事じゃありませんよ、僕は迷惑してるんです」

「ふーん、メイワクねえ。お前も、十やそこらの子供じゃあるまいし。見といて損はないぞ？あいつのコレクションは」

「隊長は見たんですか？じゃあ」

「見たっつーよりも無理矢理見せられた。あいつも本当に変わらんヤツだ。現場にまで『特選編集ディスク』とか言って持ち込んでるし」

呆れてものも言えないと言うべきか否か。フェーンに言葉はなかった。よほどおかしいらしい。ガベルは腹を抱えて笑い飛ばし、納まるとその呼吸を整える。フェーンは眉をしかめ、けれど実際緊張していた自分の気持ちもほぐれていることに気付いて、奇妙な気分になった。その様子を見て、またガベルが笑う。

「そういうヤツなんだよ、あの男は。あんまり気にするな、胃が痛くなるぞ、スライサーみたいに」

言ってガベルはくるりと踵を返す。その背中に、フェーンは反射的に声を投げた。

「隊長……どこへ？」

「寝床だ。大人しく休むことにするよ。お前もいい歳こいたバカ二人いつまでも甘やかしてないでさっさと休め」

ひらひらと、背中でガベルは手を振る。その、いつも通りのどこかひょうひょうとした様子を見ながら、今一度フェーンはその声を投げた。

「隊長」

「何だ？」

歩き始めていた足を止めて、ガベルが振り返る。フェーンはこちらを向いた顔に、ぶつけるようにその疑問を投げつけた。

「隊長はどうして……パイロットに？」

「さあな。口が裂けても『国を守りたい』なんって言わねえが……理由なんて忘れちゃったよ」
じゃ、お休み。そう言い残してガベルは立ち去っていく。無言でフェーンはそれを見送り、しばしそのまま立ち尽くした。国を守るためではないのなら、どうしてだろう。自分も含めて。そんなことを何気なく思いながら。

翌早朝、補給部隊とマシン・メイス「メルドラ」隊は予定通りシル・ソレアを出発した。大河川メリノをはさんだ東側は、かつて全てがラビスデン及びその属国の支配地であった。第三席国リウヌと前線であるミネア地方はシル・ソレアから見てその河川の東側に位置し、その地形も風土もまるで別世界の様相を呈していた。広がる広大な砂州が果てしなく続き、河川に沿って潤った周囲には草原地帯が広がる。途中には廃虚と化して間もない瓦礫の都市がいくつもあり、その戦争が現実であることを言葉もなく告げている。

リウヌがラステルに属して四十年あまり。それまでラビスデンで最も西の国だったその場所は、一転して彼らにとっても前線となった。彼らがラステルに与した理由はさまざまだが、一つにはラビスデン国内で起こったクーデターの結果攻め滅ぼされそうになっていたところを、ラステルの連合軍の協力でそれだけは免れた、というものもあった。国同志のやりとりというものはいつの世にも複雑奇怪だ。以来ラビスデン側に蹂躪され続けていると言うのに、当のリウヌと敵国とのつながりを示唆する声はいまだに消えていない。ミネア地方はその中で最も地理的に敵国に近い場所である。開墾したなら史上かつてない大規模な農作地帯になるだろうと言われるそこは、しかし今現在はただひたすら、巨大人型兵器とその他が衝突し合うだけの不毛な土地に成り下がっている。一時ラステルはそのリウヌと引き換えに敵側に停戦交渉を申し込もうとしていた時期があったが、そうした対象にできるほど、その土地は豊かで、そして気候も穏やかだった。結局それはなされず、今では上層部は国境を更に東へ進めようと躍起になっているほどだ。従来の目的とはややずれてはいるが。

ラステルとは、大陸の東側諸国に伝わる神話に登場する女神の名だ。大地の女神であるエレシスが創造と豊穡を司り、対してラステルは混乱と破壊を司るとも、運命の紐を編む女とも言われている。最初にその名を提案した人間は、国を造り出す、編み上げると言う意味でその名を使ったのだろうが、今では混乱と破壊を司る女神さながらに、彼らは戦争という名の破壊活動が続いている。もし国が別の名、例えば自由の女神の名を冠していたなら、その名の通り彼らは自由をたやすく獲得し、今よりももっと束縛されずに生きられたらどうか。それまで見てきた景色とはまるで違っている河川流域地帯を眺めながら、フェーンは一人マシンの中でそんなことを考えた。例えば河川の名にもされた水を司る女神メリノの名であったなら、天空の神の名を冠していたのなら。しかし思ってもそれは仕方のないことだ。ここに国が生まれたなら、いや、人間が国家を作ったなら、争いは耐えることなく続くに違いない。どれだけ学んで思い知らされて、それを未来に伝えても、彼らは争い続けるのだ。それが人間という名の動物の、最も愚かな性癖なのだから。

『フェーン、大丈夫か？』

コクピット内のスピーカーからそんな声が流れてくる。流れる景色と現在位置を示す地図が表示されたパネルモニタを確認しながら、フェーンはインカムのマイクに向かって答えた。

「大丈夫です。このまま前進します」

「あー、ケツがいてー……やっぱマシンで一気に入にこの距離の移動ってな、しんどいなー」

「何言ってる、いつもの三分の二だぞ？」

「それはそれ、これはこれ……あー腰もいてー……」

「ぐだぐだ言っていないでシートかけろ。手伝ってやるから」

仮設キャンプはリウヌ国内、ミネア前線基地施設から南西に下がった荒野のど真中に設置、と言うべきか。マシン、補給用トランスポーター、そして仮設のハンガーとテントをとにかく一カ所に集めて、という形でそこに一応存在した。それまでの基地設備と比べれば貧弱としか言いようのないその場所に、現在機関内の三分の一強の戦力が集まっている。メルドラ隊と同行の補給部隊がその仮設キャンプに到着したのは太陽が西に沈む直前のことだった。すでに辺りは薄暗く、あちらこちらで照明の準備やそれに対する騒ぎが起こっていた。光を遮断できるものがここにはろくにない。レーダー施設も警報装置もないのだ。荒野、平地で夜間目立つのを避けるに越したことはないが、キャンプ内はそれにしても奇妙な緊張に包まれていた。

「ミョーな感じだな、オイ。何かあったんじゃないのか？」

野外に置くことになったマシンを岩に偽装するため土色のシートを広げながら、グラントがそれを手伝うスライサーに問いかける。辺りを観察しながら、

「どうだろう……何かあればガベルが言うだろう？ほら、とっとと働け」

「そーだな……あ、ガベルだ」

噂をすれば何とやら、か。視線の先に彼を見つけてグラントがその名を口にする。彼の見ているその先を見ようとスライサーは振り返り、ちょうど目が合っただけでガベルの名を呼ぶ。

「ガベル、今……」

「お、ご苦労さん。そいつが終わったらアークの機体見てやってくれや。丸一日の移動でずいぶん参ってるからな」

しかしガベルは言い残すとその真横を素通りして行く。目で追って、

「って……どこ行くんだよ？」

「もう一人手のかかるのがいただろう？そいつを見に行くんだ。本物に乗って酔ってるかもしれんだろ」

グラントの問いかけにガベルは答えてそのまま歩き去る。見送り、

「こりゃ自分でいろいろ聞いて回ってきたほうが速いんじゃないかねーの？隊長に聞くより」

「みたいだな」

グラントの言葉に、納得したようにスライサーは返す。ガベルはそのまま、機体から下りたばかりのフェーンとそのマシンに歩み寄り、その背中に声を投げた。

「フェーン、無事か？」

「ええ……大丈夫です」

マシンを座らせる格好でその場所に置いて、シートをかけながらフェーンは答えた。野戦用のマントもまだ真新しい新人は、そうは言うもののいささか疲れた顔をしている。広げるシートの端を捕まえて、ガベルはそのとなりで作業を手伝い始めた。

「しばらくここで不自由なテント生活だ。メカニックの手も足りんから自分の乗る機体の世話も

全部しなくちゃならん。生半可の『大丈夫』はやめておけ。どのみち、死んでなきゃ俺達は働かされるが」

厳しい語調にフェーンは微かに眉をしかめる。ガベルはそれを見つけるとニヤリと笑い、「なんてな。ま、甘えないだけお前はできてるよ。どっかのバカは腰が痛いだのケツが痛いだの……実際半日座ってりゃケツも痛くなるうってモンだが」

堪え性がないんだろうな、言ってケケケと声を立ててガベルが笑う。フェーンはそれを見、「ガベル隊長は平気なんですか？」

「慣れてるからな、こういうのは。普通はミネアに行くのでも流石に丸一日乗り詰めってのはやらないが……いろんなところで。お前も早く慣れろ。このでかいのに振り回されないように」

問いかけにさらりと言ってきぱきとガベルはマシンをシートにかけていく。紐とペグで固定し、し終わる頃日はすっかり沈んでぽつぽつと周囲に明かりか点り始めた。仮設ハンガーでは全てのしきりを閉ざして目張りをして、その光が漏れないように注意を払っているらしい。微かに漏れているそれを見ながら、やれやれ、とガベルは息を着いた。

「初稼働なんだ、こいつも本当はしっかり見てやった方がいいんだがな。えらい騒ぎだ、ハンガーは」

「何か、あったんですか？」

「さあ。まだ何も聞いちゃいねえが……拾ってきたマシンのつぎはぎでもしてるんじゃないのか？」

「つぎはぎ？」

言葉にフェーンは首を傾げる。ガベルは笑って、

「使える部品をばらして繋ぎ合わせるんだよ、文字通り。資源のリサイクルってヤツだな」のんきな口調でそう説明をする。そして、

「ま、今日はこのまま何にも沙汰はないだろ。今度はテントの設営だ。行くぞ」

言ってガベルはその場から歩き出す。小走りに、フェーンはその後に続き、歩き去る途中はたはたと風になびいたシートを振り返ってちらりと見やった。

テントの設営、夕食の配給、夜間の見張りの振り分け。あわただしく時間は過ぎていく。メルドラ隊全員が頭を突き合わせてしていたその打ち合わせの最中ガベルが不意に姿を消したのは、辺りに闇が下りた頃で、戻ったのはすっかり夜も更けた夜半のことだった。

「お、戻ったか。遅かったな？」

野営用の椅子を置いてそこに座っていたのはスライサーだった。背後にはやや大きめのテントと小型のテントが一基ずつ。背中越しに見、スライサーは言った。

「ちっこい方にアークが寝てる。言われた通りに俺は見張りだ」

「グラントは？」

「マシンのプレーヤーでディスク鑑賞だとさ」

肩をすくめてスライサーが返す。ガベルは笑うと、

「ならばばらく俺が見張っててやろう。お前も休め」

「その前に、何の話を聞いてきたのか、聞かせてくれるよな？」

言ってスライサーは立ち上がる。ガベルは彼と椅子とを交互に見て、仕方ないと言いたげに肩をすくめると、どっかりとその椅子に腰掛けた。

「明日の朝にしとけ、小心者。眠れなくなっても知らんぞ？」

「そこまで敵が来てるかもしれん事実を隠されてても、俺は小心者なんでな。眠れない」

皮肉めいた物言いに皮肉めいた口調で返されてガベルは苦笑を見らす。スライサーは傍らで腕組みして、彼の言葉を黙って待った。

「ミネアの急襲に識別不可能な敵マシンと思しき機体があったそうだ。早朝であの辺りには霧も出てた。基地が半壊の原因は大半その霧らしいが、ご丁寧なことにあいつらは対人用の警備はめった刺しの上、システムも破壊してくれてただろ？おかげでデータもろくに残ってない。だから予測だが、今までとは規模も質も違う軍備が、俺達を一気につぶそうとしてるらしい」

「規模も質も……本国軍が出てきたのか？」

「さあ。そこまでの説明はなかった。生き残ってるマシンのデータには見たことのない敵機がバッチリ映ってた、とさ。で、続け様に来るかどうかはわからんが夜襲にとにかく気をつけろ、ってなお達示があった」

「……それで？」

スライサーはその眉間にしわを寄せて、おどけた口調のガベルに更に問いかける。ガベルは苦笑を漏らし、

「下手すりゃ、俺達が偵察に出されるみたいだぜ？来たばっかりでダメージも少ないし、疲労度も軽いつて言ったら軽いからな。最悪、粉かけて戻ってこい、か？」

「楽しそうだな……いつものように」

「バカ言え、楽しかねえよ、別に」

鼻先で笑いながらガベルが返す。スライサーは神妙な面持ちで、聞き終わると大きく息を吐き出した。そして、

「勝算はどう見てるんだ？司令部のヤツらは」

「さてね。三十機だけなら有りと踏んでるだろうよ。けどそれが先触れだった日にゃ、こんなところでうろついてるよりシル・ソレアに全軍集めた方が早いんじゃないかって話しも出てる。前線と補給の一本化……後がねえが」

言ってガベルは微かに笑った。そして、

「とりあえず今夜はヒマだ。と言うより、俺達には体力その他を温存しといてほしいんだよ、みんな。いざとなったら押しつけて逃げるためにも。だから寝とけ、お前は。昨日もろくに休めてないんだろ？俺のせいで」

にやにやとガベルが笑う。スライサーは真顔で、

「全くだ、俺は休むぞ」

言い残し、テントに入っていく。見送ってガベルは笑い、そして一人になるとその場で笑うのをやめた。現状は実にシビアだ。キャンプ内はピリピリと緊張で張りつめていて、あちこちで尋常ならざる警備が敷かれている。のんきに構えているのは自分達くらいのものかも知れない。闇の

中稼動しているマシンもあれば、仮設ハンガーではその修理が引切りなしに続けられている。隊長クラスの間を集めたい会議と呼ぶには規模の大きすぎるその会合で、ちらりとだが昼間衝突があったことも聞いた。そのために予定していたよりキャンプの位置もミネアに寄りすぎている、とも。状況は芳しくない。近いうちに交戦するのは目に見えている、そんな気もする。

「……下っ端は辛えなあ」

空を仰ぐようにしてガベルは苦笑いとともに呟いた。シル・ソレアに比べてこの辺りの星は、わずかだが湿気を帯びて柔らかに見える。大した距離を移動したわけでもないのに、気のせいだろうか。それとも。思いながらガベルはまたかすかに笑った。そして、椅子から立ち上がるとその場で大きく伸びをする。

「おう、意気地無し男。戻ってきたか」

声はちょうどその時投げられた。ガベルは振り返り、やってくる声の主、シロ・グランドを見て鼻で軽く笑う。

「誰が意気地無しだ、誰が」

「お前だお前。いいよなー、でもいいよなー、アルは。いつまでたっても煮え切らない態度でも、カリナはちゃんとしてくれるんだもんな。俺なんか一人で寂しいったら……」

「バカなこと言っていないで戻ったならとっとと寝ろ。フェーンやガティが添い寝してくれるぞ？」

「バカヤロー、それが嫌でわざわざネイヴに行ってたんだよ！なーにが『特別警護』だ！俺とアークを隔離しやがって！」

キーツかみつく勢いでグランドがわめく。軽くガベルは笑い飛ばし、

「当然だ。日頃の素行が悪いついでにあっちにやその気はねーってんだからな。バカ言っていないでとっとと休め。何なら二、三発殴ってやろうか？」

「遠慮しとくよ！あーあー、もー、理解ある上司がいて、本当に俺って幸せだよな！クソ！」

吐き散らすように言ってグランドはテントに入っていく。その後も中から声が聞こえて、ガベルは一人その場所で笑う。どうやら横になる場所がないらしい。しばらく何やらもめている様な会話が中から聞こえ、やがて、

「……自分勝手な人だな、本当に」

言いながら、寝惚け眼でフェーンが姿を現した。不機嫌を露にしたままの彼はブツブツと文句を言いながら目を上げ、そこにガベルの姿を見つけるといまいましがげに言った。

「隊長……もう一基テント張ってもらえませんか？」

「物資不足だ、我慢しろ。それともそっちの狭い方で休むか？」

冗談めかしてガベルは言う。フェーンは寝惚けているらしかったが、しばし考え込み、それから

「僕はグランド少尉とは違います。そういう下世話なことを言わないでください」

「何言ってる、満更でもないくせに」

笑うガベルを、再び沈黙してフェーンは見つめる。

「……何が、です？」

「アークだ、アーク。向こうも気に入ってるみたいだし？」

五秒ほどの沈黙の後、フェーンの顔が突然赤く染まった。瞳がぱっちり開き、直後、

「な、な、ななな、何言ってるんですか！ぼ、僕はそんな！」

「目が覚めたか？ぼーず」

叫んだフェーンを見てガベルは笑う。にやついているその顔を見てフェーンはからかわれていることを悟り、

「……はい、目が覚めました」

それ以上の醜態をさらせば嫌がらせはエスカレートするだけだ。そう言ってその場所で所在なさに乱れた髪をかいた。そして、

「隊長……そう言えばどこに行ってたんですか？」

「ん？ああ……ちょっとな、ヤボ用だ」

ガベルは答えてその目を再び空へと向ける。そのまま、彼は物思いにふけるかのように黙り込んだ。しんと、辺りが静まり返る。何だろうと思いつつながらフェーンはそんな彼を見つめ、言葉を待つようにやはり何も言わない。

「警備のヤツらもいるし……いいか」

「はい？」

不意に、ガベルは呟く。いまいち訳がわからないまま、フェーンは問いかけるように言って、笑った彼の横顔をただ見ている。

目の前には闇夜の草原が広がっていた。自分は一体何をしているのだろう、フェーンは思いながら、カメラを暗視モードにしろ、という指示にしたがってその切り替えをしていた。わずかな星の光で世界を明るく見せる仕組みのおかげで、モニタには真昼の草原と大差ない映像が作られていく。右手の小型モニタには半径五キロ以内の熱源反応が映し出され、左側には3Dで同範囲の地形が表示されている。

「隊長……本当に大丈夫なんですか？」

『さっきから何度も同じことを言わせるな。ちゃんと許可はとった。いいか？お前はシミュレーターとホバー移動以外してないんだ。ちょっとでもマシンに慣れるためには本物に乗って動かすのが一番手っ取り早いんだぞ。わかっているのか？』

「それは……わかりませんが……」

ガベルの言い分はこうだ。初めてマシンに乗る人間に訓練させるにはちょうどいい場所だ、だから動かしてみろ。キャンプ近くでは警備の邪魔になるから離れた場所で。少し派手に散歩に行くくらいのことだから気にするな、警備兵には断ってある。しかしフェーンの、本当に大丈夫なのか、という不安は拭われることはなかった。ガベルは気にしていないらしい。さっさと歩け、などと言って先程から指示を続けている。

『通常の戦闘で歩くななんて行為はしない。だがどのくらいの振動があるのかよく覚えておけ。敵と遭遇してやり合うことになったらその四、五倍は機体が揺れる。フェーン、ベルトしてるか？』

』

「はい……歩きます」

スピーカーからの音声に従い、ゆっくりとフェーンはマシンを歩かせ始めた。足を上げ、下ろす。ずん、と、下ろすと同時に機体が上下に揺れる。ベルトでシートにくくりつけた体が微かに飛び跳ね、驚いたフェーンは二歩目を踏み出すところを躊躇した。『何してる、とっとと歩け!』

「あっ……は、はい」

叱咤の音が機内に響く。自分はこれを知らずに戦争をするところだったのか。思いフェーンは冷や汗をその額に浮かべた。足を上げる、過重が前方にかかる、足を下ろす。そんな簡単なことでもその機械は敏感に、そして想像以上に大きくボディをゆらす。それは中に乗っている人間にとっては衝撃といっても過言ではなかった。シミュレーターの揺れなど、考えてみればかわいいものだ。

『ほら、ペースを上げろ! 歯は食いしばってろ、舌を噛む』

暗視カメラ映像の端には仁王立ちのネイヴが映っている。ご丁寧に腕組みまでされたその姿を見て、フェーンは苦笑した。しかしこれで走るとどうなるのだろう。思いながらゆっくりとフェーンは機体の歩調を早くさせる。ずん、ずん、ずん、ずん、続け様にコクピットに衝撃が走る。最中、指示は続いた。

『慣れたらそのパターンをデータ化しろ。後はオートで勝手に歩くようになる。そいつはまだ何の経験も積んでないまっさらな機体だ。基本動作は一応作ってあるがこの先そいつを教育するのはお前だ。とろとろ動いてるとせっかくの新型もとろくなる。きびきび動け』

「了解……走ってみます」

歩いたその運動データをプログラム化させて機体のソフトにインプットする。マシンはその後簡単な命令だけでまるで映像ディスクを再生させるように勝手に歩き始める。

『そのまま、周囲を哨戒してみろ。キャンプからの距離を割り出せ』

傍らではガベルのネイヴがホバー走行をしている。前方への注意を払いながらフェーンは手元のパネルで指示通りに周囲を調べ始める。

「距離、仮設キャンプから北東に二十キロ……二十? 隊長!」

『何だ? どうかしたか?』

その距離に思わずフェーンが声を上げる。離れすぎたことに気付かないのか、スピーカーから聞こえるガベルの声はいつも通りの響きだった。マシンを停止させ、フェーンはそのまま言葉を続けた。

「キャンプから離れすぎてます……戻らないと」

『そうか? かまうこたねえだろ。その距離なら一時間もホバーで走りゃ着く』

「って……そんな……」

相手に聞こえないように小声でフェーンは呟く。そして、

「でもそろそろ戻らないと。スライサー少尉やグランド少尉が気付いたら……」

『何、構うこたあねえ。何かありゃ直接マシンの通信機に向こうから繋げてくるだろうさ。しかし……ちょっと出すぎたかな……』

わはは、とガベルが笑う。のんきを通り越して図太い人だ。フェーンはあきれながらそんなこと

を思い、そして彼に問い返した。

「帰還しますか？」

『……そうするか』

「了解……あ」

ピーピット内に電子音が響く。気付いてフェーンはその音の小隊を探り始めた。哨戒システムが何かを見つけたようだ。手元のパネルを操作して真正面にレーダーのウィンドウを開き、フェーンはそれを見てガベルに呼びかける。

「何かを捕捉しています……熱源？」

『キャンプじゃないのか？距離は？』

スピーカーから問いかけが聞こえる。眉をわずかにしかめ、フェーン、

「距離六十、縮まっています。移動してる……？」言いながらメインモニタの上に個別の小型モニタを呼び出し、そこにまた別の画像を映し出すように指示を出す。哨戒範囲を広げ、広域の熱源を探知しはじめる。同時に熱源近くの識別信号をレーダーで探し出し、マシンのコンピューターに読み取らせ、結果にフェーンは更に眉をしかめた。

「識別不能……三十？隊長！」

『叫ぶな、こっちでも見てる……熱源が三十……マシクラスがうち半分だな』

ガベルの声色が変わる。フェーンは言葉もなく、次の一言に息を飲んだ。

『敵機だ。間違いなくこっちに向かっている』

ガトル・スライサーがその眠りから突如起こされたのは夜半過ぎ、日付も変わった肌寒い時間帯だった。傍らでは、寝袋に包まりながらもやけに場所を取っている男が、すやすやと心地よさげに眠っている。外から大声で呼ばれて何事だろうと顔を出すと、その場でスライサーは顔色を変えて硬直した。外にはパイロットスーツ姿の見知った男とともに、血相を変えたアークの姿があった。

「大変です、隊長とフェーン君がマシンに乗って出て行って、捕捉できなくなったみたいなんです！」

生きて戻ったらどうしてくれよう、直後、スライサーはそんなことを思った。

フェーンはその時コクピットの中で自分が震え出すのを感じていた。ばくばくと心臓が高鳴り、動悸が激しすぎて血が上手く体を巡らないのか、手足の先がチリチリと痛み始める。声を立てたなら叫び出しそうに喉までもが痙攣し、頭の中はパニックを起こしかけていた。

「あ……うあ……」

『落ち着け、フェーン……まだ距離はある。ずいぶん早いけど、キャンプに戻るには十分の遅さだ。このまま戻って寝コケてるヤツらに知らせろ。凝りもせずまた夜襲だ』

「でっ……でも！」

指示が出されると、何を思ったかフェーンは何かしら反論しようとする。ガベルはかまわず言葉を続けた。

『相手は一晩でミネアを壊滅状態にさせたヤツらだ。知らせてやらなきゃまた同じことだろうが。今日の昼間にもドンパチがあったって話だし、手ぇこまねいて通り過ぎるまで大人しくしてるつもりか？』

低い声で叱咤され、フェーンはその場で口ごもる。ガベルはそのまま黙り込み、ややもするともう一度言った。

『フェーン、お前は先に戻れ。俺はしばらくここに残る』

「の……残る？どうしてっ……」

思いも寄らない言葉にフェーンが思わず声を上げる。ガベルはそのまま、

『距離が縮まればもう少し詳しいことがわかるはずだ。それから引き返しても遅くはないだろう。映像データでも取れれば大ラッキーだ』

「な……何言っているんですか！熱源が三十でうちマシンレベルが半分ですよ？一人でなんて無茶だ！」

『お前が側にいるよりゃ生き残りやすいはずだが？』

わざと怒らせるような口調でガベルが問いかける。フェーンは、しかしそんな物にはかまわず、

「そう言う問題じゃない……死ぬ気ですか？」

『心配すんな、死にやしねえよ。ちいっとばかししんどいかもしれんがな。それに、早めにキャンプに知らせれば事はもっと楽になる。夜中で数が数だ、出てきてもせいぜい一個中隊かそこから……』

ピーピーピー機内に再びけたたましい電子音が響き渡る。エマージェンシーコールだ。気付いてフェーンは呼んでいるものを見やる。キャンプからのコールのようだ。それも、メルドラからの。

「隊長……バレました」

『あ？何がだ？相手側に捕捉されてるのか？』

「いえ違います……だったらもっと足の速いのが出てくるでしょう。呼んでます、キャンプから」

言いながらフェーンは通信回路を開く。途端に、その場に絶叫じみた声は響き渡った。

『フェーン、ガベル！何やってる！』

『おお、その声はガティか？何だお前、ぐっすりお休みだったんじゃないのか？』

ガベルの機体にも音が入っているらしい。あまりの大きさに痛くなった耳を押さえながら、フェーンは何も言わずに、続けられる会話にとりあえず耳を傾けた。

『お前のおかげで一発で目なんか覚めた！こんな夜中に何してやがる！ついでにっ……』

『おう、そっちでも気がついたか？じゃあ別に下がらんでも待ってりゃ来るな？』

『……何だ？何の話だ？』

怒鳴り着けようとしていたスライサーの語調がそこで変わる。フェーンは呆気にとられ、

「え？」

『って……何だ、捕捉してないのか？……違う。こいつのレーダーじゃ捕まえ切れない？』

違和感の正体に気付いたらしい。ガベルは呟き、そしてフェーンに指示を出す。

『フェーン、哨戒を続けろ。どうしてだ、そっちのレーダーで捕まえられない？おいスライサー！どうなってる？』

『どうって……何、レーダー？おい誰か……ちょっと待ってろ』

キャンプからの音声が一旦跡絶える。フェーンは指示通りに哨戒を続け、そして、
「妨害電波が出てる……ガベル少尉！」

叫ぶが、時はすでに遅い。レーダーに映し出された熱源の集団からは小さな光が一つ飛び出し、それまでの倍以上の速さでこちらに迫って来ている。ガガッスピーカーは最後にそんな音を立てて、その後まともな音声を拾わなくなってしまった。何かが飛んでくる。いや、
「ロケット……これか？」

フェーンは手元のパネルをたたいてまた別のコントロールパネルを呼び出す。熱源レーダーと信号識別のモニタを見ながらそれを操作し、また別のウィンドウをメインモニタの一角に開く。ばしゅっ、という音の後、ウィンドウ内は暗視スコープごしの夜の空を映し出した。映像は流れている。射出したりモートカメラが捕えているものだ。そのカメラを操作して、フェーンは息を飲みながらそのウィンドウをじっと見つめた。風を切ってカメラは飛び、やがて真昼にも似た光景の中に空を疾走する黒い塊を見つける。映像はそこで途切れた。コントロールもおそらく利かなくなっているだろう。ブラックアウトしたウィンドウを閉じてフェーンは辺りを見回す。ネイヴ事体はさほど離れない距離にあった。機体の向きを変えて歩み寄り直接通信を試みるためフェーンはマシンの腕をガベルのネイヴへと伸ばす。

「隊長……妨害されています」

『らしいな……やっぱり新型の方が良くできてるって事か。確かにこっちは他回線をシャットアウトにしてたが、ネイヴじゃつながらんのだろう』

相変わらず、何が愉快なのかガベルは笑っている。フェーンはもう混乱も動揺もしていなかった。心の中には、諦めたような落ち着いているような、そんな感覚がある。何だろうと感じながら、彼はガベルに指示を仰いだ。

「隊長……どうしますか？」

『さっき言った通りだ。つながらんなら余計にキャンプに知らせなきゃならんだらう。また混乱に乗じて潰されてみる？今度こそラステルは壊滅だ』

「一人で残るのは危険です。下がるなら一緒に……」

スピーカーごしにフェーンのメロドラからの音声が流れる。シートに座り、ガベルは何故かほくそ笑んでいた。暗視カメラの映し出す夜の光景は昼間と大差がない。手に取るように周囲の様子は見て取れる。惜しむらくは隣のマシンの中の彼がどんな顔か確かめられないくらいのことか。思いながらガベルはまた笑みを漏らす。

「俺にかまうな、フェーン。お前はキャンプに戻って事の次第を伝えろ。早い方がいい」

『でも隊長！』

声からすると、彼はずいぶん怒っているようだ。困ったヤツだ。思いながら、ガベルは更に言葉を続けた。

「言っただろ？お前は戻って状況を後方に伝えろ。後は向こうの指示に従え。俺はここで敵機を待つ。心配すんな、俺を誰だと思ってる？自慢じゃないがスーパーエリートの中でも俺はスーパーエース様だぜ？」

自分で言うに余計に滑稽なその仇名を口にしてガベルは声を立てて笑った。どこの誰が呼んだか知らないが、あの場所で自分は最強ということになっている。アストル・ガベル。キャリア十年のマシンパイロットは一回の戦闘において最高十二機の敵マシンを破壊したという記録を持ち、マシン以外でも彼が落とす敵の数は他に類を見ないとまで言われている。トリオGの元締め呼び名は伊達ではない。三人いればラステルの制圧も可能、と言うのはそうした結果かがあって始めて人の口に上る言葉だ。

「お前は下がれ……距離が縮むのが早い。俺達を見つけて速度を上げたぞ」

かろうじてまだ生きているレーダーの反応を見ながらガベルが今一度フェーンに指示を出す。微かな呻き声が聞こえた後、スピーカーからは仕方なさげだと良くわかる声音の、フェーンの返答が聞こえた。

『わかりました……キャンプに、知らせます』

「おう、なるべく早く……目立たないように気をつけろよ？ヤツらのレーダーは狂ってないかも知れん。わかったか？」

言葉を返し、ガベルは軽く笑う。フェーンのメルドラはゆっくりとネイヴから離れ、高速移動のためにエンジンを回し始める。これでこいつは何とかなる、が。

「問題は俺が、どこまで生き延びられるか、だな」

画像の怪しいウィンドウを全て閉じてガベルはその場で一人苦い笑みを漏らす。モニタに映るフェーン機が走行を始める。小さくなっていくそれを見送りながら、今一度ガベルは熱源反応をその目で確認しようと別パネルのモニタに目を走らせた。動いているのは三十余り、うち半数がマシン・メイス規模の熱源だ。それはまっすぐこちらに向かって……、

「……まずい、二手に別れてやがる」

メルドラの動きを察知したと思しき敵部隊はそのまま二手に別れ、一方は明らかにその機体を追い始めていた。モニタを見ながらガベルは息を飲む。ここを通るなら足止めはできるが、しかし。

「なんてこった……まだろくに上手く走れねえってのによ？」

フェーンを案じながらガベルは呟く。モニタの上で二つに別れた熱源反応の片方は、じわじわとガベルのネイヴに近付く。案ずるより、何とやらだ。胸の中で呟いてガベルはマシンの装備をチェックし始めた。運がいいのか否か、機体は無傷の上、エネルギーパックの浪費もなければ弾倉内の弾数も減っていない。使えそうな武器はマシン用に開発された実弾ライフル、光弾ライフル、対マシン・メイス戦用電磁杖、後は、

「本人のやる気次第……てなところか？」

目の前の小型モニタ上の光弾ライフルを直接指で弾くと、マシンは自動的にその武器を脚部のウェポンホルダーから呼び出す。メインモニタの隅には、熱源のみを頼りにした敵マシンの影だけが映し出されていた。それにもかなりのノイズが走っている。ずいぶん強力的なジャミングをか

けられているらしい。それで一体どこまで出来るか。熱源の半数はマシンレベル、その一部、四機程度だろうか。それが一団から逸れてフェーンのメルドラを追う。

「.....生きて帰れよ、フェーン」

『未識別マシン・メイス、十秒後にライフルの射程内に入ります』

マシンのナビゲーションシステムが音声で敵機の襲来を知らせる。ライフルを構えて、ガベルはその引き金を引いた。

スターライトスコープ越しの映像は、夜の荒野を奇妙な明るさに描き出していた。ノイズが走るモニタのパネル、中には明滅し、正確に周囲の状況を伝えないものまでがある。敵機のジャミング能力はどの程度なのだろう。マシンを走らせながらフェーンは、何とか正確な外の状況をつかもうと、コントロールパネルをたたき続ける。シミュレーターでなら滅多に押し間違えるはずのないパネルを何度もたたき、その都度聞こえるエラー音に舌打ちしながら、フェーンは後方のガベルをふと思った。別れた直後、敵集団も二手に別れた。何機か足の早い機体は、おそらく自分を追っているに違いない。熱源が三十、フェーン機のコンピューターによれば、うち十七がマシン・メイス。一機に対して八機の敵マシンがあたるとして考えると、勝算は低い。それが斥候なのか先攻部隊なのか、夜襲目的なのかさえわかっていないのだ。確かに自分は下手に動かない方が身の為だ。いずれにせよ狙われるに越したことはない。そしてこの荒野だ。ジャミングは強力で、おそらく敵機自体も影響は受けているはずだ。それでも、仮にフェーンの乗る新型と同レベルの機体であるなら、こちらの位置確認ができないはずがない。加えて、斥候機だとするなら、

「メルドラより.....足は速い」

一人呟き、フェーンは敵機の距離を追うモニタをちらりと見やった。メルドラは攻撃重視型のやや重い機体だ。そして相手が斥候、さらに夜間の急襲を狙った編成をしているとするなら、移動力ではメルドラが確実に負ける。

『識別不可マシンメイスレベル二機、距離三十にまで接近。接触まで後二分』

ナビゲーターの電子音声がかockピット内に響く。どう急いでも仮設キャンプまでは一時間弱だ。その間に追いつかれて撃墜されるくらいなら、

「光学兵器用エンジン始動、使用可能装備チェック」

メルドラの前進を止め、機体を反転させる。それまで止められていた戦闘用のエンジンがその声とともに回転を始め、マシンに新しい振動が生じる。音声入力で動き始めたメルドラの戦闘補助プログラムは、ナビゲーターに変わって電子音声でフェーンに答える。

『光学兵器用エンジン回転開始。三分でエネルギーチャージ開始。使用ウェポンによりチャージ時間の変動あり』

「それまでは.....実弾で何とかする！」

目の前の走行用コントロールパネルを押し退け、その下に収納されていた戦闘用コントローラーを呼び出す。がくんと大きくマシンに衝撃が走り、マシン全体のシフトが一気に戦闘モードへと切り替わる。直後対マシン用ショットガンが脚部ホルスターから分離した。

『目標、敵機と認識。射程距離まであと十秒』

戦闘が、始まる。フェーンは微かに震えるその手で、きつくコントローラーを握り締める。敵機が射程に入るまでのわずかの時間が永遠かのように思われたその時、モニタ上の二つの影にマシンは自動的にその照準を合わせた。射程に入ったのはこちらも同じだ。先に反応した方が生き残る。直感的に判断したフェーンは合わされた照準に従って、そのトリガーを引いた。発砲と同時にその衝撃で機体が揺れる。モニタ上の敵機は自分に向けられた攻撃をたやすく交わし、フェーン機に向かって反撃を始める。初めての発砲でバランスを崩しかけるマシンを立て直しながら、フェーンは向かってくる敵の砲撃を避ける。そして避けながら再び攻撃体勢に入る。

「この……当たれ！」

ショットガンが続け様に火を放つ。ホバリング移動しながらの銃撃は機体と搭乗者ともに大きな衝撃をそれだけでも与えてくる。マシンの最大の欠点、そして弱点はそのバランスと重さだ。人間の約十倍の全高と二百倍近い重量のその兵器は、横転すれば自重だけで大破する。それをいかにうまく操り、なおかつ敵を撃破するか。それが彼ら『戦争代行者』の職務でありその能力あつての『スーパーエリート』の呼称なのである。マシンを駆ることを許される、その資格は伊達ではない。

「早い！でも……軽い！」

砲撃を避けながら手元のコントローラーでフェーンはデータの処理を続ける。相手は斥候機、エンジンと思われる熱源から予測される馬力はこちらより小さい。相手の砲弾に当たらず、なおかつ追いつければ勝算がないとも言えない。僅かに、口元がゆがむ。それは恐怖と、言い知れぬ胸の高揚から漏れる笑みだった。生きて帰る、それだけではない。殺し合いに、戦闘に勝つ。そこにはシミュレーターの中では感じられない、一種狂気が存在していた。生への執着、それだけではない。生き残りをかけるということは、命をかけるということ。そしてそのためには、敵である全てを破壊しつくさなければならない。生き延びるまでの困難は想像以上だろう。しかし生き延びられたなら、誰に賞賛されなくとも、自分自身の誇りになる。命をかけるとは、そういうことだ。一瞬、そんな思いがフェーンの中を過る。だから、ここは死ぬわけにはいかない。誰に言われたからでも、特務機関構成員としての義務でもない。生き残るために。生きて、望みを果たすために。

「このっ……どうして、当たらない！」

ショットガンの弾数が、空を裂くだけ裂いて減っていく。いらだちながらフェーンは叫ぶようにナビゲーションシステムに声を投げる。

「ウェポン用エネルギーのチャージ、時間は？」

『チャージまで後十秒。プログラム補正中。光学兵器使用可能まで、残り十七秒』

無機的なマシンボイスが機内に響く。耳にした直後、フェーンは再びコクピットで叫ぶ。

「ライフル呼び出し！セットアップ終了直後に装備」

その間にも途切れることなく、敵機からの砲撃は続く。二桁を切った残りの実弾数を気にしながら、フェーンは迫り来る二機的一方に向かい、まるで飛び込むように突進した。砲撃は正面から、しかも秒を追うごとに近距離になる。が、敵のトリガータイミングは頭に入っていた。避けられないこともない。

「当たれ！」

目の前、敵機が迫る。その敵機が怯んだ隙を見逃さず、フェーンはショットガンのトリガーを引いた。僅かにのけぞるような衝撃、瞬きも許さないほどの間、そして爆音。

「……うわぁっ」

最初の一機が炎をあげて爆発する。モニタに映し出された鮮明すぎる炎の輝きに、思わずフェーンは目を伏せる。機体は推進ホバーに抗うように、そのまま後ろへ吹き飛ばされる。高所から地面に落下するのと同じ引力、しかも加速度がついてその衝撃が上がっている、その時とほぼ同じショックが機体の中のフェーンにもかかる。倒れれば死ぬ。フェーンは無我夢中で足下のペダルを蹴り飛ばした。背面の加速推進ホバーが圧縮された空気を一気に吐き出し、何とか機体をその場に起こす。が、勢い余ってマシンはそのまま前のめりに倒れかかる。とっさにまたコントローラーを強く引き、何とかフェーンは機体の転倒を避ける。

『敵機認識目標、一機撃破。後方、識別不可機体、接触まで……』

ナビの音声敵機の接近を知らせる。それに我に返った時、再びフェーンをすさまじい衝撃が襲った。背後から食らって、シートに固定されているはずの体が投げ出されそうになる。かろうじてベルトで投げ出されずにはいるが、後頭部から背中にかけて、激痛が走る。

「っ……後ろ！」

機体を、そのまま反転させる。真正面、それは体当たりを食らわせた格好でそこにいた。格闘戦に持ち込むつもりらしい。組んだ腕を振り上げ、フェーン機めがけて振り下ろす。すぐさま機体を後退させ、フェーンはその攻撃を反射的に手にしていたショットガンで返そうとする。

「何度も……食らうか！」

マシンの腕に握られた銃と敵マシンの腕とがぶつかり合う。どん、とすさまじい発砲音がして、対マシン用の実砲が暴発する。弾は空へ放たれ、銃口はその衝撃に耐え切れず、火を吹いて弾けた。衝撃はフェーン機の腕に伝わり、

『右下腕部ダメージ30%、回線一部断絶』

機械的すぎるその声にしまったとばかりにフェーンは息を詰まらせる。このまま損傷度が高くなれば右手の自由が利かなくなる。どうする、などと考えている暇はなかった。右手の動く間に、できる限りの手を尽くさなければならない。だったら、

「光弾ライフル、起こせ！」

『光弾ライフル、プログラム補正終了。エネルギーチャージ終了。右腕回路一部断絶しています。エンジンジェネレーターからのエネルギー補給不可』

「だったらバック分で当てる！」

右腰部から吊るされていた対マシン用光弾ライフルが起動する。構える間もなく、敵機は再びフェーン機に攻撃をしかける。

「軽いんだ……受け流せる！」

腰に中途半端にライフルを起こしたまま、フェーンはコントローラーで機体を急速にバックさせた。ホバーを逆噴射させ、敵機との間に空気の層をも造り出す。直線攻撃を仕掛けてくる敵斥候機は、その移動力を高く維持するため、装甲はおろか機体自体が軽い。横転しても自重による

大破はしないが、攻撃型マシンにそのパワーは格段に劣る。そして、

「後ろが、取れば！」

機体に一気にスピンをかけ、フェーンは敵機をその突進の勢いで逃がす。軽いとは言え数トンはあるその木偶は重力に従って前のめりにつんのめる。

「終わりだ！」

ライフルを持ち上げる。そのままフェーンは背後から敵の機体を打ち抜いた。耳をつんざく爆音と、カメラを焼くような光線とが一瞬当たりの全てを支配する。機体がぶれるのを無意識に維持しながら、フェーンは思わず細く強い息をその場に吐き出していた。

基地内は無断でマシンを動かしていた男が見つかるなり、その騒がしさを増した。通常跡絶えることがないはずの電波が何ものかによって遮断され、加えてキャンプ内のレーダー機器が以上を来し始めたのだ。休息をとっていた各部隊責任者は召集をかけられ、その尋常ならざる事体はどう対処すべきかを論じ始め、キャンプ内は戦闘配備がすぐさま敷かれた、が。

「斥侯を出す？今から？バカ言うな、そんなのんきな状況下か？」

その役割を与えられた部隊に所属するパイロット、シロ・グランドは隊長代理として指示を受けて戻った男に向かい、聞くなりそう怒鳴り返した。本人は騒ぎが判明したその時には覚醒しておらず、その指示が下ったのはそれより一時間ほど後だった。騒がしさに何事かと目を覚まし、状況を説明されて理解するまでにやや時間を要した彼はこの時ばかりは寝不足と、自分の寝起きの悪さを呪わずにはいられなかった。キャンプ内は騒然としている。しかし、配備はされたが出撃するマシンの姿は見られない。

「落ち着け、グランド。とにかく出る準備だ。アークも」

「何がとにかく、だ！ガティ、お前、ちゃんとあいつの話聞かなかったのか？敵機の数とか距離とか状況とか！」

「聞ける状況じゃなかったと言ってるだろ！」

「二人とも落ち着いてください！騒いでいても仕方ないでしょう？」

隊長代理としてついさっきまで引っ張り出されていたスライサーが言葉を返す。傍ら、アークはパイロットスーツに身を包み、二人の同僚の口論を何とか止めようと間に入ろうとする。シロは眉をきつく釣り上げ、

「スライサー、今から司令部に行って一個中隊もしくは有志で三十機手配してこい！斥侯出してる余裕はない！」

「無茶言うな。俺達は下っ端のパイロットだぞ？それにだ。現状が詳しくわからん状況で下手に戦力を投入して、万が一のことがあったらどうする気だ？」「だから多めにいせって言ってんだよ！じゃ何か？お前。あの二人を見殺しにしるって言うのか？」

かみつく勢いでグランドがスライサーに言葉を投げつける。貯まりかねたのかスライサーもその場で叫ぶ。

「これは上からの指示だ。ついでに、あの二人は無断でマシンに乗って外に出ちまったんだぞ？見殺しだ犠牲だと言うのもわかるがな、原因はあいつらにだってあるんだ！俺に言っても仕方ないだろう？」

「じゃあどうしろって言うんだ？たった三機で見回りに出て、妨害電波の中で通信ができない中で、数のわからん敵機とやり合えってのか！」

グランドの言葉の後、スライサーは何も言い返せずにその場でうなる。確かに、それには無理がある。状況の把握のために斥侯は出されるが、戻って来られないでは話にならない。もし相手が大軍団だった場合、通信妨害をされている今の状況下ではこちら側が圧倒的に不利になる。かと言って斥侯を出さなければどううって出るかを判断することもできない。

「ああもう、じれったい！アーク、メルドラのキーをよこせ！」

グランドが叫ぶ。驚いてアークは思わず声を上げる。

「少尉、一体何をするつもりです？まさか一人で行く気じゃ……」

「おう、お前らが動かないんなら俺が……」

どおんっ爆音が辺りに響き渡り、同時に闇に包まれていた空に白い閃光が走ったのはその時だった。三人は一斉に、白く輝いた空の方向へと顔を向ける。「い……今のは……レーザー？」

「誰だ……夜中にあんなもんぶっ放すヤツは……敵に位置教えるようなもんだぞ」

直後、キャンプ内にアナウンスが響き渡る。

『北東30キロの位置にて味方マシンが戦闘展開中。配備中のマシンはただちに出撃せよ。繰り返す……』

呆気にとられるアークとスライサーをよそに、それまで不機嫌だったグランドの表情が一変した。

「お子様ポンチ……無知が役に立ちやがった」

眩くその表情は不敵に微笑んでいる。え、と小声でアークが問いかけるように言うと、そのままグランドは言葉を紡いだ。

「外に出て夜中にレーザーぶっ放しそうなヤツなんて……フェーンくらいしかいないだろう？あの、何にも知らないお子様しか！」

その言葉にスライサーとアークは顔を見合わせる。確かにそうだ。夜中の光学武器がどれだけ目だって危険かは戦闘の経験者なら誰もが身に染みて理解している。超スーパーエリートの異名を持つガベルが軽々しくそんな真似をするとは思えない。もし仮に今の砲撃がこの仮設キャンプへ向けた信号や合図なら一発だけでなく続け様に何発かが空に向かって放たれることだろう。しかし号音も閃光も一度限りで、それが正しく合図だと言い切るには数が少なすぎる。

「おい二人とも、何ぼ一としてる！俺達もとっとと行くぞ！」

言い放ち、グランドは踵を返して駆け出していく。スライサーは見送りながら苦笑を漏らし、傍らで啞然と立ち尽くすアークにそちらを見ないまま言った。

「アーク、出撃だ。無理はしないように。いいな？」

「了解」

答えてアークはその場から駆け出していく。それにしても、だ。

「アルの野郎……戻ったらただじゃおかねえぞ」

そのことだけはこれからの戦闘がどんなに激しくとも忘れまい。そう心に誓って、スライサーもその場から駆け出した。

ガベルの搭乗したネイヴの周囲には、約十機程度の敵マシンが展開していた。十七機のうち四機は仮設キャンプに向かっているはずのフェーン機を追跡しているか、交戦中と言ったところか。後の数機は後退したものと、ガベルの機が放った光弾ライフルに撃ち落とされ、そこにその反応はない。ジャミングは、潰した。通称、特殊装甲車と呼ばれる敵軍備車両がその発信源で、後退したマシンと共にその場を去った車両以外は、すでに荒野のあちこちにその残骸をさらして

いた。今尚、破壊の衝撃で燃え盛るもの、爆発を起こすものなど、様々である。

『敵反応、熱源、全てマシンメイスクラス、八機。敵ヒット数マシン・メイス二、車両七』
「流石に、移動走行用の装備じゃそんなモンか……」

周囲を遠巻きに取り巻くマシンともども、ガベルの乗った機体は北に向かって移動している。一つは、一カ所にとどまって敵サイドに位置を固定されないため、そしてもう一つは、集団の足並みを多少なりとも乱させるため、である。荒野と言っても、そこは更地ばかりではない。マシンのホバークラフトは平面には強いが、起伏の激しい場所向きではない。ナビゲーターシステムに地形データを全て取り込んだ立体マップでも入れておけば事なきを得ることもできるが、コンピューターでその場所の確認をするにも、ある程度の時間停止して秒数をかけなければならない。中には移動しながらそれをこなす事のできるものもあるかも知れないが、戦闘中に他のことをしていれば必ずボロは出る。

「帰り道のことなんざ、帰る時に考えりゃいい事だ。それ以前に」

『光弾ライフルエネルギーチャージまで、後二十秒。移動力の変動により終了時間に変動あり』
マシンは左腕に装備品の光弾ライフルを、右腕には撃破した敵機から奪い取った実弾ランチャーを構えていた。残り弾数もどの程度の攻撃力となるかもわからない。無理矢理コントロールシステムをネイヴのナビゲーターにつなぎ、照準を合わせてただ撃っている、無茶と言えば無茶なやり口だった。

「帰り道を、空けてもらいてえなあ！」

ブレーキペダルを強く踏み込み、ガベルは自分の機体を急停止させる。モニタと並べている熱源探知のウィンドウを見比べ、ぶれの大きな機体を見つけるとガベルはランチャーを発射した。僅かに外部の音がピット内に伝わる。イレギュラー品での攻撃が機体に及ぼす負荷は大きい。コクピットにも衝撃が伝わり、張り巡らされたモニタにノイズが走る。急停止急旋回の衝撃で、マシン脚部の熱量も格段に上がっていた。機体の消耗は、思った以上に大きい。

『左足関節部、放熱フィン融解寸前。後65%の負荷で放熱処理機能停止します。速やかに冷却してください』

「何だ、この……ナビゲーターって一のは……」

ピット内に響く電子音にガベルは眉をしかめる。

『敵マシン・メイス一機撃破。残り敵機反応、マシンメイスレベル、七』

「いちいち細かいこと言いやがる……切っちゃうか」

通常の戦闘で彼はそのナビゲーターを使用することはほとんどなかった。もとい、今現在の戦闘状況は、はっきり言って彼にしてみても例外だった。一度の出撃で何機かの連続撃破をしたことはあるが、単独で動くことはほとんどない。最終的に一人取り残されたことならあるが、初めから味方のいない戦闘など、初めてではないだろうか。

『敵機移動開始。当機に接近中』

「ま……一人で寂しさにこらえ切れずに発狂、はしなさげか？」

一人呟き、ガベルはその場で苦笑を漏らす。実際問題、その中で全ての戦況に注意し、かつマシンの安定を保ち、攻撃行動をとるのは簡単なことではない。ナビゲーションは音声情報としてパ

イロットの状況判断を補助するシステム以上ではないが、ないよりは多少マシと言ったところか。音声入力、機械任せ、攻撃以外はフルオートシステムでカバーできても、結局戦うのは自分一人で、死ぬのもまた、ここでは一人でしかない。

「早いところもって反応の速い、二人乗りでも開発されてくれないモンか……噂の『クリーチャーズ理論』とかで」

三機のマシンが前後、横方向から一気にガベル機に突っ込んでくる。真正面の機体を見ながら、空いた一方向にガベルは機体を横移動させる。しながら、『光弾ライフル、エネルギーチャージ終了。残り弾数二十』

ナビゲーターの声と共にガベルは自分を追う機体に向けて光弾を撃ち放つ。夜の闇の中、巨大な流星でも間近で見ているような光の塊が、荒野に号音を響かせながら、翔ける。

「一発くらい、まぐれでも当たらねえか！この！」

十数発目の光弾がモニタの上でひときわ大きく弾ける。三方から追っていたうちの一機を撃ち抜いて、その場で大きな爆発を起こす。後を追う二機がその爆風の後から飛び出す。それに向かってガベルは更に、光弾がつきるまでライフルを打ち続ける。

『光弾ライフル、エネルギー、エンプティ。チャージ開始』

「ちっ、弾切れか！」

後進の要領でマシンを走らせ続けながらガベルはライフルを元の装備位置、背中に装着しようとする。その間に敵マシンからの攻撃は始まった。一方向に固まっていた二機のマシンは二手に分かれ、ナイヴの数倍のスピードで前後から機を挟み込もうとする。「んなろっ……こっちは一匹だ、一機ずつしか相手なんざ」

正面、機体が並ぶ。敵機の銃口がガベル機を捕える。それに向けてガベルはランチャーのトリガーを引いた。

「できるか！バカヤロウ！」

横移動の圧力とランチャー発砲の衝撃とでナイヴはその場でバランスを崩す。そのまま機体は地面に叩き付けられ、コクピット内でガベルの体はその衝撃をまともに食らう。一瞬モニタがブラックアウトを起こし、機体がパニックに陥った。あちこちからエラーサインのアラームが鳴り響き、機体の損傷状況をナビゲーターがチェックし始める。

『左腕肩部ジョイント損傷、回路ショート。左手指マニピレーションワイヤー断絶。ならびに左手首ジョイント……』

「やかましい！ちょっと黙ってる！」

ダメージを報告するマシンボイスを一括しながらガベルは機体を立て直そうとする。今のショックで機体はかなりのダメージを食らった。後、どれ程動けるのかもわからない。稼働率が70%を切るまでマシン自体は何とか動かせるが、イコール攻撃できるとは限らない。が、

「左足……電磁杖、出るか？」

逆もまた、しかりだ。残った武器をチェックしながらガベルは大きく息を吸い込む。マシンのヒット数が四機に増えていた。正面にいた機体はもう動かないらしい。

「んじゃ応援か救援が来るまで……これ一本で何とか持ちこたえるしかねえな」

手にしていた、敵のものであったランチャーを捨て、ガベルは機体の体勢を構え直させる。ぎこちない作動音がピット内にまで響き、そこかしこのモニタではダメージ表示が延々と流れている。元はと言えば今回の事は自分が原因だ。マシンを壊されても、自分がどんな目にあっても文句は言えない。それ以前に、戦争中である。自分は兵士と言うより兵器で、ここで壊されて捨てられても、文句の言えた立場でもない。けれど、それでも、

「何しろ人間だからな……生きて帰る保障はできなくても、生きて帰りたいにゃ、変わりはねえんだ」

機体のホバーを再び始動させ始める。フェーンは無事だろうか。一瞬、ガベルはそれを思った。うまく逃げられたか、キャンプに辿り着いたか。少なくとも、まともな通信ができる距離にまで異動していればいいが。

『熱源接近。敵機接近』

ひときわ大きくわめくように設定されたそのマシンボイスが耳を撃つ。我に返り、目の前に敵機を見てガベルは下向きに構えた電磁杖を跳ね上げる。近距離から打ち出された敵の実弾ランチャーの弾が杖を掠める。直撃は避けたが爆発の余波を食らって、ガベル機は再びバランスを崩した。次の転倒で機体の損傷は更に激しくなる、マシンが動かなくなったら、今度こそもう終わりかも知れない。

「くそっ……腐ってもスーパーエリート」

機はバランスを崩したままだった。倒れるのを見届けでもするようにランチャーを構えた敵機を見たのは一瞬だった。右手一本で握っていた杖を、ネイヴはその機体めがけて投げつける。同時に崩したバランスを立て直し、直後、

「舐めるな！」

電磁杖はまっすぐ敵機の頭を貫いた。号音を立て、その場に機体は崩れ、崩れながら爆発を起こす。

「……クソ、後はライフル一本かよ」

目の前で燃え盛る敵マシンを見ながら、ガベルはその場で微かに笑いながら、大きく長い息を吐き出した。手持ちの武器は光弾ライフルが一丁のみ、夜の闇の中ではその充電に太陽光が使用ではないため、使用制限も大きい。

「何かねえか……武器。そこらに落ちてたり……」

敵機の哨戒しながら、何か使えそうなものはないかとガベルは手元のパネルを操作し、機体の周辺を探し始める。しながら、

『現在位置、ミネア前線基地より距離三十、方位北西』

「三十～？やべ……仮設キャンプから離れすぎたか……仮設キャンプの方位と距離は？」

『座標設定をしてください。当機の検索ポイントにない地点の検索はできません』

「面倒だな、くそっ」

手元のリモートコントローラーを操作し、移動用のコントローラーを呼び出す。あちらこちらから伸ばされた柄の先のいくつかのパネルを見回し、中から一つを手で引き寄せ、更にガベルはそのパネルをたたく。ピー……僅かに耳につく電子音が響いたのはその時だった。モニタの一部が

点滅し、外からの信号を受け取っていることをガベルに知らせる。

「通信？そうかジャミングが切れて……回路開け」

『了解。通信開きます。カメラ正面』

ナビゲーターの声の直後、目の前のモニタが切り替わる。映し出されたのは、

「フェーン……どうした？無事か？」

『隊長こそ……今、どこです？』

「今か？今は、えーと……」

現れた、すこぶる疲れた表情のフェーンの顔を見、僅かにガベルは笑みを漏らす。そして、

「さっきのジャミングのおかげでルート検索できないらしいな……そっちで探せるか？」

『やってみます……熱源、マシンメイスレベル、五……？』

モニタの中のフェーンの様子が僅かに曇る。疲れてるんだろうな、何しろ初戦だからな。実物とシミュレーターじゃ揺れのレベルも違うし、何しろ本物の命のやりとりをしているわけだから。のんきにガベルはそんなことを思い、メインモニタの片隅で明滅する、ある表示に気づかない。そして同時にこんなことを思った。

「ところでフェーン……お前、一体何して……」

『隊長、機の側にマシンクラスの熱源、四機！』

「へ？」

言われて、何気にガベルはその視線を辺りに泳がせる。モニタ上のほとんどは、やや明るめに表示された夜の荒野が占めていた。反応しているのはシートの影にでも隠れそうな、小さな画面が一つきりである。

『敵ライフル射程範囲に入ります』

『見つけた……隊長！』

画面上のフェーンが大きく叫ぶ。何かかと思った直後、機体の側を敵方からの弾が掠める。

「見つけた？フェーン、何が……」

『今行きます。回避行動をとってください』

言葉の直後、通信は一方的に切られる。ガベルは首を傾げ、しかし次の瞬間、

『マシンメイスレベルの熱源、四機確認。敵機と認識。接触まで三分』

何が起こってるんだ、その疑問をガベルは自分の中で打ち消した。ぼんやり突っ立っているのは狙い撃ちにされるだけだ。思いながらガベルはコントローラーを戦闘用に切り替え、敵機方向に機体を向け直す。武器を探している余裕はもうない。とりあえず、飛んでくるであろう敵の弾を避けなければ。足下のペダルをキックすると機体はホバリングを始める。そのまま、ガベル機は敵に向かう形で走り始める。

「ナビゲーター！こっちのライフルのチャージはどうなってる？」

『エネルギーチャージ65%終了。フルチャージまで後五分。移動力の変動によって終了時間は……』

「五分か……そんだけ生き延びてりゃ、後は何とかなるってか？」

ミシミシと、僅かに機体がきしむ。転倒の衝撃は流石に小さくはない。自分が指揮する部隊でこ

れだけの破損をしている機体がもしあったなら、ためらわず後退させていることだろう。動かない機体はただのカタマリ以外の何でもない。一緒に心中するだけ無駄なことだ。

「おいフェーン！今どこにいる？」

通信回路を開き、近くにいるであろうフェーン機に呼びかける。わずかの間をおいて相手側の回路も開き、音声だけがコクピットに飛び込んだ。

『隊長のすぐ後ろです……そんなことより、どうする気ですか？そっちは……』

「俺はお前に逃げろって言ったはずなんだが、どうしてここにいる？」

正面から熱源反応が接近する。コンピューターがその進路を予測して、ガベルはそれに従って回避行動をとる。ニアミスとも呼べそうな近距離で敵弾が地面で爆発する。モニタ上の映像に、その敵機が見え始める。

『ジャミングか途切れて、どこにいるのか探っていたら……って、そんなこと今はどうでもっ……』

「よかねえだろう？上官に背くたあ、いい度胸だ。今からでもいい、お前は下がれ！」

言いながら、ガベルは光弾ライフルのトリガーを引いた。続け様に放たれるその先、敵機もまた回避行動をとるのが見える。

『隊長、死ぬ気ですか？』

フェーンの叫ぶ声が機内に響く。耳が痛いと言わなくても、ガベルはそのまま怒鳴り返す。

「馬鹿言え！そりゃこっちの科白だ！戻って来るならせめて味方連れてこい！」

ライフルが火を吹く。夜明け前の闇の中、それを使うことは敵に位置を教える行為にも似ている。敵が光弾を使用しないのはそのためもある。同時に、実弾を使えるということはそれだけの装備をしている、もしくは近くでの補給が可能だということだ。

「俺達にや的になるような動き方しかできないんだよ！近寄ったら、一機に掃射される！」

続け様に、ガベルのライフルが火を吹く。すぐさまエネルギーは底を尽き、ガベルはいまいまして舌打ちした。

「くそ……なんでこんなに弾数がねえんだ、このライフルは！だから夜間外出の戦闘は嫌いなんだよ！」

『隊長、電磁杖は……』

「んなモン、とっくにイッちまったよ！ってフェーン、お前俺の言うことが……」

ドンドンドンドン敵方のライフルが火を吹く。怒鳴りながらもそれを交わし、ガベルは間近まで迫った敵機にそのままつっこんでいく。

「このっ……どいつもこいつもっ」

一番初めに目に付いた機体の懐に飛び込むと、ガベル機はそのライフルの先を捕まえ、捕まえるなり機体を一機に反転させた。ライフルが暴発する。衝撃は機体を走る。

「ムカつくヤツらだ！」

遠心力によって捕まった機体は大きく振り回された。ライフルを握っていたその手が離れ、敵マシンはそのまま荒野に投げ出される。外に起こった破壊音とも爆発音ともつかない号音が、收音マイクを通すことなく機内に僅かに届く。爆発、炎上。見もせず、ガベルは後ろから自分を追う

形のフェーン機へと振り返った。

「お前、戻ったら俺が怒鳴り散らすくらいじゃすまないことくらいわかってるだろ？なんで戻らん？」

『隊長、後ろ！』

「やかましい！」

フェーンの叫びの直後、ガベルの怒声と同時に機体に衝撃が走った。放たれた実弾がガベル機の左腕に着弾し、衝撃で機体がバランスを崩す。

「うおっ」

『左上腕部着弾、稼働率0%。駆動回路切断。動力カットします』

爆発が起こる。崩れかかる機体を立て直すため、ガベルはシート両サイドのレバーを強く引く。

「このっ……木偶！」

『隊長！』

モニタ上、フェーンのメルドラが手にしていたライフルを上げる。ガベル機の背後にいた敵マシンがそれに反応するように二手に分かれる。爆発がそのすぐ脇で生じたのは直後だった。コクピットの内壁を埋め尽くすモニタが白く焼き付く。再びの爆風で、立ち直りかけたガベルの機体が再びバランスを崩す。

『隊長！』

「うるせえ！ぎゃーぎゃーわめくな、男の癖に！」

ガベルの叫びと共に機体はその場に転倒した。固定されているはずのシートから投げ出されそうな衝撃が機体に走る。余波で、モニタのいくつかの回路がショートし、小さな爆発が機内で起こる。ナビゲーターの声にもノイズが走る。破損率40%、と僅かに聞き取れる音声が告げていた。

「てめえも一端のスーパーエリートなら、一人で生きて帰るくらいしてみやがれ！」

目の前の戦闘用コントロールパネルはすでに役に立たなくなっている。忌ま忌ましさに殴りつけて、ガベルはかろうじて生きているコントローラーのあるパネルを見、殴りつけるためにその腕を振り上げた。

「フェーン、暗視を切れ！」

『えっ？』

「切れ！」

倒れた、片腕をなくしたマシンをモニタに見ながら、フェーンはその場で動きを止めていた。残る敵機は三機、自分を周囲から攻撃してくるつもりらしい。逃げるか、戦うかしなければ。でも目の前の、動かないマシンを守りながらどうしろと言うのか。動揺する間もないと言うのに、その倒れたマシンから指示を出す怒鳴り声が聞こえる。この闇夜に暗視を切れとはどういうことか。思いながらもフェーンはカメラの暗視モードをオフにした。瞬時にモニタから光が遠のく。闇に放り出されたような感覚になれる間もなく、三機の敵マシンが攻撃を仕掛けようとフェーンとガベルのマシンに近づく。ごっという音と共にガベルのネイヴから何かが出されたのはその

時だった。黒一色だったはずのモニタが、瞬時にして真っ白に変わる。

「信号弾？」

いや、違う。言いながらフェーンはそう判断していた。目瞑ました。敵マシンのモニタに焼き付きでも起こさせる気か。思った次の瞬間、フェーンは背中に収納されていた最後の武器、電磁杖をマシンの手にとった。今の発光弾でパニックを起こしている敵の機体が見える。ほぼ正面の機体めがけ、フェーン機は突進した。そのカメラが正面を見ようとする直前、敵マシンを下腹部辺りから叩き上げる。

「倒れる！」

避けることもできず、敵マシンはその場にもんどり打って倒れ込んだ。地響きにも似た振動が起こり、同時に倒れたマシンから号音上がる。

『熱源接近中。距離、二十メートル』

「こんな時に……敵本体か？」

『レベル、マシンメイスクラス。通信回路開きます』

ナビゲーターの淡々とした声が響く。何事かと驚く間もないまま、周囲をライフルの発砲音とその衝撃が通り過ぎる。

『フェーン、ガベル！生きてるか！』

スピーカーから響いた声は副長、ガトル・スライサーの声だった。振り向き、思わずフェーンが叫ぶ。

「スライサー副長……救援？」

『ったく……おせえんだよ、あのアホタレ……』

ノイズと共に、開きっぱなしの通信回路からガベルのぼやく声が届く。モニタの奥手、小さく砂煙と、数機の味方マシン・メイスが映し出される。

『いいか、言い訳も弁解も、後でみっちり聞いてやる！フェーン、そこで寝転んでるオヤジ起こして、離脱しろ！』

『誰がオヤジだ、誰が。てめーの方が年は上……』

半壊状態のマシンに乗ったガベルの戦闘時らしくないのんきな言葉が聞こえてくる。シートに座ったままフェーンは脱力し、微かに笑いながらそれを聞いた。

『黙れ！俺は今いろいろに腹が立ってんだ！片付けられなくなかったら大人しく言うことを聞け！』

何発もの弾が機体の横を通り抜ける。やがて、マシンの群衆がフェーンのメルドラとガベルのナイヴを通り越し、その後方に待避を始めた敵マシンを追い始める。助かった。心の中でフェーンはそう呟いた。同時にシートの上で自分の体のバランスを失う。

『隊長、フェーン君、無事ですか？』

『おう……何とかな。おいフェーン、お迎えだぞ。フェーン、返事しろ！フェーン！』

コックピット内に外部からの声が響く。シートの上、フェーンは意識を失っていた。その顔に疲れとも苦悶とも、安堵とも付かない表情を浮かべて。

「本当にこのガキンチョ、口だけかと思ったら……」

「まあそう言ってやるな。俺やお前があれだけ絞ったんだ。そのくらいの芸の一つもしてもらわなきゃ困るだろ」

「ってゆーか俺は、あれだけ必死になって出てったのにおいしいところの一欠片もないのに余計に腹が立ってんだよ。さすがはアストル・ガベル様だよな」

「だからその言い方やめろっての。そのさしものアストル・ガベルもマシンこけさせて、自力じゃ帰還の一つもできてやしないんだからよ？」

「そんなの、六機撃破に比べたら、とるに足りないオイタじゃねーか」

男の会話が聞こえる。何やら、悪趣味な。思いながらフェーンは何故か閉じている目をそっと開けた。目に入ってきたのは高いとも低いとも付かないベージュの、布張りの天井だった。天井に布が張られているのではなく、それ自体が布状の物で張られているようだ。テントか。思って息をついたその時、全身に痛みが走った。意識ははっきりせず、眠っているようでもあり、目覚めているようでもある。体は、すこぶる重い。指さえ動かすことが難しい。声を出そうとするがそれもできず、その場でフェーンが咳き込んだ。

「お、起きたかな？」

「おいシロ、そっとしといてやれ」

「何だよ、俺だって怪我人いじめるほどの悪人じゃないぜ？」

「それ以上だろうが、お前は」

シャッという音と共に視界に光が飛び込む。何だか似たようなものを何度も見ている気がする。思うフェーンの目の中、その直後飛び込んだのは、

「……グランド、少尉？」

「ほら見ろ、起きてるじゃねーか」

かすれる声で問うようにフェーンが言うと、顔を出した当人は目をきょとんとさせ、自分の背後に振り返って声を投げた。ここはどこか、と思うまでもなかった。自分はまたベッドの上で横になっている。しかも、かなりの重症のようだ。それは今までにも何度も繰り返された事態で、だと言うのにそれ以前の類似した事態より、フェーンはそのことに納得できていた。意識が鮮明になる。何がどうしてこうした事態になったのかも、推察できる。

「起きたか？フェーン」

シロ・グランドの肩越しに見えた顔を見、フェーンはかすれた声でその人物を呼んだ。

「隊長……無事、でしたか……」

言葉の度、体中がきしむように痛む。苦痛に表情を歪めると、シロの背後にいたガベルは軽く笑った。

「俺は慣れてるからな。流石に無傷とは行かなかったが」

「そんでもまだ生身だもんな。驚異的だよ、本当に」

言ったのはグランドだった。フェーンが黙っていると、その目に映るようにとガベルはその右腕を上げてみせる。白い石膏で固められたそれは、

「隊長、腕……」

「何遍か目にこけた時に折ったらしい。最短二週間で治るそうだ。お前に比べたらかわいいもんさ」

フェーンは何も言わずその表情を僅かに曇らせる。それに気付いてか否か、間に入った格好のグランドが無神経な口調で言葉を紡いだ。

「ぼーず、お前も派手にやったな？脇腹が打撲で肋骨が一本折れて三本ヒビ、右膝と両肘がひずんでおまけに貧血と知恵熱だ」

「……ひずんで？」

「折れたり割れたりしてないけど、しばらく痛いぞ？それで生きてるかと思ったらシートの上で伸びてやがるしよ」

「そのくらいにしとけ、相手は初心者だぞ？」

軽く笑いながら、ガベルはグランドの言葉を制する。フェーンは眉間をゆがめ、しばらく間を置いてからこう言った。

「どうして無傷のあなたがここにいるんです？少尉」

「何だよ？いちゃ悪いかよ？」

「いえ……あれから、どうなったのかな、って……」

「とっても残念なことに、俺達の部隊は後退だよ。誰かさん達が勝手に出てって勝手に暴れてくれたおかげで、主力マシンの片方がぼろくそになった上、新人が一人瀕死だよ？」

けっ、言うてからグランドが付け加える。フェーンもそれには何も言い返せず、困ったような視線を泳がせ、笑うガベルを見やった。

「そう怒るなよ、グランド。戻って俺達の始末がつきゃ、お前もめでたく前線復帰、だろ？」

「そんなことはどーでもいい。俺はまだ色々に腹が立ってるんだぞ？」

「わかったよ、後で聞いてやる。とにかくお前は外へ出てろ」

笑いながら、しかし無理矢理ガベルはグランドを追い立て、テントの中から彼を追い出す。わめきながらもグランドは外へ出、直後、

「おいフェーン！お前にも後でじっくりいやってほど愚痴ってやる！ガティの分まで。覚悟しとけ！」

「……本当に、やかましいヤツだな」

叫ぶような声を聞きながら、ガベルがフェーンの元へと戻ってくる。ベッドに横になったまま、そう言って笑う彼をフェーンは黙って見ていた。笑いながら、ガベルはそんなフェーンに向かって、言葉を紡ぐ。

「俺とお前は午後にもシル・ソレアに逆戻りだ。おじゃんになったマシンともども。後のことは……そうだな、次の所属先の上官が指示してくれるだろうよ。それまでお前は大人しく、入院ってところか」

「隊長は……どうなるんです？」

問いかけに、ガベルは肩をすくめる。そして、

「さて。運が悪けりゃ軍法会議にでもかけられるか。十中八九、営倉ご招待は免れなさげだが」

「でも……隊長があの場合に、いなかったら……」

喘ぐように、全身の痛みをこらえながらフェーンが言葉を紡ぐ。苦笑を漏らし、ガベルはもう一度無言で肩をすくめた。そして、

「そういや言ってなかったな、フェーン」

「……何が、です？」

ニヤリと、ガベルは笑った。フェーンが首を傾げていると、その表情でガベルは言った。

「ぎりぎりだったが……生還、おめでとう」

ミネア前線基地半壊から二日後、基地を半壊させたと思しき敵一個中隊は仮設キャンプにて待機していた特務機関のマシン・メイスによって駆逐された。先行部隊と思しき敵中隊は二度目の夜襲を実行に移す直前、深夜無断で演習を行っていたメルドラ隊隊長アストル・ガベル大尉とフェーン・ダグラム少尉に発見され、その侵攻の途中、

「十七機中六機一人で落とす？」

「らしい。けどマシンが半壊だ。自慢できた話じゃねえよ。フェーンの方に行ったヤツはわからないが」

マシン・メイスはほとんどが撃破され特務機関ミッシュ・マッシュは最小限の被害を出すに至った。とは言え、それ以前には基地が半壊にされているのだ。差し引きがゼロ、というわけには行かなかった。そして、

「で、何の用だ？ガティ」

「何の用だ、じゃねえだろ！」

格子のこちらからむこうにガベルが問いかける。スライサーはその格子をはさんだ外側から、何故かのんきに笑って床に座っているガベルを見て、絶叫した。

「お前のおかげで俺はなあ！」

「何だガティ、お前まで俺に愚痴か？シロと言いお前と言い、男の癖に過ぎたことをいつまでも根に持つな、みっともない」

「黙れこのストコドッコイ！大隊長の口添えがなかったらあの程度の処分ですむ話じゃないんだぞ！大体お前、移動時の装備しか積んでない機体で夜中に光弾使って戦闘する馬鹿までやらかすか？普通」

ガベルはその営倉入り一日目、一緒に後退したガトル・スライサーの小言のような愚痴のようなものを聞かされながらも、どこかのんきに笑っていた。

「まあまあ、お前の望み通り、俺あやりすぎの科で今こうして営倉に入ってるんだ。そう目くじら立てるなよ、な？」

「な？じゃない！俺が言いたいのはそういうっ……」

ぎゃあぎゃあとスライサーが格子越しに喚き続ける。やれやれ、うるさいやつだ、とやはりのんきに思いながら、何気にガベルは視線を上げ、その先に見えた女の顔に目を丸くさせた。

「カリナ？」

「何？カリナ？」

その声のスライサーも反応する。営倉のフロアの廊下をやってくるゆっくりとした足取りの彼

女は、その格子の前に辿り着くと、やや恐い笑顔でこう言った。

「ガティ、後は私が代わるわ。あなたもいろいろ忙しいんでしょ？このスットコドッコイさんのおかげで」

言葉に、スライサーとガベルはそれぞれの表情で口を閉ざす。スライサーは少しきょとんとしたような、ガベルは、どこかびくついたような、そんな目をしていた。やがて、

「んじゃ、後はカリナに任せるかな。俺が何か言うより効果もありそうだし」

そう言ってスライサーはためらいもせずガベルに背を向けた。つい今さっきまでその男をややもするとうとうしがっていたガベルは、

「っておいちょっと待てガティ、お前俺に説教たれることがあったんじゃないのか？」

がっし、と自分と相手とを隔てる格子をつかんで、半ばすぎるようにさえして問いを投げつけるが、

「俺もこう見えてヒマじゃないんだ、誰かさんの尻拭いでよ？ここは二人っきりにしてやるから、たまには恋人同士の語らいでもしててくれ。久々だろう？そんな時間も」

言い残し、スライサーは足取りも軽くその場を去っていく。蒼白な顔のガベルの手前、カリナはにこやかな笑みでスライサーを見送りながら、

「あら、気が利くわね、ガティ」

そろりそろりと座る位置を変えようとしたのはガベルだった。格子がある分には普段より安全だとは思いながらも、敵と距離を詰めない方が身のためだ、とでも思っているらしい。その行動に気づいて、カリナは言葉を放った。

「何してるのかしら？アル」

後退しかけていたガベルの肩が、その一言でびくりと跳ね上がる。にっこり、わざとらしすぎるほど作った笑みを浮かべて、カリナはさらに言葉を続けた。

「おイタして帰ってきて、とる態度がそうなの？えらくなったモンね？さすがはスーパーエリートでもスーパーエースとか呼ばれるだけのことはあるわねえ？」

声色も笑顔も恐い。そちらに振り返らず、ガベルは内心びくびくしながら言葉を返した。というより、半ば負け犬の遠吠えである。

「.....悪かったよ、機体、あんなにして」

「あら、殊勝じゃない。ちゃんと反省してるのね？」

「フェーンのやつを連れてったのも俺だし。二台とも一人でつぶしたようなモンだ」

言葉は、途切れる。カリナの反応がないことに不気味なものでも覚えたか、恐る恐るガベルは振り返る。カリナは黙ってそこに立っていた。笑ってもいなければ、怒ってもおらず、どちらかと言うと呆れているような、そんな顔をしていた。そして一つ、大きくため息をつく。

「言いたいことはそれだけかしら？最も、その辺りのことも大いに意見したいところだけど」

言葉の後、困ったようにカリナは笑った。ガベルは肩越しにその、どこか穏やかな表情を見る。

「カリナ.....？」

「この素敵な部屋から出て、その腕が完治したら、でいいわ。今回の侘びをしなさい。わかっているわね、高くつくわよ？」

居丈高な、少し大げさで滑稽な態度でカリナが言う。やっぱりそうくるかと思いながらガベルが口を開きかけた時、続けてカリナは言った。

「でも何より先に言わなきゃいけないことがあるのよ。いい？ちゃんと聞いてなさいよ」

ガベルは何も言わずに、続くその言葉を待った。ややもすると緊張の面持ちで。

「お帰りなさい。お疲れさま」

くすくすと、どこか楽しげにカリナが笑う。ガベルは一瞬あっけにとられて、それから、少し困ったような、照れくさそうな、それでいて苦いものの混じった笑みを口元に浮かべた。

「ったく……お前にやかなわねえよ、本当に」

夜間、前線近くにて無断で演習を行っていたとして、アストル・ガベルはひとまず営倉入り、フェーン・ダグラムは戦闘の際に負った骨折その他の治療のため、総本部基地内の第三医局にて二カ月の入院を余儀なくされた。そして、三日後。

「減俸四カ月、危険手当半年カット、訓告、営倉十日間ご招待……左遷」

「左遷？」

「隊長をクビになったついでに、移動だよ」

目の前で淡々と語るグランドの言葉を、フェーンは言葉もなくただ聞くのみであった。

「何だか……すさまじいですね」

「そうか？そのレベルですんで良かったと思うぞ？俺は」

フェーンはガベルの処分に対してやや放心気味でそう呟き、グランドは他人ごとだと言わんばかりに冷めた態度で言葉を返す。メルドラ隊はそのまま解隊、グランド、スライサーは元の配属先へと戻る事となった。元々メルドラ隊自体は期間の限定された部隊だったため、その結果が機関内に波紋を呼ぶこともなく、フェーンも当初予定されていた通り、総本部基地の警備部隊への配属が再決定するという運びとなった。もちろん現在は負傷の治療中のため、彼に関する事は全て保留である。

「お前も良かったな？大したおとがめがなく……つーか……」

言いかけて、グランドは言葉を濁らせる。様子がおかしいことに気付き、フェーンは首を傾げ、

「……何ですか？少尉」

「俺にもガティのくせが移ったか……何でもねーよ」問いかけにグランドは曖昧に答えたしほし黙り込んでから、フェーンは何気に思いついたことを口にする。

「隊長が責任を全て負ってくれたんですか？」

「……なんでわかるんだ、お前。勘が良過ぎだ」

フェーンの言葉にグランドは否とも応とも言わず、眉をしかめてただそう返した。

ラステル四国連合体建国歴五十六年、第三次ミネア交戦勃発。ラビスデン帝国側はそれまでの対ラステル軍事組織を再編成させミネアに侵攻。ラステルミネア地区の前線を一旦後退させるもそれ以上の戦果を挙げられず、逆に結集したラステル軍事特務機関ミッシュ・マッシュのマシン・メイス部隊によって撤退を余儀なくされることとなる。

同年、ミッシュ・マッシュにおいて新型汎用マシン・メイス「メルドラ」完成。三カ月の試用期間において実戦投入開始。同年同組織第二大隊内にて特殊部隊としてメルドラ隊が設置される。隊員数十三名、初代隊長ガトル・スライサー、副長シロ・グラント就任。この特殊部隊設置を機にミッシュ・マッシュにて重装マシン・メイスの開発が始まる。交戦のきっかけとなったミネア基地のラビスデン側からと思しきの襲撃について同帝国対ラステル外交官からの公式発表はなく、ラステル側もまたその件については事件があったという以外には言及に及ぶことをさけた。同年、フェーン・ダグラム入隊。十六歳の入隊はそれまでの最年少記録、十八歳を塗り替えた。第三次ミネア交戦の原因の一つとなった所属不明のマシンとの交戦にも参加し、そのニュースは国内を駆け巡った。

連合体建国歴五十七年、マシン・メイス「サヴァ」の量産化とともにサヴァによる大隊の編成始まる。サヴァ第一小隊初代隊長にアストル・ガベル就任。

同歴五十八年、マシン・メイス「リチ」完成。攻撃強化型マシンである。前衛型特殊部隊としてリチ隊、編成される。初代隊長にガトル・スライサー就任。同時にメルドラ隊隊長にシロ・グラントが就任。第四次ミネア・第一次ハルペール交戦、始まる。

五十九年、マシン・メイス「アシュム」完成。ならびに特殊部隊編成。この年までにマシン・メイス「リドル」「サヴァ」「ネイヴ」混成の二大隊が編成される。マシン・メイス部隊のみの師団の設置が急がれる。同年マシン・メイスの常識を覆す「クリーチャーズ」理論発表。これによって次世代機の開発が加速度的に盛んになる。

ラステル四国連合体建国歴六十年、戦争の更なる激化によりマシンメイスパイロットの受験資格、十歳にまで下げられる。同年、史上最年少のスーパーエリート誕生。

そして、戦争はまだその終焉を見せない。荒れ果てた大地が再び緑あふれる草原に帰るのは、遠い未来なのかも知れない。